



Title	IV 高等部の研究
Author(s)	宮崎, 耕二
Citation	長崎大学教育学部附属養護学校研究紀要. vol.15, p.141-206; 2002
Issue Date	2002-02
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/6280">http://hdl.handle.net/10069/6280</a>
Right	

This document is downloaded at: 2020-09-17T20:39:17Z

# Ⅳ 高等部の研究

## 研究の概要

高等部の研究は、アセスメント機能をもつ小・中・高等部一貫した内容表試案を作成するために、高等部段階で必要な指導内容の厳選を行うとともにそれらを一貫教育の視点から内容表試案に位置づけることを目的として行われた。方法として、現教育課程におけるすべての指導形態から指導内容を書き出し、意味的に似かよった指導内容を高等部として仮に設定した小項目へ、中項目へとラベリングしながらまとめる作業を行った。そして導かれた仮の中項目を「生活・仕事・余暇・態度」という4つのカテゴリーに分類し、そのカテゴリーごとに指導内容の厳選の視点を検討し、指導内容の厳選を行い「高等部の厳選された指導内容」として全体に送った。「厳選の視点」の特徴としては次のことがあげられた。

- ① 「自己理解、自己選択・自己決定」という視点が盛り込まれていること。
- ② 現行の教育課程編成時と同様の不易の視点、つまり、生徒たちが現在そして学校卒業後の生活を主体的に送るために必要な知識・理解・技能面の視点が盛り込まれていること。
- ③ 完全学校週5日制の実施にかかわって、地域参加に関する視点が分化してより詳細に位置づけられたこと。

そして、このような厳選の視点によって厳選された高等部の指導内容を小・中学部と調整を図りながら一貫した内容表試案として位置づけた。他部との調整において指導内容が統合されたり、文言や段階の修正が行われたりした指導内容もあったが、高等部段階で必要な中核的な指導内容が、4段階から10段階を目安として内容表試案に位置づけられていることが確かめられた。

後期の研究に着手するまでに次のことが課題として残った。

- 指導内容の過不足についてさらに検討すること。
- アセスメント機能をもたせることを念頭において作成したが、真に評価可能かどうか検討を行うこと。
- 内容表試案の個別移行支援計画としての活用の在り方について模索すること。

**Keyword: 教育課程, 内容表試案, 完全学校週5日制, 個別移行支援計画, 自己選択・自己決定, 自己理解**

(宮崎耕二)

## 1 はじめに

### (1) 高等部教育について

#### ① 高等部としての基本的なとらえ

高等部は本校教育の最終段階であり、これまで多くの生徒が、社会人として卒業していった。我々は、本校の小・中・高等部一貫教育のなかで、高等部の生徒を次のようにとらえている。小学部の「意欲づくり」から中学部の「基盤づくり」の教育をとおして、卒業後の社会参加、社会自立のための「適応づくり」の段階にいる生徒である。

「適応づくり」とは、小・中学部で自立を促すために芽生えて培われてきたものをさらに深め、確かなものにしていき、自分を見つめ、自分で考えて行動する力を高め、自立的な社会参加をめざすための教育である。

## ② 卒業後の生活を想定した教育

アフターケアにおける就労先訪問や青年教室などの卒業生の様子から、在学中の学習や経験したことが生き、充実した就労・家庭生活を送っている人がよく見受けられる。反面、余暇を楽しむこともあまりなく、就労先や家庭生活に不満を感じながら漫然と日々を過ごしている人がいることも事実である。なぜ、そのような状況になるのか、その原因を探ることが、卒業後の生活を豊かにするための高等部教育をより確かなものにしていく道標になると考える。

高等部開設（約30年前）当初、卒業生の進路はほとんどが企業就労であり、企業以外の選択肢が少なかったことから、就職が難しい人の進路は入所施設か在宅であった。その後、通所施設、小規模作業所などが新設され、進路先の選択肢は増えてきた。この数年の進路状況をみると、経済状況や雇用環境の変化、生徒の障害の重度化などにより、通所施設、小規模作業所など福祉的就労をする卒業生の割合が多くなってきた。家庭生活においても、CDやビデオのレンタル、テレビゲーム、カラオケなどによる余暇利用、急激な携帯電話の普及など、卒業生を取り巻く環境が急変してきている。また、就労後、通勤寮やグループホームなどで、仲間と一緒に自立をめざして生活する卒業生も増えている。

以前、自立に関しては、生活に必要な基礎・基本となる知識や技能を身につけることが強調され、「できないことをできるようにする」と考える傾向が強かった。しかし、最近は周りの人々や福祉サービスなどの援助や協力を求めることで、自分の意思に沿った生活ができれば、それこそが自立した生活であるにとらえるようになってきた。

卒業後の進路先、生活環境、自立の考え方などが、大きく変化している状況から、進路希望や卒業後の生活の在り方など、本人、保護者のニーズも、それに伴い様々になってきている。特に、保護者のニーズに関しては、本人が地域に暮らしながら、就労先に通わせたいという願いが強い。また、本人に仕事中心の生活を送らせるのではなく、休日には青年教室やバドミントンなどのスポーツサークルに参加したり、日舞などの習い事をしたりして、充実した余暇を過ごして欲しいという願いも強くなってきている。さらに、卒業時点で本人に対する教育が終わるのではなく、卒業後も本人の成長、発達を促すような学びの場を欲する保護者も増えている。

このように、多様化している就労・家庭生活において、卒業後自立した生活を送るために、高等部の指導内容が本当に必要な指導内容であるか、本人、保護者のニーズに応えることができる指導内容であるかが問われる時代になってきている。

### (2) 生徒の実態について

現在、27名（各学年9名）が在籍している。知的発達の側面からみると以下のとおりである。

知能指数	IQ20以下	IQ21～30	IQ31～40	IQ41～50	IQ51～60
生徒数	3名(11%)	8名(30%)	7名(26%)	7名(26%)	2名(7%)

精神年齢	1歳代	2歳代	3歳代	4歳代	5歳代	6歳代	7歳代	8歳代
生徒数	1名(4%)	2名(7%)	5名(19%)	4名(15%)	5名(19%)	6名(22%)	3名(11%)	1名(4%)

(%は小数点以下四捨五入)

障害の程度は、中・重度の生徒が大半を占めている。精神年齢では、3歳代から6歳代の生徒が多い。また、障害種別でみると、ダウン症10名、自閉症8名、それ以外の知的障害9名であり、ダウン症の生徒が若干多いが、障害種別の偏りはあまりない。

指導場面での生徒の様子をみると、作業に関しては、技能面の個人差はあるが、農耕、紙箱、陶芸の作業学習において、繰り返し経験すれば、手順を覚え、手指を使った作業も習熟し、長時間の立ち

仕事にも取り組めるようになる。身辺処理に関しては、着替えや排泄などで、声かけや援助を要する生徒はいるが大半は自立している。ただ、ひげ剃り、洗顔、整髪などの身だしなみに関しては、自分なりに気をつけているが、一人ではきちんとできない生徒もいるので、技能の定着を図るため、日常的に適時指導を続けている。コミュニケーション能力では、買い物学習で品物が見つからないときに、店員に尋ねたり、現場実習で会社の人や施設の職員に挨拶、返事、報告をしたりなど、学校内外での学習経験を重ねている。自分の意思を相手に伝えるなど、場に応じたコミュニケーションがとれるようになってきている。家庭での余暇利用をみると、友達同士またはボランティアと一緒に、映画やカラオケ、ボウリングなどを楽しむ生徒が増えている。また、家の中でCDを聞いたり、テレビゲームをしたりなど、一人で余暇を楽しく過ごす生徒もいる。進路に関しては、作業学習、校外実習、現場実習の経験をとおして、仕事の技能や適性を理解し、卒業後の生活を考え、自分に合った進路先を選択し、決定していくことができるようになる生徒たちである。

生徒の様子をみていくと、日々成長していることが窺われる。これは、小・中学部の教育で培われたものを基礎として、高等部において自立的な社会参加をめざすための指導に心がけているからだと考える。

### (3) 現行の教育課程の運用の状況

#### ① 指導内容、指導形態について

現行の教育課程は、昭和56年の研究紀要第5集「教育課程の編成」に基づいている。その教育課程は、生徒の実態を十分に把握し、卒業後の望ましい生活の様相に鑑みて、「何が、今、必要なのか」「それを指導していくにはどのような学習のさせ方があるか」という視点で教育内容が求められた。図-1にあるように、求められた教育内容と高等部教育に期待する全体像との関連を図るなかで、図-2にある「くらし」「しごと」「たのしみ」「からだ」の指導領域が求められ、それから現行の指導形態と具体的な指導内容が導き出された。

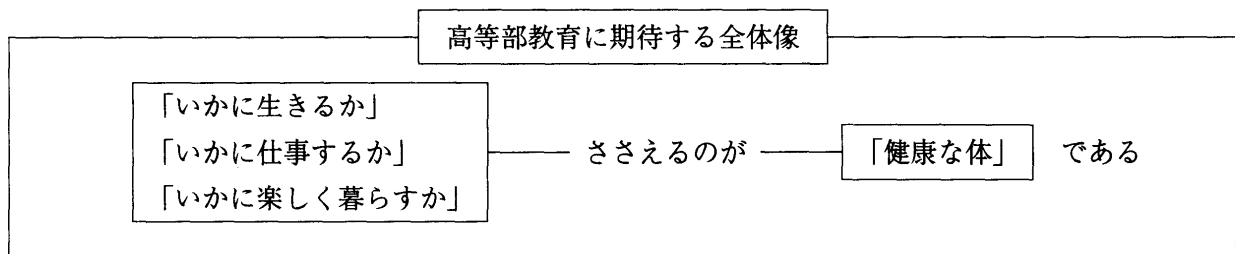


図-1：高等部教育に期待する全体像

「いかに生きるか」の視点で求められた指導領域……………「くらし」
・毎日を生きていく日常生活に必要な知識、技能を高めようとするまとめり (指導形態：生活Ⅰ，ホームルームなど)
「いかに仕事するか」の視点で求められた指導領域……………「しごと」
・職業生活を営むために身につけさせたい必要な知識、技能および態度のまとめり (指導形態：紙箱，陶芸など)
「いかに楽しく暮らすか」の視点で求められた指導領域……………「たのしみ」
・日常の生活を楽しく、より豊かに暮らすために、求めさせ、身につけさせたい楽しみのまとめり (指導形態：スポーツ，クラブ)
「健康な体」の視点で求められた指導領域……………「からだ」
・頑健な体づくりをめざすまとめり (指導形態：朝の運動)

図-2：指導形態につながる指導領域

## ② 単元別指導内容計画表と個別の指導計画

現行の教育課程の編成後、日々の実践を月別の単元別指導内容計画表により、計画し、実践し、反省していき、常に改善、充実を図ってきた。また、平成12年度より、個別の指導計画が導入されたことにより、生徒一人ひとりの実態をさらにきめ細かく把握し、今まで以上に個に応じた実践が求められるようになった。これは、指導目標、指導内容をより個別に明確化することを意味している。それに連動して単元別指導内容計画表においても、さらに生徒一人ひとりを大切にされた指導内容や学習活動を計画するようになり、より一層の改善、充実が図れるものとする。

### (4) 本研究の意義・必要性

#### ① これまでの教育課程の改善

特に、学期末、年度末において、指導内容や行事など高等部の教育課程に関する反省を重点的に行ってきた。第2、第4土曜日の休業日に伴う授業時数減、生徒の障害の重度化や余暇の過ごし方の変化などにより、映画鑑賞会の年2回実施を1回に削減したり、ホームルームの楽しみに関する題材で、切手収集をCDレンタルに変更したりするなどの見直しや改善が図られた。これまでの教育課程の反省では、適時、見直しが必要と考えられる指導内容の単元、題材、活動などについての修正変更をしてきたが、全指導内容を見直して、改善するまでには至っていない。

#### ② 高等部における本研究のとりえ

先に述べたように、卒業後の進路、生活環境、自立の考え方、本人、保護者のニーズなどが大きく変化してきた。また、平成14年度からの完全学校週5日制による授業時数減、新学習指導要領による個別の指導計画、自立活動、総合的な学習の時間の導入、特色ある学校づくりなど、学校教育に関しても大きく変化している。これらのことから、高等部教育も新たな局面を迎えようとしている。このような時期をとらえて、現行の教育課程を見つめ直し、改善を図ることは非常に意義があるとする。

これからの高等部教育には、自立をめざす生徒に対して、個を的確に把握し、本当に必要な指導内容をもって、個に応じた教育を実践されることが、さらに強く求められるようになるものとする。

本研究で求める内容表試案の中核的な指導内容は、どの生徒にも必要とされる厳選された基礎・基本となる指導内容である。まさにこれからの高等部教育に求められるものに合致するものとする。また、内容表試案はアセスメント機能をもつので、個々の実態を客観的に把握し、保護者との共通理解も図りながら、次に指導すべき指導内容を選定し、実践に生かすことができるものである。これは、指導計画をより適切かつ具体的にすることを意味しており、単元別指導内容計画表および個別の指導計画をさらに改善、充実させるものである。そして、今後、高等部では個別移行支援計画の作成にも着手していかなければならないものとする。それにおいても、本研究の内容表試案は大変有用なものになると予想される。

これまで述べてきたように、高等部教育において、本研究は大変意義あるものである。本研究により、教育課程の改善が図られれば、自立をめざす高等部生徒への指導実践が、より一層充実していくものとする。

(山田勝大)

## 2 目的

小・中・高等部一貫したアセスメント機能をもった中核的な内容表試案を作成するために、高等部段階における中核的な指導内容の厳選を行うとともに、それらを一貫教育の視点から内容表試案に位置づけることを目的とする

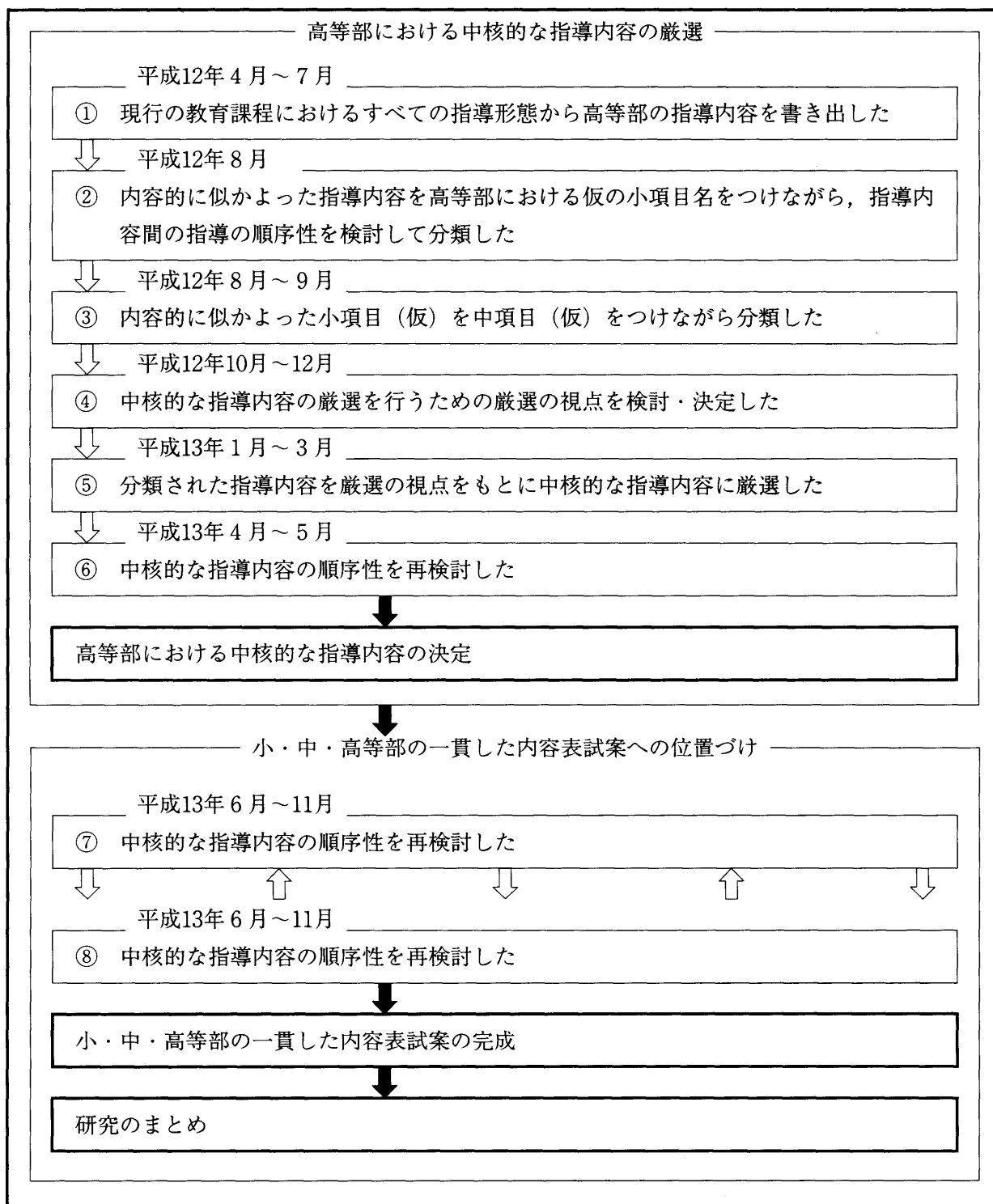
### 3 研究の方法

#### (1) 全体研究手続きにおける高等部研究の位置づけ

P. 8～P. 10に示した全体研究の手続きに従って高等部研究を進めた。具体的には全体研究計画の手続きに示した「小・中・高等部別の内容表試案の作成」, 「小学部・中学部・高等部の部別研究会での中核的内容の厳選」を高等部の立場から検討した。

#### (2) 高等部研究の手続き

高等部の研究手続きを以下に示す。



### (3) 具体的な手続き

(※、以下の○番号は「(2) 高等部研究手続き」に示した○番号と対応している)

#### ① 現行の教育課程におけるすべての指導形態からの指導内容の書き出し

次に示す指導形態などから指導内容を書き出し、指導内容の表記のレベルについて高等部教官9名で共通理解を図った。指導内容の表記のレベルは「平成元年度学習指導要領資料の各教科の具体的内容」のレベルにそろえた。

- 生活Ⅰ（言語・数量）、生活Ⅱ、生活Ⅲ、ホームルーム、経験作業（紙箱・陶芸）、生産作業（農耕・紙箱・陶芸）、朝の運動、スポーツ、クラブ、日常生活の指導、生活単元学習（合宿、文化祭、運動会、現場実習、校外実習、卒業記念制作、修学旅行）、集会、生徒会、儀式、学級会、遠足、映画鑑賞、進路先見学、現場実習先見学

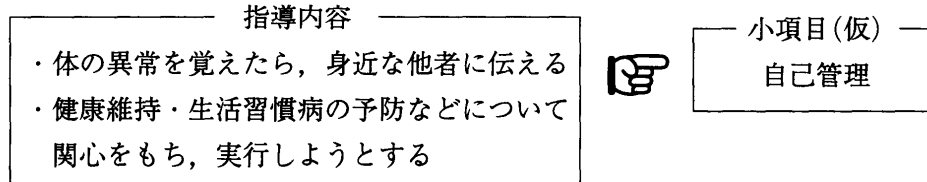
#### ② 内容的に似かよった指導内容の仮の小項目への分類と順序性の検討

ア ①で書き出されたすべての指導内容を内容的に似かよったものに分類した。

イ 分類された指導内容のまとまりごとにそのまとまりが意味するものを考え、仮の小項目名をつけた。

ウ 分類された小項目（仮）ごとに、文献や教師の経験知などから指導内容の順序性について大まかに検討した。

(例)

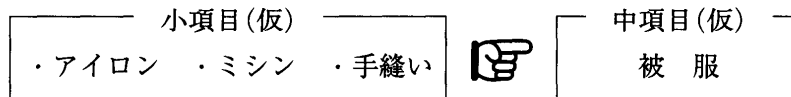


#### ③ 内容的に似かよった小項目（仮）の、中項目（仮）への分類

ア ②でまとめられたすべての小項目（仮）を内容的に似かよっているものに分類した。

イ 分類された小項目（仮）のまとまりごとに、そのまとまりが意味するものを考え、中項目名（仮）をつけた。

(例)



#### ④ 厳選の視点の検討・決定

ア 高等部でめざす生徒像、生徒の実態、卒業生の生活の様子、新学習指導要領などを共通理解した。

イ アに基づき「生活・仕事・余暇・態度」の4つのカテゴリーごとに厳選の視点を導き出した。

#### ⑤ 厳選の視点に基づく中核的な指導内容の厳選

「生活・仕事・余暇・態度」の4つのカテゴリーごとの厳選の視点に基づいて、それぞれのカテゴリーごとに整理された指導内容の一つひとつを検討し、中核的な指導内容とそうでないものとに整理

した。なお、中核的ではないと判断された指導内容については、今回の内容表試案には記載しないが、高等部の指導内容表にはストックしておき、それらの指導内容が必要な生徒に対しては、随時取り出して指導を行えるようにした。

#### ⑥ 中核的な指導内容の順序性の再検討

文献や教師の経験知などから、小項目（仮）のまとめりごとに高等部の中核的な指導内容の順序性について検討し、4段階から10段階を目安として配列した。

#### ⑦ 縦割り研究会における中核的な内容の調整

縦割り研究の4つの班（「情報処理・知的内容グループ」、「日常生活グループ」、「仕事グループ」、「身体・情操グループ」）に高等部の教官がそれぞれ入り、高等部の立場から意見を述べるとともに小・中学部との調整を図った。

#### ⑧ 高等部の立場から内容表試案の検討

縦割り研究会において出された意見を高等部にもち帰り、再度高等部の中核的な指導内容の修正や段階の調整などを行った。なお、⑦と⑧を交互に行うことで、縦割り研究会と高等部研究会それぞれの意見がより反映されるようにした。

（宮崎耕二）

## 4 結果と考察

### (1) 内容表試案作成上の基本的な考え方

今回、小・中・高等部をとおしての一貫した、本校で指導する中核的な指導内容を取りあげた内容表試案を作成したが、その際、高等部としては次の5つの点を重要と考えた。

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>① 高等部で指導する内容を網羅した一覧表</li><li>② 生徒を12年間という長いスパンでとらえ、一人ひとりの実態をよりの確に把握できる</li><li>③ 高等部卒業後の生活において、個々の生徒の資料として活用できる</li><li>④ 「適応づくり」を具現化した内容のまとめりである</li><li>⑤ 今の生徒の実態と同時に、社会環境にも即した内容のまとめりである</li></ol> |
|---|

まず、これらについて述べておきたい。

#### ① 高等部で指導する内容を網羅した一覧表

現行の教育課程が作成された当時の研究紀要第5集においては、すべての指導内容を7つの小項目のまとめり（ことば、つきあい、くらし、しごと、たのしみ、からだ、たいど）にわけて考えられていた（内容領域）。そしてこれらを「くらし」「しごと」「たのしみ」「からだ」の4つの指導領域にわけて現在の指導形態を設定し指導していた。指導形態ごとに単元別指導内容計画表を作成し、常にその内容に修正を加えながら現在に至っているのだが、各指導形態の内容すべてをまとめた一覧表はなかった。そこで、まず本校高等部で指導する内容を整理した一覧表が必要であると考えた。

#### ② 生徒を12年間という長いスパンでとらえ、一人ひとりの実態をよりの確に把握できる

本校は小・中・高等部と一貫した教育ができるという利点がある。そこで、各部で指導する内容を一つの表にまとめることは、生徒たち一人ひとりの成長を、高等部だけの3年間ではなく、12年間と



いう長い目でとらえることができ、他部との連携も図りやすく、現行の教育課程作成当初からの課題であった、小・中・高等部の一貫性ということもこの表における内容をとおして考えることができる。また、チェック機能がついているということは、これからの課題となることがわかると同時に、高等部に至るまでの発達の過程がわかるという面でも意味がある。

### ③ 高等部卒業後の生活において、個々の生徒の資料として活用できる

在学中に活用することと同時に、高等部として、卒業後を考えたときにもこの内容表試案は意味をもっている。卒業時点で内容表試案の役割が終わるのではなく、企業や施設あるいはグループホームなど様々な場で生徒たちが生活していく際、一人ひとりの内容表試案の記録が具体的な資料となって欲しい。そうすれば、それぞれの実態に応じた支援を受けることが可能となるだろう。学校と家庭と進路先が内容表試案をとおして生徒の実態と課題を共通理解することは大きな意味がある。つまり、この内容表試案が個別移行支援計画作成の基礎資料となると考える。

### ④ 「適応づくり」を具現化した内容である

生徒たちに身につけて欲しいと我々が思う内容にはきりがなが、限られた学校生活のなかで指導できるものには限界がある。そこで、内容を厳選しながらも、高等部の教育目標である「適応づくり」、すなわち「自分をみつめ、自分で考えて行動する力を高め、自立的な社会参加をめざす」ことをより具現化するものとして、今回の「内容表試案」は重要な意味をもってくる。高等部は学校生活の出口であると同時に、社会生活への入り口でもあるというその性格上、どうしても卒業後のことを重視する必要がある。学校で身につけたことが、卒業後の生徒たちの生活に自ずと生きてくるような性格をもつものとして、高等部では今回の内容表試案をとらえている。

### ⑤ 今の生徒の実態と同時に、社会環境にも即した内容である

近年、生徒達を取りまく環境は、現行の教育課程作成当時と大きくさまがわりしている。社会経済の変動に伴う厳しい雇用状況や、様々な文化・情報面における施設や機器類の発達はその一例であろう。また、それと同時に、保護者や周囲の人々のニーズそのものが変化してきていることも大きな特徴といえよう。つまり、働く生活と供に、より自分らしく楽しみをもった生活も重視して過ごさせたいという考えが出てきていることである。現行の教育課程作成当時のように、「卒業後は企業就労を」という考え方のみではなく、小規模作業所などでの就労も視野に入れて、働くということをいろいろな角度から見つめるようになってきた。また、障害の重度化といわれて久しいが、本校でもその傾向はあり、生徒の実態が変化していることも確かである。

次に、次年度から始まる完全学校週5日制に伴う授業時間数の減少から、これまでの指導内容をすべて学校で指導することはできない状況になってきた。そこで、学校よりもむしろ家庭や地域で行った方が現実的であるような指導内容は思い切って厳選する必要もあるだろう。

以上のような点を高等部では基本として押さえながら今回の内容表試案作成に取り組んだ。

## (2) 高等部の厳選の視点

高等部におけるすべての指導内容を拾い出してみると、日常生活的なこと、言語的なこと、数量的なこと、作業的なこと、体力的なこと、楽しみのこと、態度的なことなどに関する指導内容が浮かび上がってきた。今回、厳選の視点を考えるにあたって、生徒たちの日々の生活を考えた場合、我々はそれが大きく次の4つに分けられると考えた。

生活・・・言語や数量，その他の日常生活に関するもの

仕事・・・作業的なことやそれに伴う体力的なこと

余暇・・・楽しみに関すること

態度・・・社会人として生活する際の態度的なこと

更に，生活に関しては，内容的なことから言語，数量，衣食住，地域生活という4つに再分割して考えることにした。以上のようなカテゴリーにすべての指導内容を分類したうえで，高等部がめざす生徒の姿や，生徒の実態，卒業後の生活や社会背景などを話し合い共通理解し，それを念頭におきながらそれぞれのカテゴリーごとに指導内容の厳選の視点を導き出した。ここでは，各カテゴリーとそこにおける具体的な厳選の視点について述べてみる。

### ① 「生活」

ここでは，日常生活を送るうえで基本となる言語・数量的なことや生活技能面，そして他者とのかわりに関することや地域でより快適に生活するための手段などに絞って考えた。すなわち，生徒たちが今後社会においてごく自然に人とかわりをもち，人間関係や行動範囲を広げ，限られた場所ではなく地域の人々と一体になって生活に潤いをもちながら過ごしていくために必要なものとして次の4つの点から厳選の視点を考えた。

- ア 「言語」
- イ 「数量」
- ウ 「衣食住における自立に向けて」
- エ 「地域で生活するうえで必要なこと」

#### ア 「言語」における指導内容の厳選の視点

「言語」における厳選の視点は次の2点である。

厳選の視点1 「自分のことを相手に通じるように伝える」

厳選の視点2 「他者から（物からも含む）の発信を理解する力を高める」

#### (ア) 厳選の視点1 「自分のことを相手に通じるように伝える」

これは，社会生活を送るうえで，特に必要不可欠となる基本的な技能であり，すでに小・中学部で基礎的・系統的学習を行っており，小林（2001）が述べた象徴的コミュニケーションとともに，情動的なコミュニケーションに関しても深まりがみられる。その一方で，自分の要求や意思をまだ未分化な表現方法（例えば，のどが渇いたときに泣くなど）でしか伝えられない生徒もいる。身近な者（教師や保護者）にはその行為の意味が理解できるが，一般の社会では理解してもらえないであろう。特に，高等部においては卒業を控え，在学中も校外に出ていくことが多く，また今後完全学校週5日制も始まり，地域の人々とのかわりをもつ機会もさらに増えてくる。自分の要求や意思を一般的に伝わりやすい表現方法に分化させることが重要である。そこで音声言語の他に，非音声的な言語，書くことによる伝達も含め，他者が理解しやすい表現方法を身につけさせることが必要であると考えた。また，伝わりやすさだけでなく，「言葉遣い」などの社会的な場面に応じた使い方も，社会生活を営むうえで重要な要素になると考える。以上のことか

ら厳選の視点としてとらえた。

**(イ) 厳選の視点2「他者から(物からも含む)の発信を理解する力を高める」**

自分から発信するだけでなく、相手からの情報を受信すること、そして再びこちらからの発信へとつながることで、コミュニケーションはより深まっていく。他者との関係をより深めるためにも受け取って理解することは大切である。次に情報の獲得という点から考えると、テレビやラジオ、あるいは新聞や本、手紙などからの情報を受信することも生活していくうえでは大変重要である。この場合も、その中身を正しく理解することが必要である。獲得したものを自分の生活のなかに生かしていくということは、より社会に適応していくためにも大切である。いずれにしても、視覚的、聴覚的な手段により、発せられた情報を受け取りその内容を理解することで人間関係や日常生活のなかに生かしていけるということである。具体的には、「聞き取り」や「読み取り」などの技能的なことであるが、それを支える態度的な面(聞こうとする姿勢など)の育ちも併せて考える必要がある。以上のことから厳選の視点としてとらえた。

**イ 「数量」における厳選の視点**

「数量」における厳選の視点は次の3点である。

厳選の視点3「正確に数える」

厳選の視点4「時間、量、長さなどの数量的な感覚」

厳選の視点5「実務的なこと」

**(ア) 厳選の視点3「正確に数える」**

数えるということは、職場に限らず家庭での日常生活のなかで極めて重要な位置を占めているといえよう。普段の生活においては、個数を確認しながら買い物をするのはよくある。また、職場においても、できあがった製品を数えたり数を確認しながら作業を行ったり、あるいは指示された数だけ品物を取ってきたりと頻繁に要求される技能でもあろう。ただし、前者の場合は数え方に若干の誤差があっても許されるであろうが、後者の場合は「正確に」ということが大切になってくる。基本的には一つずつでも正しく数えることができればよいが、大量に品物を扱う場合などは早さと同時に大きな数を数えることも要求されてくる。そこで、具体的な方法として2や5、10ずつのまとまりをつくりながら数えるということが重要になってくる。要求されたことに応えることができ認められると、自分の自信へとつながりさらに意欲的に取り組めるようになる。以上のことから厳選の視点としてとらえた。

**(イ) 厳選の視点4「時間、量、長さなどの数量的な感覚」**

生徒たちは現在、学校という特殊な環境のなかで昼間の生活をしている。そこでの時刻は「長い針が5にくるまで」とか、長さや量においては「〇〇の線まで」などのように具体的に指示が出され、生徒が考えたり行動したりしやすいような状況がつくられている。ところが、卒業後の社会での生活を考えると、「あと5分」とか「もう少し長く」や「10・くらい」などの曖昧な表現が頻繁に使われる。特に時間においてこのような感覚が身につく(おおよそどれくらいかかるのか、それならばどれくらいに出ればよいのかなど)と、先を見通した行動へとつながっていく。あいまいな指示であっても、ある程度イメージをもち行動したり理解したりできるようになることが大切である。以上のことから厳選の視点としてとらえた。

**(ウ) 厳選の視点5「実務的なこと」**

消費生活を送る我々にとって買い物というのは日常生活には欠かせないものである。買い物学習などを本校でも積極的に取り入れて実施している。小・中学部で培ってきた基礎的な指導内容をふまえて、高等部ではより実生活に即した実務的なことが重要になってくる。つまり、欲しい

と決めた物は何でも買うというように、ただお金を使うだけでなく、自分の小遣いに合わせた買い方のように、自分でお金を管理することが将来的には必要であろう。正しく使って正しく管理できることが、本人の豊かな充実した生活に結びつくと考える。以上のことから厳選の視点としてとらえた。

#### ウ 「衣食住の自立に向けて」の厳選の視点

「衣食住の自立に向けて」の厳選の視点は次の4点である。

厳選の視点6 「家庭生活に生きる技能」

厳選の視点7 「道具や器具の使い方」

厳選の視点8 「健康・衛生管理」

厳選の視点9 「身辺面でのエチケット・マナー」

#### (ア) 厳選の視点6 「家庭生活に生きる技能」

家庭とは必ずしも自宅とは限らず、将来的に施設やグループホームなども含めて、生徒が居住する場の生活として考える。そのような場で生徒たちが主体的に過ごす姿を考えると、いわゆる家事を一通りできる力というのは重要である。それは、部屋の掃除や身の回りの片付けなどの基本的なことから、生活するうえで必要な小物を作ったり、調理や手芸をしたり、あるいは壊れた物を修繕したりすることが考えられる。このような技能的な面は生徒たちの生活に直結するもので、まさに生活に生きるものである。自分のことは自分でできる力が高まれば高まるほど、自らの生活に自信をもつことができ、自立した生活へとつながっていく。ここで大切なことは、ただ、教え込むのではなく、なぜ、それが必要なのかということ、生徒自身に卒業後の生活や、親なき後（実際のこととしてイメージするのは簡単ではないだろうが）のことと関連させながら、自らその必要性を感じさせることである。以上のことから厳選の視点としてとらえた。

#### (イ) 厳選の視点7 「道具や器具の使い方」

ここで、道具や器具として取りあげたのは、先に述べた「生活に生きる技能」のなかでも特に電化製品を含め様々な利便性の高いものを扱える技能を身につけることが、より現実的に生徒たちの生活に即しているからである。例えば、調理においては包丁が使えなければ、皮むき器を使えばよいし、細かい調理方法がわからなくとも電子レンジを使えば簡単に調理ができるものもある。また、掃除機や洗濯機、アイロンなども日常的に使用されるものとして、その基本的な使い方はぜひ理解させておきたい。いずれにしても重要なことは、これらの道具や器具の便利さを知ることで、身の回りのことを自分で処理しようとする主体的な行動を身につけることである。以上のことから厳選の視点としてとらえた。

#### (ウ) 厳選の視点8 「健康・衛生管理」

生徒たちが自らの生活を生き生きと主体的に送るための基本となるのが健康である。自分の体のことを理解し健康状態の異変に気づいたら、できる範囲内で対処する（保健室・病院などの利用や他者に助けを求めることも含めて）力を身につけ、自らの体を守ろうという意識をもって欲しい。しかし、実際生徒たちの様子を見ると、肥満傾向の生徒や定期的な服薬の必要な生徒、あるいは日常生活面で配慮を要する生徒などが多い。しかし、そのような自分の健康上の問題を理解し対処できている者は少ない。そこで、体調を崩したり、病気になったときの対処の仕方だけでなく、それを未然に防ぐための知識、例えば偏食をしないことや適度な運動の必要性などを理解させることが大切である。また、これらにつながる基本的なこととして、手洗い・うがいの励行や食後の歯磨きなどの衛生管理については習慣として身につけておくことが必要である。以上のことから厳選の視点としてとらえた。

## (エ) 厳選の視点9「身辺面でのエチケット・マナー」

身辺処理におけるエチケット・マナーは、生徒たちが社会生活を送るうえで最も基本的なスキルの一つであり、確実に身につけて欲しい生活課題である。本校の一貫教育の視点から見ても、小学部において毎日の日常生活の指導で身につけた基本的な生活習慣を、中学部でより確かな身辺処理能力として定着させ、高等部でそれらの基本をふまえて、状況や場に応じた行動として確立できることが望まれる。しかし、実際は、「口のなかに入れた物を吐き出してまた食べる」「食事に大変時間がかかる」などの食事のマナーの悪さや、「髪をとかしていない」「ひげを剃っていない」「顔を洗っていない」といった身だしなみや清潔に対する気持ちに欠ける生徒が少なからずいる。周囲の人に不快感を与えないということは、社会のなかで自立した生活を送る際の最低限のルールである。一人の大人として生徒たちを社会に送り出す高等部の段階では、清潔・身だしなみといったエチケットやマナーに関することは極めて必要性の高いものである。以上のことから厳選の視点としてとらえた。

## エ 「地域で生活するうえで必要なこと」における厳選の視点

「地域で生活するうえで必要なこと」における厳選の視点は次の4点である。

### 厳選の視点10「公共施設」

10-a「生活そのものに直結した公共施設」

10-b「生活の楽しみや潤いにつながる公共施設」

### 厳選の視点11「公共交通機関」

### 厳選の視点12「危機管理」

### 厳選の視点13「対人関係」

13-a「集団を意識したマナー」

13-b「大人の男女を意識したかかわり」

13-c「礼儀や節度をわきまえたコミュニケーション」

## (ア) 厳選の視点10「公共施設」

厳選の視点10-a「生活そのものに直結した公共施設」

厳選の視点10-b「生活の楽しみや潤いにつながる公共施設」

在学中は、生徒たちの生活の場のほとんどを学校と家庭が占めている。しかし、休日の有効な過ごし方や卒業後の生活を考えると、生徒が居住している地域や就労先などの生活の場において、より便利に快適に過ごしていけるような方法を教えていく必要がある。その一つとして、公共施設の有効な利用ということが考えられる。生活の楽しみや潤いにつながるような公共施設の利用は、完全学校週5日制の実施や生徒の卒業後の過ごし方に大きくかかわってくるだろう。

一方で、仕事について相談できる施設や、障害から出てくる諸問題や悩みの解決、あるいは様々な手続きに必要な公共施設など、生活していくために必要であり、生活そのものに直結した公共施設の利用という視点も欠かせない。状況に合わせて自分に必要な公共施設を選んで利用していくことができると、充実した生活につながり、自ずと高等部の教育目標である「社会への適応」「自主独立」「行動する力」へと発展していくと考えられる。また、そうすることが社会で生きていく自信につながるだろう。そこで、公共施設をさらに二つの具体的な視点に分けて厳選の視点としてとらえた。

## (イ) 厳選の視点11「公共交通機関」

高等部の生徒は、電車やバスなどの公共交通機関を利用して、独りで通学している生徒がほとんどであり、自分にとって日常的に必要な公共交通機関を利用する力はある。卒業後の生活にお

いても、通勤などでその利用が必要となるであろう。また、通勤や通学だけでなく、今後は休日の過ごし方、つまり生活の楽しみや社会参加の幅の広がりから公共機関の利用の指導は重要となってくる。前述の「厳選の視点10 公共施設」の利用にも大きくかかわってくる。保護者や教師と一緒に利用するだけでなく、それを出発点として、友達と一緒に、あるいは自分一人でも利用できるというように発展していけるとよい。以上のことから厳選の視点としてとらえた。

#### (ウ) 厳選の視点12「危機管理」

社会参加の幅が広がるに伴い、予期せぬ出来事や場面に遭遇したり、危険な目に遭ったりする可能性も必然的に高くなると考えられる。常に身を守ってくれる者がそばにいるとは限らない。危険に対する知識とともに、危険を自分自身で未然に防ごうとする姿勢や防ぐ方法、危険に直面したときの対応の仕方などは、在学中から少しずつでも知らせていく必要があると思われる。特に性被害に関しては、中学部において模擬誘拐などを行い強く意識づけが行われている。実際、車中から声をかけられたり、バス停で座って待っているときに不審な男性に声をかけられ手を握られたりした生徒もいる。その生徒は、近くの店に助けを求めに行き、学校にも電話をかけてくるなど、正しく判断して行動できたが、このような危険性はすべての生徒に起こりうる。好ましくはないが、現在の社会環境を考えると、決して無視できない大変重要なことである。以上のことから厳選の視点としてとらえた。

#### (エ) 厳選の視点13「対人関係」

13-a「集団を意識したマナー」

13-b「大人の男女を意識したかかわり」

13-c「礼儀や節度をわきまえたコミュニケーション」

学校生活においても対人関係は大切である。学校生活という限られた人やなじんだ場でも問題を起こしたり、戸惑ったりすることが多い生徒たちである。社会参加の幅が広がるに伴い、場への適応や対人関係などで今まで以上に苦労することが予想される。場への適応力と対人関係を円滑にしていく力や態度を養っていくことが必要となるであろう。そのためには、自分の置かれている状況を理解して集団を意識することや、その場の決まりを守ること、場をわきまえることなどのマナー面の指導が大切である。また、大人社会で通用するような、大人の男女を意識した付き合い方や振る舞い方という視点も必要となる。そして、話し方や応答の仕方などを含むコミュニケーションの力とともに、大人としての礼儀や節度をわきまえた対人関係の築き方も大切な視点といえるであろう。そこで、対人関係をさらに三つの具体的な視点に分けて厳選の視点としてとらえた。

### ② 「仕事」

ここでは、将来の働く場面での基礎となることを、作業学習をとおして身につけさせたいと考えている。一般に仕事といっても、その内容は多岐にわたり、先に述べた「言語・数量的な面」をはじめ、「作業的な面」「生活的な面」「態度的な面」などのすべてに関係している。つまり、仕事における内容には、多くの直接的には結びつかないがその基礎となり土台となる内容と、その上に積み重なり仕事をしていくために必要となる指導内容があると考えられる。そこで、ここでは特に後者の点に絞って指導内容を厳選していくことにした。厳選の視点は次の6点である。

厳選の視点14「作業を行ううえでの態度」

厳選の視点15「対人関係・コミュニケーション」

厳選の視点16「手指機能」

厳選の視点17「理解」

厳選の視点18「持続力」

厳選の視点19「作業に対する喜び」

#### (ア) 厳選の視点14「作業を行ううえでの態度」

これは、作業や仕事に対する構えと指示を受ける際の態度的なことで考えた。作業学習においては、自分から取り組もうとする意欲的な姿勢や、失敗してもあきらめずに粘り強く取り組んだり、あるいは単調な同じ作業でも根気強く最後まで丁寧に行ったりする姿勢を育てることが重要である。その姿勢は将来の就労生活においても大切なことなので、ぜひ身につけさせておきたいことである。次に、説明を聞く態度や示範を見ようとする姿勢などは、注意されなくても自分から意識して注目することが望ましい。また、指示どおりに、あるいは決められたとおりに行う姿勢も大切である。将来共同で作業などを行う場合、自分の勝手な判断が周りに大きな迷惑をかけてしまう可能性がある。ちょっとした指摘や注意を受けて気持ちが乱れてしまうのではなく、落ち着いて聞き、間違いは素直に受け入れるという自分で自分をコントロールできる力は大変重要となってくる。これらのことは大人、あるいは社会人として誰にとっても必要なことであるがゆえに、生徒たちにもぜひ十分身につけて欲しいと考える。以上のことから厳選の視点として考えた。しかし、これらが生徒たちに本当の力として身につくためには、我々の指導以上に、後述する「厳選の視点17 作業に対する喜び」が大きく影響を与えると思われる。生徒自らが、作業、あるいは製品などに達成感を感じたときに、よりよいものを作ろうという「向上心」が芽生え態度面も自ら成長すると考えられる。

#### (イ) 厳選の視点15「対人関係・コミュニケーション」

対人関係については、「厳選の視点13 対人関係」においても述べたが、学校における作業学習では、2、3年生が一緒に作業を行っている。異なる年齢の者同士が共同の作業の場で活動するということをとおして、将来の就労生活における対人関係の基礎につながることも望んでいる。しかし、学校内ではどうしても友達感覚が抜けきれないことや、多少あいまいな表現でも周りがわかってくれるという甘さもある。現場実習などで実社会での経験をするが、はじめはよくても慣れてくると友達感覚になり、問題が生じてくることも多い。相手との意思の疎通をできるだけスムーズに行うことと、相手に不快を与えないということは将来の就労場面を考えた場合、自分のためにも必要不可欠のことといえる。卒業生のなかには、人間関係がうまくいかず、職場を変わらざるをえなくなったということもある。周りからの理解と同時に、自分自身でより他者と円滑にやっつけようとする姿勢も大変重要なことである。以上のことから、仕事においても厳選の視点としてとらえた。

#### (ウ) 厳選の視点16「手指機能」

生徒たちの就労先に違いはあれ、手先を使った作業は必ずあるとあってよい。それは、箱折りであったり、ミシンを使うものであったり、あるいは農作業であったりするかもしれない。より細かな指先の動きが必要となる場合もあれば、むしろ腕や体全体を使う場合もあるだろう。しかし、いずれの場合も手指の動きというものはその基本となる。技能的に少しでも向上することは大切なことであり、生徒自身の喜びや満足感にもつながる。そのために、手指の動きをできるだけ高めしておくことは重要である。そこで、厳選の視点としてとらえた。しかし、手指の動

きを高めることのみに偏るのではなく、現在もっている生徒の技能を活用してできる仕事という視点も大切であると考ええる。

#### (エ) 厳選の視点17「理解」

作業を行ううえで、その工程を覚えたり、指示を理解したりする力は必要不可欠である。この場合、聞いて理解できることも重要だが、見て理解できることも大切である。つまり、模倣力の大切さである。言語理解が難しい生徒には特に見て覚えるということが重要になってくる。また、周りの状況を見て、自分がすべきことが理解でき、行動に移せるようになるとさらに自分の仕事に幅が出てきて、より多くの経験をしながら自分自身を高めていくことができると同時に、周りからの信頼も高まるであろう。他者から信頼されることが、逆に他者に配慮することにもつながっていきと考えられる。以上のことから厳選の視点としてとらえた。

#### (オ) 厳選の視点18「持続力」

最近の進路先をみると、厳しい社会状況ということもあってか、通所作業所に進むことが多い。そこでの作業時間はおおむね6～8時間前後である。その間、きちんと作業を続けられるだけの体力は最低限必要である。激しく筋力を使うことはないが、同じ姿勢でずっと作業を続けることの方が逆に筋肉を強ばらせ負担にさえなる。また一方で、からだ全体を使った、重労働ともいえる作業に就く生徒もいないことはない。この場合は、まさにかかなりの筋力を長時間使い続けるだけの体力が必要である。いずれにしても、続けられるということが基本的に必要なことであり、厳選の視点の一つとしてとらえた。

#### (カ) 厳選の視点19「作業に対する喜び」

先の「厳選の視点14 作業を行ううえでの態度」でもふれたが、作業を苦痛や退屈と感じては、進歩はあり得ない。やはり、どんな作業においても、何らかの発見や改善・工夫をしながら作業のなかに楽しみを見いだして欲しい。そのためには、自らその工程において良否の判断をしながら、納得のいくものができたときの喜びを感じる大切である。それが、自分に対する有能感や成就感となり、次への意欲がわいてくるであろう。つまり、「自己評価による成就感」が大切である。他者から認められることがそのきっかけになることはあるだろうが、自分で作業に喜びを見いだすことよりも誉められることに重きをおいている場合は、就労しても長続きしないことがある。以上のことから厳選の視点としてとらえた。

### ③ 「余暇」

卒業後の生徒たちの人生は、これまでの12年間と比べ、遙かに長く、それゆえに過ごし方次第で大変有意義なものになったり、退屈な日々になったりするだろう。働いている時間は誰しも同じようにそれなりに集中して過ごしているだろうから、それ以外の時間や休日の過ごし方がそれぞれにおいて異なり、大きな意味をもってくると考える。働くからこそ余暇の時間が大切である。その時に毎日の疲れが癒され、あるいは楽しみをもって過ごすことで、満足感や充実感を感じることができれば、仕事への英気も養われてくるだろう。人が生きていくうえで楽しみがあるということは、日常生活そのものに潤いを与えると同時に、精神的な安定という意味においても大変重要であろう。しかし、楽しむために必ず多額のお金を使うという習慣は避けて欲しい。買い物などにお金を使うことが悪いとはいわないが、お金がなければ楽しみを得ることができないという消費的な楽しみではなく、生産的な楽しみ、例えば、調理を楽しんだり、ちょっとした小物を作ったり、あるいは植物を育ててみたりなどによる楽しみ方も身につけて欲しい。このような考えをもとに次の2点を厳選の視点とした。



厳選の視点20「仲間とともに楽しめること」

厳選の視点21「自分一人でも楽しめること」

(ア) 厳選の視点20「仲間とともに楽しめること」

地域においては、それぞれ独自の行事やお祭りもあれば、育成会や福祉団体の主催による運動会や文化祭などもある。地域としてとらえる範囲をもっと広めると、より多くの人々とふれ合うことになる。在校生のなかには、仲間同士でサークルを作って休日にマラソンや水泳などのスポーツを定期的に行ったり、市の障害福祉センター（ハートセンター）で習い事をしたりしている生徒もいる。卒業生のなかにも、青年教室でのソフトボールや料理教室などに積極的に参加している人もいる。このように、在学中で終わらず、卒業後も積極的にそのような場に出かけて、ごく自然に人とのかかわりをもてるようになって欲しい。そうすることが、人間関係を広げると同時に潤いのある生活にもつながる。仲間や知り合いと一緒に過ごす喜びをもち続けて欲しい。近年、グループホームや通勤寮などで生活する人も増えている。仲間と一緒に自立した生活を送るうえで、一緒に楽しみを共有し合えるものがあるということは、お互いの生活の潤滑油ともなり、日々の生活が満足感や充実感をもって過ごせるであろう。以上のことから厳選の視点としてとらえた。

(イ) 厳選の視点21「自分一人でも楽しめること」

仲間とともに楽しむことは重要なことではあるが、四六時中仲間とともにいるわけではない、そこで、一人で過ごす時間も何らかの自分の楽しみをもっていて欲しい。休日を一人で過ごす場合も当然ある。卒業生のなかには、外食や買い物に出かけたり、公共交通機関を使って日帰りの旅行などを楽しんだりする人もいる。しかし、それ以上に毎日のなかで過ごす一人の時間が重要であろう。つまり、職場から帰り眠りにつくまでの時間である。このなかで、余暇として使える時間は数時間かもしれない。しかし、そのちょっとした時間を楽しめるということは、極めて重要である。なぜなら、365日ほとんど必ず発生する時間といえるからである。この短い時間の有効な過ごし方をぜひ身につけさせたい。それは、家でテレビを見たり、CDを聴いたりして楽しむことかもしれないし、あるいは、好きな芸能人の写真などを集めて整理することであるかもしれない。自分の楽しみが仲間とのつながりにも発展することも考えられる。いずれにしても一人のときは何もすることがなく、ただ、時間が過ぎるのを待っているという状況にならないことが重要と考え、厳選の視点としてとらえた。

④ 「態度」

態度というのは、あらゆる場面に関連しており、それ自体を特に取りあげることは困難である。しかし、あえて、ここで態度をまとめたのは、社会人としての、あるいは職場で働くための基礎的な内容と考えたからである。高等部の生徒たちは入学して3年後には必ず社会へ旅立っていく。進路先の違いにかかわらず、卒業後は社会人としての自覚をもって生活して欲しいと願うのは当然であろう。この社会人としての自覚を我々は「大人としての感覚」という言葉で表現しており、これを育てることが大変重要であると同時に、生徒たちにぜひとも身につけて卒業して欲しいと願うものである。具体的には、裏表がなく常に真摯に取り組もうとする姿勢や自分の感情をコントロールできる心であり、また働くことも含めた将来の生活における前向きな気持ちである。卒業後の将来の生活を自らどのように現実的に考えられるかということには、生徒自身の心の成長、精神的な強まりということが必要であり、それが態度的な面として表れてくると考える。これらを考え次の3点を厳選の視点とした。

厳選の視点22「陰ひなたなく取り組む姿勢」

厳選の視点23「自制心（我慢することや粘り強さ）」

厳選の視点24「将来への前向きな姿勢（自己理解、自己選択・自己決定）」

**(ア) 厳選の視点22「陰ひなたなく取り組む姿勢」**

生徒のなかには、教師が見ているところではきちんとするが、見られていないと取り組みの態度が変わる生徒もいる。また、誉められると頑張れるが、それがなければ本気を出さず、力を十分に発揮できていない生徒もいる。一方で、課題に対する理解力も高く、作業能力も高いにもかかわらず、仕事として働くことへ対する気持ちの育ちが未熟な生徒もいる。このような生徒たちの本音のなかには、楽なことやきれいなことならばするが、きついことはしたくないという気持ちや、他者から誉められることにのみ喜びを感じるという場合が多い。仕事の内容にかかわらず、生徒たちが今自分の行っていることそのものに喜びや楽しみを感じて欲しいと願わずにはいられない。そのような姿勢が、社会人として生活していくうえでは大変重要なこととなるであろう。以上のことから厳選の視点としてとらえた。

**(イ) 厳選の視点23「自制心（我慢すること、粘り強さ）」**

自制心が育っているというのは、自分のおかれている状況がわかり、そこで自分がどうあるべきか判断して、それにふさわしい行動ができるということであろう。自分の置かれている状況の理解は、障害種によって、視覚的な情報や手がかりを用いたり、場の構造化をしたりすることによってより容易になる場合もある。仲間や周りの人がしていることを手がかりにしたり、先行経験を生かしたりして、自分が置かれている状況を理解できる生徒もいる。生徒の個性を生かした理解のさせ方が重要である。また、自分がどうあるべきかの判断は、社会常識に照らし合わせて生徒たちにきちんと伝える必要がある。自分たちが間違っていたことに納得でき、制止や禁止に応じることができて指摘を素直に聞いて修正できるようになって欲しい。以上のことから厳選の視点としてとらえた。

**(ウ) 厳選の視点24「将来への前向きな姿勢（自己理解、自己選択・自己決定）」**

我々はすべての生徒において、自分の進路については、自分のことを理解したうえで、自己選択・自己決定できるように心がけている。しかし、自己理解が不十分なために、自分の能力とはかけ離れた進路を選択したり、自分で進路について考える力があるにもかかわらず、保護者の意向を自分の気持ちとして表現してしまったりする生徒がいる。このような生徒は、卒業して社会に出ていくことが、まだ自分のこととして十分に受け止められていないといえる。と同時に、働くことに対しても前向きな気持ちが育っていないことが多い。自分の近い将来の姿を現実的なものとして理解し、一人の大人として働いていくという前向きな気持ちを育てるためにも、自分を理解し、自ら進むべき道を選び決定する指導は欠かすことができない。以上のことから厳選の視点としてとらえた。

**(3) 内容表試案における指導内容の順序性について**

高等部において厳選された指導内容は、小・中学部との調整を図りながら内容表試案の中に盛り込まれており、そのなかで高等部としては、4から10段階にあるものを主として扱うように考えている。高等部における指導内容を考えた場合、どうしても卒業後の生活を想定しながら、トップダウン的に考えざるを得ない。社会人として旅立つまでに、生徒の実態を考えながら、ここまではできておいて欲しい、或いは最低限これだけはできておく必要があると考えられる指導内容を段階の高いところに設定し、以下順次そこに到るまでの指導内容を段階的に低い方に向かってに並べ順序性を考えた。小・

中学部との関連もあるので、項目によっては、高等部で考えた順序や指導内容がそのままの形では内容表試案に標記されていない場合もあるが、例えば、仕事の大項目のように、高等部の考え方が特徴的にでているものもある。

(森川 元)

(4) 各項目における厳選の視点ごとの内容のとりえについて

① 「生活」における指導内容のとりえについて

ア 「言語」に関する内容のとりえについて

ここでは、「生活」のカテゴリーに属する「言語」の厳選の視点について述べるとともに、それらの視点によって厳選された高等部の指導内容が内容表試案にどのように位置づけられているのかを述べる。

厳選の視点は、以下の2つである。

- (ア) 厳選の視点1 「他者に通じやすい、より一般的な表現方法を身につける」
- (イ) 厳選の視点2 「他者（物を含む）からの発信を理解する力を高める」

(ア) 厳選の視点1 「他者に通じやすい、より一般的な表現方法を身につける」

まず、「他者」とは、社会で出会うすべての人をさすが、ここでは学校の教師、現場実習先の人や地域で出会う人、就労先の人などを想定している。「通じやすいより一般的な表現方法」とは、音声言語の他に非音声的な言語、書くことによる伝達も含め、他者が理解しやすくなるスキルである。また、伝わりやすさばかりではなく、「言葉遣い」など社会的に受け入れられやすい表現方法も指向するものである。内容表試案においては次のように位置づけられている。

[大項目]	(中項目)	小項目
言語	話す	話し方、内容の伝達、自己紹介
	書く	漢字、文章、意味理解
身辺生活	コミュニケーション	意思伝達

なお、大項目を [ ] で、中項目を ( ) で、内容表試案の指導内容については、『』で表している。

(a) 【言語】(話す)話し方

この小項目で特に高等部が大切にしたいことは、まず、他者とのかかわりのなかでいかに伝わりやすいかということである。生徒たちは、何かを話したいという気持ちをもっているが、話したいという気持ちが先行して相手が理解してくれたということよりも、伝わらなくても自分が伝えたいことを発するだけで満足してしまうことが多い。また、言葉が不明瞭な生徒も多いが、はっきり声を出すことやある程度の声量を出すことで相手に伝わりやすくなる。次に、社会に出て一番大切なことは人間関係、特に目上の人に対する礼儀や言葉遣いである。生徒たちは、今の生活においても教師や先輩など、また現場実習においても当然、目上の人とかかわる機会が多い。こういう生徒たちの実態、状況などから、内容表試案における指導内容の段階の位置づけは以下のとおりである。最終的には、『相手に応じた言葉遣いをする』ができるようになることが必要であるため、10段階に設定してある。その前段階として、相手に伝わるように話す方法として、7段階に『相手を見てゆっくりはっきりと話す』8段階に『場に応じた声の大きさで話す』に位置づけられている。

高等部で実際に指導する場面としては、日常的に行われるべき内容であり、また、実際、現場

実習に行って職場の方とのかかわりのなかでも学習できるが、使い方などに関しては特設された時間のなかで系統的に指導されることも必要である。

**(b) [言語] (話す) 内容の伝達 / [身辺生活] (コミュニケーション) 意思伝達**

この小項目で、高等部が大切にしたいことは、表出言語のある生徒は、話をして気持ちを伝えるようにすること、また、表出言語のない生徒においても身振りやサインを使って何らかの方法で伝えることである。生徒は、自分の気持ち（したくない、疲れたなど）をジェスチャーではなく、泣いたり暗く沈んだりするなどの適切さに欠ける表現方法をすることが多い。そのため、人に伝わる方法で気持ちを伝えることは重要である。はじめに、話をして伝えることよりも、自分の気持ちをどのように伝えるかという指導内容が必要である。そこで、だれにでも分かるように伝える方法としては、まずは、自分のしたいこと、つまり要求が言えることから始めたい。これは、4段階の『自分のしたいことを言う』ことである。次に、要求だけではなく、自分のしたことや考えたことなどを相手に伝えること6段階の『身近なできごとを話す』から9段階の『見・聞き・経験したことを要点を落とさずに伝える』ことに発展させ、10段階に位置づけてある『喜怒哀楽を交えて、経験したことを順序よく話す』ことから、最終的には、人との楽しく会話を楽しむようなコミュニケーションへとつなげていきたい。

高等部では、特設された時間のなかで系統的に指導することに加え、日常場面において自分の思っていることやどう感じているかなどの気持ちをしっかり伝えることに慣れさせ、進路指導などでも活用できるものである。

**(c) [言語] (話す) 自己紹介**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『自分の名前をいう』『自分で内容を考えて話す』『現場実習などで場に応じた自己紹介をする』である。

ここで高等部が大切にしたいことは、自分のことについて話すことができるということであり、自分のプロフィールぐらいは知っておく必要がある。ほとんどの生徒は自分の名前をいうことができるが、住所、年齢、誕生日など自分に必要な内容をしっかり言える生徒は少ない。この点においてまずは、8段階に『自分の住所、氏名、年齢、学年、電話番号、誕生日を正しく言う』がある。最終的には、場に応じて、自分のプロフィールでも、住所や電話番号は自己紹介では言わないことや現場実習などに行ったときに「頑張りたいこと」などを自分で考えて場に応じた内容をつけ加えて言うことができるようになることが必要であるため、『場に応じた自己紹介をする』が10段階に位置づけてある。

実際生活においても、郵便局や銀行で通帳を作るなかで自分の氏名や住所、誕生日などについて確認したり書いたりするなど活用する機会が多い。自己紹介の仕方については、特設された時間のなかで指導し、現場実習など校外での活動における実践的な指導へつなげることが考えられる。

**(d) [言語] (書く) 漢字、文章、意味理解**

この小項目のなかで高等部が大切にしたいことは、名前や住所などの自分に関係のあることを書くことができることである。生徒は、自分の名前をひらがなで書くことができるが、漢字で書くことはまだ曖昧な生徒が多い。そこで、『簡単な漢字や自分の名前を書く』ことや『住所・家族の名前を漢字で書く』は必要な内容である。また、書くことが得意な生徒もいるので、自分の思っていることや経験したことを文章にしたり、お礼状を書いたりするなど人に自分の気持ちを伝える内容が必要である。このことは、10段階に『自分の思ったことや考えを書く』が設定されている。

高等部では、ひらがな、漢字、カタカナなど書くために必要な基礎的な内容は、特設された時

間のなかで系統的に指導するほうが望ましい。また、自分の気持ちを書くことに対しては、個別に日常の日記のなかで指導したり、現場実習などでお礼状を書いたりするなど実際の活動をとおして指導していくことがよいと考える。

(イ) 厳選の視点2「他者（物を含む）からの発信を理解する力を高める」

「物を含む」とは、新聞、ラジオ、本、手紙など、人から直接聞く言葉以外のものである。「発信を理解する」とは、視覚的、聴覚的またはそのどちらも含む手段により、発せられた情報を受け取りその内容がわかるということである。具体的には「聞き取り」「読み取り」といった技能的なことを想定しているが、それを支える態度的な内容も必要であると考え。内容表試案においては次のように位置づけられている。

[大項目]	(中項目)	小項目
言語	聞く	聞き方、指示理解、聞き取り
	読む	単語、文章、文章の読み取り、物語の読み取り

(a) 【言語】（聞く）聞き方

この小項目における高等部で扱う主な指導内容としては、『私語や手ませをしない』『長い時間、最後まで話を聞く』がある。

このなかで高等部が大切にしたいことは、マンツーマンで話を聞く場面だけではなく、授業や集会、儀式といった集団のなかでも話をきちんと聞くということである。真剣に話を聞いて聞き取るためには、話を聞く姿勢が重要であると考えられる。また、卒業をして社会に出ると、集団に向けられた話を聞かなければならない場面がよくある。始めは話をしている人の方向を向き私語をしないなどの話を聞く姿勢を身につけ、最終的に、集団で話を聞く場面でも、自分のこととして真剣に聞くことのできる姿が望まれる。

高等部では、個別に話を聞くときの姿勢はもちろん、集会や儀式といった集団で話を聞く場面など様々な学校生活場面のなかで繰り返し指導することで定着させることが望ましい。

(b) 【言語】（聞く）聞き取り

この小項目における高等部が扱う主な指導内容は、『いつ、どこで、誰が、何をしたのかを聞き取る』がある。

ここで高等部が大切にしたいことは、話の内容を理解することである。聞き取るためには、まず、『いつ・どこで・だれが・なにをしたか』など聞くためのポイントを押さえることが大切である。ポイントを押さえて聞くことで、長時間にわたる話や複雑な話であってもある程度の内容を理解することができると考えられる。

高等部では、特設された時間のなかで、聞き取りのポイントを知るための指導が必要である。また、その知識を生かしながら、朝の会や集会といった場面でも「ここだけは、聞き取って欲しい」という部分をしっかり意識させるようにして確実に定着させていくことが望ましい。

(c) 【言語】（読む）単語、文章、文章の読み取り、物語の読み取り

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『自分の名前を読む』『簡単な文章を読む』『説明文や手紙などのいろいろな文章を読む』がある。

ここで高等部が大切にしていることは、書くことと同様、自分の名前や所属といった自分に関係のあることについて正しく読めることである。始めは、自分の名前を読むことを身につけ、文章を読むことができる生徒は、説明文や手紙などのいろいろな文章を読んで何が書いてあるかを理解できることである。また、文章を読むことが難しい生徒には、挿絵や図などを手がかりにし

て、書いてある内容を理解できることが望まれる。

高等部では、ひらがな、漢字、カタカナ、また、文章の読み方など基礎的な指導内容を特設された時間のなかで系統的に指導することが望ましい。また、読み取ることを定着させるためには、生活のなかで興味のある雑誌を読んだり、調理や家庭工作を行ううえでレシピや説明書を見て作ったりするなど、読んで具体的な行動につながる場面を設定して指導することが考えられる。

## イ 「数量」に関する内容のとらえについて

ここでは、「生活」のカテゴリーに属する「数量」の厳選の視点について述べるとともに、それらの視点によって厳選された高等部の指導内容が内容表試案にどのように位置づけられているのかを述べる。

厳選の視点は以下の3点である。

- (ア) 厳選の視点3 「正確に数える」
- (イ) 厳選の視点4 「時間・量・長さなどの数量的な感覚」
- (ウ) 厳選の視点5 「実務的なこと」

### (ア) 厳選の視点3 「正確に数える」

正確に数えることは、数量の基礎的な指導内容でぜひ身につけて欲しいものである。それに加えて、職場等では、早さも要求されたり大きな数を数えたりするので、数える方法として、2や5、10のまとまりを作りながら数を数えるという指導内容があげられる。内容表試案においては次のように位置づけられている。

[大項目]	(中項目)	小項目
数量	数	かぞえる、数え方

#### (a) [数量] (数) 数え方

この小項目における高等部で扱う主な指導内容としては、『10のまとまりを作って数える』『2や5のまとまりを使って数える』『10のまとまりを作って100以上の数を数える』がある。

この小項目のなかで特に高等部が大切にしたいことは、まとまりを作りながら早く数えることである。まとまりを作って数を数える必要性は、まず、早く数えられること、次にまとまりを作ることで確認ができることがあげられる。そして、職場においても製品を5や10ずつまとめるなどの指示があることから必要性が感じられる。2ずつ数えることは、普段よく使われる数え方である。5、10においては、数を数えるだけではなく、お金を数えたり繰り上がりや繰り下がりのある計算をしたりといった他の数量的な指導内容の基礎としても重要な数であるため、取りあげるべきである。

高等部のなかで指導が考えられる場面としては、特設された時間のなかで系統的に指導することを基礎として、作業学習などにおいても製品を数える場面があげられる。基礎的な指導内容であることから、様々な場面で繰り返し指導をする必要がある。

### (イ) 厳選の視点4 「時間・量・長さなどの数量的な感覚」

「あと5分」「もう少し」「10cmくらい」などのあいまいな言葉に対する数量的な感覚を身につけることが大切であるが、それを身につけるためにはまず、正確に読んだり測定したりできることが必要である。内容表試案においては、次のように位置づけられている。

[大項目]	(中項目)	小項目
数量	時計・暦	時計の仕組み，時計の読み，時刻あわせ，
	量と測定	長さの測定，重さの測定 長さの比較，重さの比較

(a) 【数量】(時計・暦) 時計の仕組み，時計の読み

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『長針と短針の動きの関係がわかる』『〇分前，〇分後がわかる』『〇時〇分と正確に読む』がある。

このなかで高等部が大切にしたいことは，時計を見てある程度推測しながら行動することができるようになることである。「あと5分休憩」や「10分後に集って」という言葉もよく耳にする指示である。また，「〇分後」「〇分前」という言葉を知って行動するためには，針がどちらの方向に進むか理解していなければ「〇分後」が「〇時〇分を示す」ということを理解することは難しい。時間の感覚を身につけるためには，まず，正確に時刻が読めることから始まり，さらに継続的に時刻を読むことを習慣づけることが大切であると思われる。

高等部では，校外学習や作業学習といった長時間続けて行われる学習の際に休憩を含めたり時間を決めて行ったりすることで指導することが考えられる。しかし，時間の概念の形成は，やはり経験的に繰り返し覚えていく必要があるもので，ある程度の数量的感覚を身につけるためには，日常的に時計を見て行動するように指導する必要がある。普段の生活のなかでも意図的に『〇分後』『あと〇分』という指示を出し，行動とつなげることで，言葉に慣れさせていきたい。また，基礎的な概念については，特設された時間のなかで系統的に指導されるべきものである。さらに，家庭においても朝は目覚まし時計を使って起きたり，好きなテレビ番組を見るためなど自分のしたいことが時間的に決まっているときに，それまでにしなければならぬことをしたりといった時間の利用を生活のなかで行うことで，意識づけや定着を図りたいと考える。

(b) 【数量】(量と測定) 長さの測定，重さの測定

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は，『m，cm，mmなどの単位でものの長さを測る』『指定された重さを1g単位で測定する』『見た目で軽重を予想する』『直感でおおよその長さがわかる』である。

このなかで高等部が大切にしたいことは，「10cmくらい」や「あと少し」といった指示に対しものさしなどの測定道具を使わなくてもある程度イメージできるようになることである。そのためには，確実に長さを測定できる技能が必要である。また，作業場面や日常生活場面などで意図的に長さを測定しないで見比べるなどの場を設定し，「もう少し長い(短い)もの」という言葉に慣れさせ，その活動をとおして長さのイメージをふくらませたりしていくとよい。重さについては，調理や作業場面において材料の重さを正確に測定することが必要である。また，「これは重そうだ(軽そうだ)」「自分で運べそうだ」といった予想ができることも必要である。

高等部では，作業学習において寸法を測ったり材料の重さを同じにしたりするなど実践的に扱うことが必要である。このように経験的に繰り返し測定を行うことで，正確に測定したり測定器具の使い方に慣れたりし，さらに，おおよその長さの感覚をつかむことにつながると考える。cm，m，g，kgといった単位を使って確実に測定する方法は，特設された時間のなかで系統的な指導が望まれる。さらに，確実な定着を図り，イメージをつかむためには，前述したが，作業学習や調理など，学校や家庭での生活全般をとおして行動につながる指導が望まれる。

(ウ) 厳選の視点5「実務的なこと」

生徒が実際生活していくうえで必要な実務的なことといえば，まず，買い物あげられる。ま

た、生活を豊かにするということから時刻の読みや時計の見方、時刻表の読みなどが必要な指導内容である。これらの内容は、学校での指導だけではなく、家庭や地域でも、生徒たちの生活に直接役立つように指導されるべきものである。内容表試案においては次のように位置づけられている。

[大項目]	(中項目)	小項目
数量	時計・暦	時計の読み、カレンダー
	図表	図表の読み取り
	お金	等価関係
家庭・地域生活	買い物	買い方、金銭処理

(a) **【数量】(時計・暦) カレンダー**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『今日が〇月〇日だとわかる』『カレンダーを見て先の行事がわかる』である。

このなかで、高等部が特に大切にしていることは、「何曜日かわかる」ことや「今日が〇月〇日だとわかる」こと、さらに「カレンダーを見て先の行事がわかる」ことをとおして、先の見通しをもって行動するようになることである。自分である程度の見通しをもって行動ができるようになれば、「～日までに・・・をしよう」などといった計画性のある行動ができるようになり、時間を有効に使うことができると考えられる。

高等部では、運動会や文化祭、現場実習などの学習をとおして、計画を立て、確認しながら準備や練習に取り組むなかで指導することが望ましいと考える。

(b) **【数量】(図表) 図表の読み取り / (時計・暦) 時計の読み**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『カレンダーから日、曜日がわかる』『縦軸と横軸が4項目以上ある図表を読み取る(簡単な時刻表)』である。

このなかで、高等部が大切にしたいことは、時間的な感覚を身につけ、バスや電車といった身近な交通機関の時刻表を読むことができることで、生活の幅を広げたり、自分の行動やこれからの見通しをもったりすることができるようになることである。時刻表が読めるということは、現在の時間から考えて何分のバス(電車)に乗れるか、何分に乗れば待ち合わせに間に合うといったことが予測できるということである。まずは、時間を正確に読むことを定着させることと、学校生活のなかでより身近な一日分の時間割を読むことから始めたい。そこから、一般的にも活用できる時刻表やカレンダーの読みへと発展させたい。

高等部では、具体的な表(時刻表)の見方を時計の読みと合わせながら特設された時間のなかで系統的に指導をしたいと考える。また、実際場面でも、校外学習や修学旅行などで公共交通機関を利用する際に自分たちで時刻表を調べたり、通学の際に時刻表を見ることができると生徒は時刻表を見て、何分にバス(電車)が来るかをみることができたりと実際場面で活用して定着をはかりたい。

(c) **【家庭・地域生活】(買い物) 買い方**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『規格にあったものを選ぶ』『メモを見ながら買う』『予算を考えて買う』である。

このなかで、高等部が大切にしたいことは、自分が買いたいものであっても、もっているお金を考えて買うか買わないかを決めることである。始めは、家庭のお使いなどで決まったお金を持たせられて買ったり一緒に買い物をしたりすることが主である。お使いをすることも家庭のなかでは重要な役割と考えられる。しかし、お使いでお金をもらって買うだけではなく、働くように



なってお金を自分でもつ機会も多くなることが予想される。そのなかで、自分が欲しいものがあるからといって計画性がなく、むやみにお金を使うことは家庭生活を営むことを考えても好ましくないことである。

高等部では、実際メモを見て買い物をしたり予算を立てて買い物をしたりして買い物の仕方やお金の使い方を実際場面をとおして指導し、定着させることが望ましい。また、お金の使い方については、基礎的な部分の特設された時間のなかで系統的に指導するのがよいと考える。

#### (b) [家庭・地域生活] (買い物) 金銭処理 / [数量] (お金) 等価関係

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『10円と100円玉を使って買い物をする』から『レシートの内容を読み取る』『小遣い帳に記入したり計算したりする』までである。また、数量における段階としては、『10円と100円を使った硬貨の等価関係がわかる』から『1円から1万円までの等価関係がわかる』までである。

このなかで高等部が大切にしていることは、自分のもっているお金でいかに買い物ができるか、ということ、つまりお金の管理ができてお金を使うことができるということである。まず、100円玉はないが、10円が10個あるや50円玉と10円玉を組み合わせればあるなど、お金の等価関係がわかって使えることがあげられる。1万円までの等価関係がわかることが望ましいが、特に、生徒たちが生活のなかでよく使うと思われる千円以内の等価関係までは知っておいて欲しいものである。お金の管理については、自分がいくら使ったか、いくら残っているかなどがわかることである。レシートの内容を読み取る意義は、何を買ったか、それが実際必要なものであったかを考えられ、今後、お金をどのように使っていけるかの指標になると考えられる。

高等部では、実際買い物をとおして、予算のある買い物をしてレシートを見て使った額を確かめたり小遣い帳に記入したりする指導が有益であると考え。しかし、その前段階として基盤となる内容であるお金の等価関係や見合ったお金を出したり、おつりや合計を計算したりする指導は、特設された時間のなかで系統的に行うことが望ましいと考える。

(吉井麻弥)

#### ウ 「衣食住における自立に向けて」に関する指導内容のとらえについて

ここでは、「生活」のカテゴリーのなかの「衣食住における自立に向けて」の厳選の視点について述べるとともに、それらの視点によって厳選された高等部の指導内容が内容表試案にどのように位置づけられているのかを述べる。

自分の生活を主体的に生きる生徒の姿をめざすとき、自分のことは自分でできる確かな力を身につけさせるべきであり、そのための具体的な指導の必要性は言うまでもない。また、高等部の生徒たちは、小学部・中学部と積み重ねてきた自立的・主体的な生活経験が生き、どの生徒もその子なりに自分の将来に向けて「大人になる」という意識が高まり、そのために自分のことは何でも自分でできるようになりたいという意欲も育ってきている。この時期に自立に向けた生活技能の具体的な指導をすることは有効である。そのような、生徒たちの実態と、生徒たちを一人の大人として社会に送り出す高等部の立場をふまえて、それぞれの指導内容をとらえ、厳選している。このように考えていくと、「衣食住における自立」に向けた指導内容は、現行の教育課程編成時から、時代のニーズに応じた修正や付加する内容こそあれ、大きく変化することなく必要なものであるとも言える。

厳選の視点は、以下の4点である。

- (ア) 厳選の視点6 「家庭生活に生きる技能」
- (イ) 厳選の視点7 「道具や器具の使い方」
- (ウ) 厳選の視点8 「健康・衛生管理」
- (エ) 厳選の視点9 「身辺面でのエチケット・マナー」

## (ア) 厳選の視点6「家庭生活に生きる技能」

生徒たちの現在、および卒業後の暮らしや親なき後の暮らしを見通したとき、高等部では、一人ひとりがそれぞれの生活を送るために必要な基本的な生活技能を、実際に経験することをとおして身につけて欲しい。すなわち、高等部でとらえる「家庭生活に生きる技能」とは、生活に必要なものを自分で作ったり、修繕したりするための被服・調理・家庭工作に関する基本的技能や、掃除や身の回りの整理整頓といった家庭（卒業後であれば、家庭に限らず施設やグループホームなどの自分の暮らす場において）生活を自分の力で円滑に送るための技能である。また、卒業後の生活により確実に結びつけていくために、それらの技能が身近な生活に生きるということを、生徒たちにより具体的に意識させ、必要性を感じながら学ばせたい。ただし、これらの技能のなかでも、電化製品や道具類の使い方に限った内容については、厳選の視点7「道具や器具の使い方」の視点で論じる。

この厳選の視点に関する指導内容の、内容表試案における位置づけは、次のようになっている。高等部として重点的に、また日常的に取りあげている内容についていくつか説明する。

[大項目]	(中項目)	小項目
学校生活	掃除	ふく、はく、掃除への意識
	整理整頓	整理整頓の仕方
家庭・地域生活	被服	手芸
	調理	材料の理解、洗う、料理
	家庭工作	工作

### (a) [学校生活] (掃除) 掃除への意識

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『汚れているところを探す』『自分の周りが汚れていたら掃除をする』『掃除をする必要性がわかる』『みんなが気持ちよく生活できるように掃除をしようという気持ちをもつ』である。

高等部では、汚れているところに自分で気づいて正しい方法できれいにすることができることと、掃除の必要性を理解し、自分のためだけでなく周りの人のことも考えて掃除ができることの2点を大切にしたい。掃除の指導は、小学部から日常生活の指導のなかで継続して指導できる内容であり、高等部で特徴的なのは、後者の内容が重視されている点である。高等部の生徒たちは、学校生活のなかでも、小学部・中学部の児童生徒の先輩であるという意識も高まっており、自分のためだけでなく、周りの人のために掃除をしようという気持ちをもたせるのに適した時期である。

実際の指導の場面としては、まず、毎日の掃除の時間が考えられる。現在、高等部では朝掃除の時間を設定し、校内の清掃活動を行っている。この時間は、自分たちの使っている教室だけでなく、小学部のトイレや玄関、体育館なども高等部生徒が分担して清掃している。すなわち、自分のためだけでなく周りの人のために掃除をするという意識に結びつきやすい場面である。このような活動をとおして、周りの人のためになっているという意識をもつことは、上級生である高校生としての意識や、生活を営むうえでの自信にもつながっていくものであり、今後も、この指導形態は有効であろう。その際、ほうきの持ち方やぞうきんの絞り方といった掃除の基本的なやり方から、邪魔なものをどけながら掃除をするといった効率のよいやり方など個の実態に合わせた具体的な指導を行いたい。さらに、掃除をすることの必要性を理解させるために、ホームルームなどの時間を特設して、衛生管理に対する知識をもたせることや、行事などに向けた環境整備の際に、気持ちよく来客を迎えようという意識づけをするといった指導場面を意図的に設定することも必要であると考えられる。

(b) **〔家庭・地域生活〕(被服)手芸／(調理)材料の理解, 洗う, 料理／(家庭工作) 工作**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、(被服)手芸を例にあげると、『生活に役に立つかどうかを考えながらものをつくる』『ほころびふせやボタンつけなど、身につけたことを自分の生活に役立てる』『手縫いやミシン縫い、アイロンがけをして役に立つものを作る』がある。

これらの各項目は、主に中学部・高等部で指導される内容である。そこで、高等部では、中学部で身につけてきた基礎的な技能をもとに、特に「生活に役立てる」という意欲をもたせ、確かな生活技能に結びつけていきたい。

実際の指導にあたっては、被服・調理・家庭工作それぞれについて、特設した時間で指導することが必要であろう。高等部では、現在すでにこのような内容の指導を実践しており、今後も継続していくべきである。しかし、最近では、手作りをしなくても、安価で便利な製品を購入することも可能である。題材を選択する際などには、このようなことを考慮する必要があるだろう。すなわち、インスタントや加工食品の利用や、買って来た製品に一工夫加えてより生活に便利なものを作ったり、それらを用いることで一人でできることを増やしたりすることにつながるような内容を積極的に取り入れていきたいものである。また、手作りのよさや、自分でものを作ることへの喜びを味わわせるよい機会としてもとらえることができる。このような指導のうえで、学校で作ったものを家庭で使ったり、学校で身につけた技能を生かして、自分で弁当を作ったりするなど、家庭と連携しながら実際の生活場面に役立てていくことで将来の生活により確実に結びついていくものと考えている。

(イ) **厳選の視点7「道具や器具の使い方」**

「(ア)家庭生活に生きる技能」の視点で考えられる生活技能のなかでも、具体的な使用方法の指導が必要な内容は多い。そこで、この視点では、道具や器具の使い方に限った内容を取りあげ、自分の生活をより豊かにし、利便性を高めるための技能を身につけ、一人でできることを増やすことをめざしたい。

この厳選の視点に関する指導内容の、内容表試案における位置づけは、次のようになっている。高等部として重点的に、また日常的に取りあげている内容についていくつか説明する

[大項目]	(中項目)	小項目
学校生活	掃除	ふく, はく
家庭・地域生活	被服	アイロン, ミシン
	調理	料理, 包丁, 皮むき器, ガスコンロ
	洗濯	洗濯機
	家庭工作	はさみ, 接着剤, ドライバー, 金槌, のこぎり, セロテープ, カッター
身体	基本の動き	物の操作, 道具の操作

(a) **〔学校生活〕(掃除)ふく, はく／〔家庭・地域生活〕(調理)包丁, 皮むき器／(家庭工作)はさみ, 接着剤, ドライバー, 金槌, のこぎり, セロテープ, カッター**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、(調理)包丁を例にあげると、『包丁の正しい切り方が分かる』『材料をもつ手の使い方が分かる』『材料を崩さずに切ることができる』『その調理に適した切り方を工夫する』などがある。

これらの小項目では、生活に必要な道具の使い方を身につけることを大切にしている。つまり、ここでは、日常の生活で用いる道具の具体的な操作の仕方や活用の仕方を身につけさせ、生徒に

よっては、場面に応じたより便利で使いやすい道具を自分で選んで使うこともできるようになって欲しい。

高等部における具体的な指導の場面としては、「(ア)家庭生活に生きる技能」の視点における(b) [家庭・地域生活] (被服) 手芸などと同様に、特設した時間での指導が考えられる。その際、生徒の個々の実態に合わせて、使用する道具の種類を選択したり、補助具を利用したりすることで生徒たちが一人でできる手立てを講じていかなければならない。もの作りなどの活動をとおし、実際に道具を使いながら、正しく安全な使い方を身につけ、生活の様々な場面で生きる技能に結びつけたい。

**(b) [家庭・地域生活] (被服) アイロン, ミシン / (洗濯) 洗濯機 / (調理) 料理, ガスコンロ**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、(洗濯) 洗濯機を例にあげると、『自分で洗濯をしようという意欲をもつ』や『適切な洗剤の量や水量で洗濯する』『洗濯物に応じて、洗濯機を操作する』『自分のものは自分で洗濯する』などがある。

これらの小項目において、高等部では、生活に必要な電化製品をはじめとした器具の正しい操作の仕方や活用の仕方を身につけさせ、生徒によっては、例えば洗濯物の量や種類によって、手洗いと洗濯機洗いのどちらがよいか自分で判断して選択するなど、場面に応じた使いわけもできるようにになって欲しい。

実際の指導の場面としては、(a) [学校生活] (掃除) ふく、はくなどで述べた道具の使用についての指導と同様に、特設した時間で指導する必要があるだろう。電化製品は、特に誤った使用方法で用いると、けがや事故につながりかねないので、正しく安全な使い方を教え、確実に身につけさせねばならない。また、電化製品はメーカーや機種によって多少、操作方法やスイッチの位置が異なるので、学校で基本的な使い方を経験させ、家庭とも連携をとりながら、簡単な家事の手伝いからはじめ、実際の生活に生かすことにつなげていきたい。また、正しく使用することで簡単に、短時間で家事などができるという電化製品の便利さにも気づかせることで、活用しようという意欲を高め、自分のことは自分でするという気持ちや自分でできるという自信につなげることができると考える。

**(ウ) 厳選の視点8「健康・衛生管理」**

生徒たちが自分の生活を主体的に送っていくために、まず基本となるのが健康である。そのことをふまえ、高等部でとらえる「健康・衛生管理」とは、生徒一人ひとりが自分の健康状態を知り、健康を維持しようという意識や衛生習慣、および体の異常に自分なりに対処しようとする態度やそのための知識をもつことである。

この厳選の視点に関する指導内容の、内容表試案における位置づけは、次のようになっている。高等部として重点的に、また日常的に取りあげている内容についていくつか説明する

[大項目]	(中項目)	小項目
身辺生活	健康	病気やけがの予防, 病気やけがへの対処
	清潔	入浴の仕方, 月経の処理, 身だしなみ
学校生活	掃除	ゴミ処理

**(a) [身辺生活] (健康) 病気やけがの予防, 病気やけがへの対処**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、病気やけがの予防では、『自分で考えて水分補給をする』『体調に応じて、衣服の調節をする』『身体測定の結果に関心をもつ』、病気やけがへの対処では、『日常用いる医薬品などがわかる』『友達がけがをしたり体の異常なときはまわ

りの人に言う』『けがや病気のときに簡単な処置ができる』『体調に応じて、活動への参加の仕方を考える』がある。

これらの小項目のなかで高等部としては、自分の健康状態に関心を持ち、健康を維持するために体調に応じて自分なりの対処ができる生徒の姿をめざしたい。すなわち、日頃から（元気なときから）、健康に関心を持ち、病気やけがをしないように予防することや、病気やけがをしてしまったときに周りに助けを求めたり、自分で簡単な処置ができる力を身につけたりする必要がある。

高等部での実際の指導としては、生徒自身や友達が病気やけがをして保健室を利用する場面はもちろんのこと、健康を維持するために必要であると意識しながら、うがいや乾布摩擦、汗拭きなど小・中学部で身につけたことを実践させるなど、生活のあらゆる場面で指導することができる。さらに、生徒によっては、例えば、平熱や日頃の排便の状態など自分が健康な状態とはどういうものか知ることも大切なことである。

また、現在の指導内容としてはあがってきていないが、今後、保健室の利用から発展して医療機関の受診についての内容を加えていく必要も感じる。まずは、病院の役割を理解させうえて、学校で行われる健康診断の際に病院の受診の仕方を指導することなどが考えられるだろう。また、自分の障害や病気について理解させることの必要性も強く感じる。このことは「自己理解」といった項目にもかかわってくるものであろう。それらを正しく認識することは自分の適性を考え、より自立した生活を送る力につながっていくはずである。

#### (b) 【学校生活】(掃除) ゴミ処理

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『指定された曜日に指定された場所にゴミを出す』『燃えるゴミと燃えないゴミがわかる』『生ゴミの水気を切って捨てる』『ゴミの分別をする』『資源ゴミがわかり、リサイクルに関心をもつ』がある。

この小項目のなかで、高等部が大切にしたいのは、地域社会におけるゴミ出しのルールを理解し、マナーを守ってゴミの処理をすることである。近年では分別回収など、ゴミ処理におけるルールは非常に複雑になっている。しかしながら、ゴミ処理やリサイクルに関することは大きな社会問題であり、社会の関心も高い。生徒たちが地域や社会の一員として生活するためのスキルの一つとしても、必ず身につけなければならないことである。

実際の指導の場面としては、教室などのゴミを決められた曜日に地域のゴミステーションに出すことが考えられる。そのために、日頃から、燃えるゴミ・燃えないゴミ・資源ゴミなどに分別させたり、ペットボトルは洗うとか、生ゴミは水気を切るといった適切な処理をさせる場面を意図的に設定したりする必要があるだろう。例えば、具体的な場面としては、調理実習での生ゴミの処理や発泡トレイなどを洗って捨てること、給食のゼリーカップやアルミ容器の分別をすることなどが考えられる。また、同時に副読本などを利用してリサイクルに対する関心も高め、積極的に資源を有効利用する姿勢につなげていければ、と考える。

#### (エ) 厳選の視点9「身辺面でのエチケット・マナー」

小学部・中学部と段階をおって身につけてきた基本的な生活習慣を基盤として、高等部段階では、社会生活を営むうえで欠かすことのできないスキルとして「身辺面でのエチケット・マナー」をとらえ、清潔や身だしなみといった周りの人を不快にさせないようなエチケットやマナーを意識し、状況や場に応じた適切な身辺処理行動へと発展させていきたいものである。

この厳選の視点に関する指導内容の、内容表試案における位置づけは、次のようになっている。高等部として重点的に、また日常的に取りあげている指導内容についていくつか説明する。すべての指導内容に共通して、高等部段階では、日常のどのような場面でも自分の立場からだけで

はなく、他人の立場にも立って行動できるようになって欲しい。この姿は、すなわち、高等部がめざす「思いやりのある」生徒像そのものにつながる。

[大項目]	(中項目)	小項目
身辺生活	着脱衣	着替え方, マナー, 身だしなみ, 衣服の調節
	排泄	トイレに行く, トイレのマナー
	清潔	入浴のマナー, 身だしなみ
	食事	食べ方, 食事のマナー
学校生活	整理整頓	持ち物の整理

(a) 【身辺生活】(着脱衣) 着替え方

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『素早く丁寧に着替える』『時間を見ながら確実に着替える』『活動, 作業に備えて着替える』がある。

この小項目のなかで高等部としては、小・中学部でめざしてきた、自分一人で着替えることができるという段階から発展し、時間を意識し、素早く着替えるということと、活動に備えて適切な服装に着替えるということの2点を大切にしたい。つまり、いつもマイペースにゆっくりと着替えるばかりではなく、次の活動に見通しをもち、自分で時間をみながら始業時間に間に合うように急ぐことができ、しかし、慌てるあまりにだらしない格好で周りの人に不快感を与えることのないように、早さと同時に丁寧さを身につける必要がある。また、それぞれの活動や作業にふさわしい服装を自分で判断することができるようになって欲しい。

実際の指導の場面としては、毎日の日常生活の指導における着替えの時間や作業学習のための着替えの時間がある。特に、作業学習のための着替えでは、授業の合間の時間に作業服・作業帽子などへの着替えを済ませ、始業時間に間に合うように移動しなければならない。このような場面で、ただ、早く丁寧にすることを意識させるばかりでなく、今何のために着替えているのか、どうして急がなければならないのかを十分に生徒たちに意識させながら指導にあたりたい。こういった繰り返しの経験をとおして急いで着替えることを身につけ、徐々に自分で意識するようになるだろう。そして最終的には自分で判断して確実に着替えることができるようになると思う。

(b) 【身辺生活】(着脱衣) マナー

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『下着一枚にならないで着替える』『脱いだものを管理しながら着替える』『更衣室のロッカーの前で着替える』『整理整頓をしながら着替える』がある。

この小項目で高等部が大切にしたいのは、公共の場や就労先の更衣室といった狭い空間を複数の人と共有する場面で、羞恥心をもって行動し、周りの人に不快感を与えたり、迷惑をかけたりしないで着替えることである。具体的には、上記の指導内容からも明らかなように、脱いだら着るという着替えの順番を意識せずに、下着姿になることは恥ずかしいことだという意識をもつことをはじめ、狭い更衣室でしゃがみ込んで着替えることは周りの人の邪魔になることや、自分の着替えは脱ぎ散らかしたりせずに自分のロッカーに入れて管理することで、周りの人に迷惑をかけないでお互い気持ちよく着替えができるようになって欲しい。

実際の指導では、先述の着替え方での場面と同様に、日常生活における着替えのなかで常時指導していくことができる。その際、高等部では実際に更衣室のロッカーを使いながら指導をしている。このような場の設定のなかで、具体的な場面を経験することをおして、どうしてマナーが必要なのかも感じながら正しい行動を身につけ、学校に限らず、いろいろな生活の場面で生きる力につながると考える。ただし、どうしてもマナーが必要な理由を理解したり、羞恥心もち

にくい生徒に対しては、一通りのパターンとして下着一枚にならないような着替えの手順を身につけさせることも必要であると考える。

(c) **【身辺生活】(着脱衣)身だしなみ／(清潔)身だしなみ**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、(着脱衣)身だしなみでは、『出かける前にクシで髪を整える』『毎日の習慣として、電気ひげ剃りやカミソリでひげを剃る』、(清潔)身だしなみでは、『必要性を感じてする』『エチケットとして意識しながらする』『習慣としてエチケットの意識が身につく』がある。

この小項目は、内容表試案における小・中・高等部の指導内容を全体的に見通しても、特に高等部段階での指導が重視されるものである。ここでは、人に不快感を与えないようにエチケットやマナーを守り、自分で身なりなどを整えることを大切にしていきたい。

実際の指導の場面では、ホームルームなどの時間を特設して、身だしなみを整えることの必要性を生徒たちに考えさせたり、実感させたりしたうえで、家庭とも連携をとりながら、日常的に繰り返し指導することで、定着し、習慣づいてくるのではないだろうか。また、個々の生徒の能力に合わせて、身なりを整えるための具体的な技能、例えば、ひげ剃りの使い方などを指導していくことも必要である。

(d) **【身辺生活】(排泄)トイレに行く**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『行きたくなったら必要に応じて自分からトイレに行く』『行ってもよい時間かを考えて自分からトイレに行く』『休憩時間にトイレを済ませる』がある。

高等部ではトイレに行きたいときは指示されなくても自分からトイレに行くことは最低限できて欲しい。そして、最終的には、作業(活動)を中断して周りの人に迷惑をかけるようなことがないように、休憩時間に自分でトイレを済ませておくことができる姿をめざしたい。

実際の指導の場面は、日常生活全般にわたる。失敗しないように、尿意をもよおしたときにはすぐにトイレに行かせるようにするばかりでなく、活動中にトイレに行くことは好ましくないということを意識させたい。そのために授業中などは、我慢できる範囲でトイレに行くことを制限するとか、授業を中断されて教師や周りの友達が迷惑であることを伝えるなどして、休憩時間にトイレに行くことの必要性を感じて習慣づけていく必要がある。生徒によっては、活動から逃れるためにトイレに行きたいと主張することも見受けられるので、そのような行動を防ぐためにも休憩時間にトイレに行くことは身につけさせたいものである。このことは、実際にしばしば現場実習などで問題になることであり、日頃からの積み重ねと徹底した指導が必要である。

(e) **【学校生活】(整理整頓)持ち物の整理**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は『自分の持ち物と分かり、自分で整理する』『自分が使いやすいように整理する』『周りの人のことを考えて荷物を置いたり、靴を履いたりする』『他の人が見ても恥ずかしくないように整理する』がある。

この小項目で高等部が大切にしたい内容は、自他のものの区別をはっきりしたうえで、自分が使いやすいように整理することと、周りの人のことも考えながら自分の持ち物を整理することである。

実際の指導では、日々の日常生活のなかで繰り返し正しい行動を身につけることを徹底し、習慣化を図ることができるだろう。登下校時に靴箱で靴を履き替えるときは周りの邪魔にならないところに荷物を置くといったことや、校外学習での公共交通機関の利用の場面なども、荷物は座席ではなく自分の膝の上に乗せるなどの具体的な指導ができるよい機会である。

(荒木 都)

## エ 「地域で生活するうえで必要」に関する指導内容のとらえについて

ここでは、「地域で生活するうえで必要」と考えられる指導内容の厳選の視点について述べるとともに、それらの視点によって厳選された高等部の指導内容が内容表試案にどのように位置づけられているのかを述べる。

厳選の視点は、以下の4点である。

### (ア) 厳選の視点10「公共施設」

10-a「生活そのものに直結した公共施設」

10-b「生活の楽しみや潤いにつながる公共施設」

### (イ) 厳選の視点11「公共交通機関」

### (ウ) 厳選の視点12「危機管理」

### (エ) 厳選の視点13「対人関係」

13-a「集団を意識したマナー」

13-b「大人の男女を意識したかかわり」

13-c「礼儀や節度をわきまえたコミュニケーション」

## (ア) 厳選の視点10「公共施設」

### a 「生活そのものに直結した公共施設」

生徒の現在の生活や卒業後の生活を考えると、生活していくために必要であり生活そのものに直結した公共施設を知ることは大切なことである。例えば、仕事について相談できる公共施設や、障害から生じる諸問題や悩みの解決、あるいはそのための手続きに必要な公共施設などを知り、状況に合わせて自分に必要な公共施設を選んで利用していくことができると、充実した生活につながると考える。

この厳選の視点に関する指導内容の、内容表試案における位置づけは、次のようになっている。

[大項目]	(中項目)	小項目
家庭・地域生活	施設利用	相談機関、郵便局・銀行、ハートセンター(長崎市障害福祉センター)

### (a) 【家庭・地域生活】(施設利用) 相談機関

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『手順に従って施設を利用する』から『相談機関(育成会など)のいろいろな利用の仕方を知る』という段階までである。

この小項目で高等部が大切にしたい内容は、まずは生徒の将来の生活に必要な不可欠と思われる公共施設がどこにあり、どのような働きをしているのかを知ることである。そして実際に公共施設を利用する経験をし、最終的には、卒業後に実際に利用できるような力や姿勢に結びつけていきたいと考えている。

高等部のなかで実際に指導する場面を考えると、生徒が自分自身の進路や卒業後の生活に関心をもつ3年生の段階で、市役所の障害福祉課やハローワーク、更生相談所、育成会などを訪問し、実際の利用の仕方や手続きの仕方について学習する機会を設定することが望ましい。在学中にはまだ、将来自分が利用するという具体的なイメージをもつことは困難であると思われるが、相談機関の働きを知り、利用の経験をしておくことは、卒業後に相談や援助を求める必要が生じた場合の参考となるであろう。また、特定の相談機関だけでなく、様々な相談機関を知らせておくことは、生徒自身が自分の相談内容や生活の状況に合わせて、相談機関を自ら選んで利用する姿にも結びつくと考える。このような意味から、卒業後の生活も視野に入れた公共施設利用の経験を、在学中に学習のなかに取り入れていくことは大切である。さらに今後は、生徒の実態に合わせて



生活支援センターなどの利用も考えていけるとよいであろう。

**(b) [家庭・地域生活] (施設利用) ハートセンター**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『大人と一緒に利用する』から『自分の目的に合わせてハートセンターを利用する』という段階までである。

この小項目でも、(a)[家庭・地域生活] (施設利用) 相談機関の項目と同様に、ハートセンター（長崎市障害福祉センター）の働きを知ることと、実際に利用する経験をとおして、最終的には、卒業後に実際に利用できるような力や姿勢に結びつけていきたいと考えている。

高等部のなかで実際に指導する場面を考えると、校外学習でできるだけ利用の機会を増やすとよいと思われる。ハートセンターには、相談機関の一つである育成会があるほか、プールや体育施設も完備されており利用が可能である。また、フラワーアレンジメントやダンス、パソコン教室なども開催されている。在学中から保護者とともに定期的な利用経験を重ねることで、趣味につながる活動の広がりが期待できる。また、卒業後の生活においては、学校以外での学びの場の保障にもつながる。現在の卒業生の様子を見ると、月に一度の青年学級での活動を楽しみにしている様子が見える。休日に時間があるから参加をしているという消極的な理由だけではなく、人と触れ合うことを望んだり、楽しんだり学んだりすることを積極的に希望して参加していると感じる。できればこの青年学級を通過点として、地域のカルチャーセンターやサークル活動へと発展させていくことが理想である。ハートセンターを利用する活動もその一つととらえ、在学中から卒業後を見通した素地づくりをしていくことが望ましい。

**(c) [家庭・地域生活] (施設利用) 郵便局・銀行**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『はがきや切手を購入する』から『銀行・郵便局で手続きをして預（貯）金をする理由を考える』という段階までである。

この小項目では、郵便局や銀行の役割を理解し、実際に利用の経験を重ねることで利用の仕方に慣れ、将来の生活に役立てることができる力へとつなげたいと考える。

高等部のなかで、この内容を実際に指導する場面を考えると、郵便局の利用に関しては学校行事の折にふれて手紙やお礼状を書いて投函したり、葉書や切手を購入したり、暑中見舞いや年賀状などの季節の便りを書く習慣をつけたりするような、意図的な学習場面の設定が必要である。郵便局・銀行の預（貯）金に関しては、修学旅行などの目標をもたせながら、必要な費用を積み立てる学習が考えられる。月々定期的に積み立てることで、継続利用の経験ができ、将来自分で利用する力にもつながるであろう。初めは学校の周辺にある郵便局や銀行の継続利用をとおして定着を図り、校外学習などで外出した際に違う場所での利用経験も増やしていけるとよい。そうすることで、各生徒がそれぞれの地域にある郵便局や銀行でもためらわずに利用できる力へと結びつくと思われる。さらにより自立した生活を願うと、今後は窓口やキャッシュコーナーを使つての現金振込の仕方を教えることも必要となるであろう。

**b 「生活の楽しみや潤いにつながる公共施設」**

完全学校週5日制の実施や生徒の卒業後の休日の過ごし方を考えると、生活の楽しみや潤いにつながるような公共施設を利用することも重要な視点と考えられる。

この厳選の視点に関する指導内容の、内容表試案における位置づけは、次のようになっている。

[大項目]	(中項目)	小項目
家庭・地域生活	余暇	外食、図書館、ボウリング場、プール、映画館
情操	音楽の鑑賞	聴く鑑賞
	作品の鑑賞	作品への興味・関心

(a) **〔家庭・地域生活〕(余暇) 外食, 図書館, ボウリング場, プール, 映画館**

これらの小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『大人と一緒に利用する』という施設利用の仕方を知る段階から、『自分の食べたい物を選ぶ』『読みたい本を選ぶ』『自分に合う靴を借りる』という自分に合った利用の仕方での慣れる段階、そして『一人で行く』『友達と一緒に行く』『期日までに返却する』など自分でマナーや決まりを守って利用することができる段階までを含んでいる。

これらの小項目で高等部が大切にしたい指導内容は、まずは生徒が楽しんで公共施設を利用し、利用の仕方に慣れることである。そして、学校で経験したことを家族と一緒に再度経験したり、友達との休日の過ごし方に結びつけたりするなど、生徒の楽しみの一部として生活に般化させたいと考えている。

高等部でこの内容を実際に指導する場面を考えると、学級単位での校外学習あるいは高等部全体での行事で、これらの公共施設を利用する学習場面を設定できる。学校での利用経験が家庭生活に取り入れられやすくするために、学習の様子を家庭に伝えたり、休日に利用できそうな公共施設の情報を与えたりするなどの働きかけをしていくことも大切である。また、これらの公共施設の利用の際には療育手帳を提示することで料金が安くなることや、利用のためにカードの提示を必要とすることも多い。療育手帳を使って利用する方法を知らせたり、カードの大切な取り扱い方を指導したりすることも必要である。併せて、これらの公共施設を利用するにあたり、例えば映画館の予定やプールの時間を調べるなどの情報収集の仕方(本・電話などから)や利用の際のマナー、そして利用後の正しい金銭の支払い方なども、切り離しては考えられない大切な指導内容となってくる。情報収集に関しては、厳選の視点2「他者から(物も含む)の発信を理解する力を高める」(p.160)と関連し、マナーに関しては厳選の視点13「対人関係」(p.175)と、金銭の支払いに関しては厳選の視点5「実務的なこと」(p.162)とそれぞれ関連しており、各項で述べているため、ここでは説明を省略する。

(b) **〔情操〕(音楽の鑑賞) 聴く鑑賞/(作品の鑑賞) 作品への興味・関心**

これらの小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『自分の好きなCDをレンタルショップで借りる』と『作品展や美術館に自分から出かける』がある。

情操を育む内容と深く関連しているため、大項目〔家庭・地域生活〕ではなく、大項目〔情操〕に位置づけている。これらも生徒の休日の有効な過ごし方につながる公共施設の利用といえるであろう。(a)の項目と同様に、学校でこれらの公共施設を利用する学習を行ったときにはその情報を家庭に伝えて、家庭でも休日などに利用する経験を増やしてもらったり、友達と一緒に計画を立てて出かけてみようかなと思えるような積極的な働きかけをしたりして、余暇の利用につなげていくことも大切であると考えている。

(イ) **厳選の視点11「公共交通機関」**

通学や通勤だけでなく、完全学校週5日制の実施や卒業後の休日の過ごし方、つまり生活の楽しみや社会参加の幅の広がりから公共交通機関の利用の指導は重要である。

この厳選の視点に関する指導内容の、内容表試案における位置づけは、次のようになっている。

[大項目]	(中項目)	小項目
家庭・地域生活	乗り物の利用	電車(路面電車), バス, マナー
	余暇	移動

(a) [家庭・地域生活] (乗り物の利用) 電車, バス

これらの小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『電車を乗り継いで利用できる』や『料金表を見てお金を準備する』『手帳を使ってお金を支払う』などがある。

これらの小項目で高等部が大切にしたい指導内容は、行き先に合った交通機関を選んだり、目的地のある場所で降りることができたりすることや、正しく料金を支払うことができるなどである。これらは電車やバスなどを自由に利用できるようになるための基礎的な技能であると考えられる。なお、ここで述べる電車とは長崎市内の路面電車のことである。

高等部でこの内容を実際に指導する場面を考えると、学級ごとの校外学習の場が考えられる。いろいろな方面の電車を利用することができるように目的地を設定すれば、電車の利用の幅が広がり、行き先に合わせた電車の乗り方についての理解も深まっていくであろう。公共交通機関を自由に利用できる力がつくと、生活の場も広がり、社会参加の可能性も広がる。現場実習でも公共交通機関を利用する機会が多いことから、就労場の選択肢の幅にも広がりが期待できることとなる。また、療育手帳の使用については公共施設の利用と同様、公共交通機関の利用でも欠かせない。学習の都度繰り返し経験させることで確実な力としていく必要がある。なおJRの利用に関しては、校外合宿や現場実習の通勤で経験するが、指導内容として明記していない。

この項目で述べる公共交通機関の利用における力は、[学校生活] (登下校) 交通機関の項目にあげてある指導内容が基礎となっており、[自己認知] (自己選択・自己決定) 外出計画に発展していくと考えられる。このように生活に必要な交通機関の利用から、地域社会での生活に広げるための交通機関の利用、さらにはより自立した生活や充実した生活につなげる交通機関の利用へと発展させていく考え方と指導が大切である。

(ウ) 厳選の視点12「危機管理」

学校と家庭という大人に守られた生活ばかりではなく、卒業後の生活も視野に入れて、自分で自分の身を守っていく気持ちや姿勢を身につけることが大切である。

この厳選の視点に関する指導内容の、内容表試案における位置づけは、次のようになっている。

[大項目]	(中項目)	小項目
学校生活	危険の回避	危険の認知, 避難の仕方
身体	からだと心	性被害

(a) [学校生活] (危険の回避) 危険の認知

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『家や学校内外の危険な場所を知る』や『自分で安全かを確認しながら行動する』などがある。

この小項目では、危険な場所を知ることによって気をつけようという気持ちをもつようになる段階から、危険と安全を判断する力をつけて自ら安全に生活をする姿勢を身につけるところまで育てて欲しいと考えている。

高等部でこの内容を実際に指導する場面を考えると、登下校の指導をとおして、生徒とともに通学路の安全確認をすることができる。特に高等部では、階段や段差、交通量が多くて危険な場所という視点だけではなく、人通りが少なく死角となりやすい場所に対しての注意を喚起するなど、(c) [身体] (からだと心) 性被害の項目と関連する指導も意図的に行う必要がある。

加えて、自ら安全に生活する姿勢を身につけることは、卒業後の生活にも欠かせない。卒業後は、保護者や教師に常に守られた生活ばかりではないことから、金銭による被害なども増える可能性がある。今後は、クレジットカードによる被害や携帯電話の使い過ぎによる金銭トラブルな

ども視野に入れて指導場面を設定する必要がある。

#### (b) 【学校生活】(危険の回避) 避難の仕方

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『非常ベルが鳴ったら慌てずに放送や指示を静かに聞く』や『火災報知機や消火器などの働きがわかる』そして『公共施設などで非常口がわかる』などがある。

この小項目で高等部が大切にしたい指導内容は、まずは火災などの危険に直面した場合に、慌てることなく周りの様子を見たり、放送や指示を聞いたりして避難することができることである。基本的な避難の仕方や危険への対応の仕方を身につけたうえで、最終的には火災報知機や消火器などの働きがわかり、あるいは、公共施設を利用した際に自分で非常口の標示を見て万が一に備える態度が身につけられるとよいと考える。

高等部でこの指導内容を実際に指導する場面を考えると、学校生活で定期的に行っている避難訓練において基本的な避難の姿勢や態度を身につけさせ、公共施設を利用する学習場面をとおして必ず非常口を確認することを習慣化していくことが考えられる。特に宿泊を伴う施設での非常口の確認は合宿や修学旅行などで意図的に取りあげる必要がある。

#### (c) 【身体】(からだと心) 性被害

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『被害を受けそうになったり被害を受けたときに、大人に助けを求めたり、報告したりする』や『性被害の内容がわかり、被害を受けないために、自分の態度や行動に気をつける』がある。

この小項目で高等部が大切にしたい指導内容は、万が一危険な目に遭いそうになった場合には大声を出したり、助けを呼んだりするなどして自分の身を自分で守る方法を知り、それを実行できるようにすることである。そして嫌な場面に遭遇したり被害に遭ってしまった場合には泣いたり黙ったりするだけでなく、周りの大人に話すことが大切であることも教えていきたい。

高等部の女子生徒は年齢的にも特に注意を要する。中学部では模擬的な場面を設定して具体的な指導を行っている。高等部では、新学期や薄着の季節には、特に朝の会や帰りの会などの時間を利用して中学部で学習したことを想起させて生徒に意識づけをさせるようにしている。また、学級での日番や作業などを放課後に残って行うことも多く、下校時刻が遅くなることもある。そのときには家庭に電話をしてから帰宅させるなど危険をできるだけ未然に防ぐような配慮もしている。同性の教師が生徒と日頃から性被害の怖さについて話し合ったり、ニュースなどで事件が報道されているときには即時に話題として取りあげて注意を喚起するような指導が今後も必要であろう。それとともに、110番の家や交番、警察の利用の仕方なども具体的に指導していくことや、地域での人間関係を密にしていくことも心がけねばならない。

### (I) 厳選の視点13「対人関係」

#### a 「集団を意識したマナー」

「集団を意識したマナー」とは、自分の置かれている状況を理解して集団を意識することやその場の決まりを守ること、場をわかまえることなどである。

この厳選の視点に関する指導内容の、内容表試案における位置づけは、次のようになっている。このなかで、高等部として重点的に取りあげている指導内容についていくつか説明する。

[大項目]	(中項目)	小項目
学校生活	集団活動	役割の理解, 集団意識
	整理整頓	持ち物の管理
	儀式	儀式の参加
家庭・地域生活	乗り物の利用	マナー
	施設利用	相談機関
	余暇	図書館, 映画館

(a) **【学校生活】(整理整頓) 持ち物の管理**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『他人の物を勝手に触らない』や『他人の物を借りるときは必ず一声かける』『貴重品や書類に触れたり, それらを持ちだしたりしない』がある。

この小項目で高等部が大切にしたい指導内容は, 自分の物と他人の物との区別ができ, 決まりを守って他人と生活ができるようになることである。

高等部の生徒の様子を見てみると, 友達の鉛筆や消しゴム, あるいは教師の机上の筆記用具などを気やすく借りてしまう場面も多々見かける。このくらいはいいだろうと見過ごしてしまいがちな場面ではあるが, どんなに気心の知れた関係であっても「貸してください」「見せてください」とお願いをしてから借りることや, 自分の物以上に大切に扱うこと, そして必ず, 「ありがとう」「たすかったよ」などとお礼を言ってから返すことを, 日常的生活場面でその都度指導していくことが望ましい。そうすることで, 自分が欲しいものでもすぐに手を出さずに一呼吸おいて考えることや, 現場実習先で興味本位で他人の物に触れないことなどの指導にも結びつくであろう。学校生活のような慣れた環境でも決まりを守ったり, 意識をしたりすることが習慣化できれば, 場や集団の変化にも対応していく力がついていくものと考えられる。

(b) **【学校生活】(儀式) 儀式の参加**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は, 『式の雰囲気を感じ取り, 静かに式に参加する』や『式の意味を知り, 静かに式に参加する』である。

この小項目で高等部が大切にしたい指導内容は, 周りの様子や場の雰囲気を察知して集団を意識し, 場をわきまえた振る舞いができるようになることである。

高等部でこの内容を実際に指導する場面を考えると, 学校生活の入学式, 始業式, 終業式, 卒業式などがある。学校生活のなかで「式」の雰囲気を繰り返し感じさせて身につけさせていくことで, 家庭や地域での冠婚葬祭においても自分から周りの雰囲気を感じ取って, 周りに合わせた態度をとる力が育つであろう。

(c) **【家庭・地域生活】(乗り物の利用) マナー**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は, 『順番を守って乗車する』や『大きな声でおしゃべりをしないで乗車する』『人の邪魔にならないように立ったり座ったりする』『席を譲るなど他の人を意識した乗り方ができる』などがある。

この小項目で高等部が大切にしたい指導内容は, まずは決まりやマナーを守ることである。そして, 周りに迷惑をかけないようにしようとする気持ちをもつことや, 自分のことだけでなく他の人の立場や気持ちを考えられるようになることまでをねらっている。

高等部でこの内容を実際に指導する場面を考えると, 厳選の視点11「公共交通機関」と合わせて指導を行うとよい。人の邪魔にならないような立ち方や座り方を実際の場で教えたり, よい例や悪い例を友達同士で比較させながら考えさせたり, 席を譲って相手の人に喜んでもらうことで,

生徒自身も周りもうれしい気持ちになる経験を味わわせたりするなど、具体的な場面での指導が必要である。

**b 「大人の男女を意識したかかわり」**

「大人の男女を意識したかかわり」とは、大人社会で通用するような大人の男性・女性を意識した付き合い方や振る舞い、考え方のことである。

この厳選の視点に関する指導内容の、内容表試案における位置づけは、次のようになっている。このなかで、高等部として重点的に取りあげている指導内容について説明する。

[大項目]	(中項目)	小項目
身体	性教育	男女の違い、命の尊さ、異性とのかかわり

**(a) 【身体】(性教育) 異性とのかかわり**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『自分がされたら嫌なことを、人にしない』『異性を理解し、異性の人格を大切にしようとする』『相手が嫌がることをしない、嫌なことははっきりと言うなど、交際のエチケットやマナーを守って好きな異性と付き合う』がある。

高校生となると好きな異性が身近にいたり、心の中に憧れの異性を抱えていたりする生徒も多い。身体的にも大人に近づいている。異性に興味をもち、話してみたい、触れてみたいと考えることも自然である。しかしながら、子どもするときにはふざけて戯れ合っても気にならなかったことが、大人の場合は他人からどのように見られるか、あるいは相手からどのように思われるか、そして自分自身も子どもときと比べて受け取り方がどのように変化したかなどをじっくりと考えさせることで、大人としての異性への接し方がどうあるべきかを理解させていくことが必要であろう。この小項目では、大人の男性、女性として互いを意識したり、理解したりしながら、相手の性や存在を尊重することの大切さを知らせるとともに、より大人の接し方を身につけさせたい。

高等部でこの指導内容を実際に指導する場面を考えると、ホームルームなど学級ごとの学習場面において、男女が含まれた集団で互いの考えを参考にしながら、生徒自身が考えを深めていくような学習が考えられる。一方、大人としての付き合い方に対する理解が伴わずに異性への関心だけが先行しそうな生徒に関しては、個別に意識をもたせる指導も必要である。すべてがいけないことではなく、人を好きになる気持ちは大切なことやデートもマナーや節度を守ればよいことを知らせたい。そのためには、デートの行き先やデートの際の振る舞い方なども模擬的な場面を設定して指導する必要がある。また、比較的能力の高い生徒には、将来の恋愛や結婚についても考えさせたい。話題に取りあげたり、育成会から出版されているような、生徒が理解しやすい図書などを紹介したりして考えるきっかけを与えることも大切である。さらに男女の性差を越えて、人間として相手を尊重し、助け合って生活していくような姿勢につなげていくような指導も同時に行えるとよいと考える。

**c 「礼儀や節度をわきまえたコミュニケーション」**

話し方や応答の仕方などで、大人としての礼儀や節度をわきまえたコミュニケーションの力が高まれば、よりよい対人関係を築くことにつながると考える。

この厳選の視点に関する指導内容の、内容表試案における位置づけは、次のようになっている。このなかで、高等部として重点的に取りあげている指導内容についていくつか説明する。

[大項目]	(中項目)	小項目
身辺生活	コミュニケーション	意思伝達、呼名の応答、応答、挨拶、尋ねる、会話、電話

#### (a) 【身近生活】(コミュニケーション) 挨拶

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『自分から身近な人にごく簡単な日常の挨拶をする』から『知らない人にも挨拶をする』『人にもものを頼むとき、断るときなどに適切な言葉で言う』『場に応じた言葉を考えながら挨拶をする』という段階までである。

この小項目で高等部が大切にしたい指導内容は、まず基本的な挨拶ができること、そしていつも自分から気持ちよくできるようになることである。さらに、相手に対して感謝やねぎらいの気持ちを表すことや、自分の置かれた立場や状況を考え、場に合った言葉遣いや挨拶ができるようになることまでを含んでいる。

高等部でこの指導内容を実際に指導する場面を考えると、学校生活全般で指導がなされるべきものである。「おはようございます」「さようなら」などの基本的な挨拶は日常的に繰り返されるため、挨拶をするときの声や姿勢、表情などを含めて、より気持ちのよい挨拶の仕方についてその都度指導することが大切であろう。「ありがとうございます」「すみません」「よろしくおねがいします」などは、作業学習で挨拶をすべき場面を意図的に多く設定したり、校外学習の際に知らない人に尋ねてお礼を言う機会を取り入れたり、日常生活のなかでも教師や友達に対して感謝やねぎらいの気持ちを言う機会を増やしたりして意識を高め、習慣化を図る必要がある。顔を合わせたら自然に挨拶が口から出てくるような習慣が身につく、相手に対して気持ちをこめた挨拶をすることができるようになれば、家庭や、職場や、地域の人とも自然に挨拶ができて、よりよい対人関係が築けるようになると思われる。

#### (b) 【身近生活】(コミュニケーション) 会話

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は『友達や教師と共通の話題や楽しかったことなどを話す』や『自分の言いたいことを話すだけでなく、人の話も最後まで聞く』『相づちを打ちながら人の話を聞く』『人の悩みの相談にのる』などがある。

この小項目で高等部が大切にしたい指導内容は、人と一緒の場において会話の雰囲気を楽しむなど、人とのかわりそのものを楽しむ内容から、人の話をじっくりと聞いたり、相づちを打つなど会話を楽しむ技能や態度を養う内容までを含んでいる。さらに、自分の悩み事を相談したり、相談にのったりする段階までつなげていくことができると、社会でのより円滑な対人関係を築くことができ、充実した生活が送れるようになると思う。

高等部でこの指導内容を実際に指導する場面を考えると、この指導内容だけを特設した時間で指導することは困難である。話すことや聞くことに関する技能面の指導は言語の学習など特設した時間で系統的に指導し、その力を具体的に使っていく場面や日常生活に応用していく方法は、日常生活全般をとおして指導していく必要がある。楽しい会話の場を設定し、たくさんの生徒を巻き込んでいくような雰囲気や場面を、学級のなかに努めて取り込んでいく工夫をすることも大切であろう。

(和田充紀)

#### ② 「仕事」における指導内容のとらえについて

「仕事」のカテゴリーの厳選の視点は、以下の6点である。

- (ア) 精選の視点14「作業を行ううえでの態度」
- (イ) 厳選の視点15「対人関係・コミュニケーション」
- (ウ) 厳選の視点16「手指機能」
- (エ) 厳選の視点17「理解」
- (オ) 厳選の視点18「持続力」

#### (カ) 厳選の視点19「作業に対する喜び」

上記の厳選の視点14, 15, 18, 19の4個は、「態度」を含む内面の視点であり、厳選の視点16, 17の2個は、「知識・技能」に関する視点である。「仕事」のカテゴリーの厳選の視点の数でみると「態度」を含む内面の視点の方が「知識・技能」に関する視点よりも多い。小項目数でも「態度」を含む内面に関する指導内容は、「知識・技能」に関する指導内容に比べ多い。つまり、「知識・技能」に関する具体的な指導内容は、現場実習や作業学習などの具体的な作業をとおしてその作業に必要な固有な技能や知識は身につくように指導するが、中核的な指導内容とはなりにくい。反面、「態度」に関する指導内容は、どのような就労の場においても必要で、普段の指導の繰り返しや気持ちを育てることがなければ身につくことが難しく、そのために中核的な指導内容として多くあがってきたと考えられる。

また、離職の理由としては、田島(2001)も述べているように、対人関係のトラブルが多くを占めている。その原因は、本人の問題ばかりでなく周りの人の理解も必要な場合もあるが、本人の問題に視点を絞ると、思っていることをうまく伝えられなかったり相手のことを誤解したり(コミュニケーションに関する事)、相手によって態度や言葉遣いが違ったりすること(態度に関する事)がトラブルの原因になることが多い。このように、対人関係の視点からも「態度」に関する指導が大切なこともわかる。

「仕事」のカテゴリーにおける厳選の視点14, 15, 16, 17, 18までの5つの厳選の視点は、最低身につけて欲しいというトップダウン的な発想のもので、働くうえでの基礎的、基本的な知識、技能、態度である。厳選の視点19「作業に対する喜び」は、働くことを自らの生き甲斐とするための厳選の視点で、厳選の視点14, 15, 16, 17, 18までの5つの厳選の視点を基礎として成り立っていると考えられる。つまり、働くうえでの基礎的、基本的な知識、技能、態度を身につけたうえで、働くことが、自らの生き甲斐につながるように育てて欲しいと考える。ただし、作業に対する喜びは、作業の結果を単に喜ぶことではない。本校の内面の研究(長崎大学教育学部附属養護学校, 1999)において、生徒の意識に沿った働きかけが生徒の意識を高めていくうえで有効であることを報告した。仕事においては、まず、「してみたい」という生徒の気持ちに沿ってさせてみるころからはじめ、うまくできないところをどうやってしたらいいか考えさせ、その後また取り組ませ、また考えさせることを繰り返すことで、満足感や達成感を感じさせることができる。満足感、達成感を充分に感じさせてやることできれば「やればできるぞ」という自信をもつことになり、向上心につながる。ひいては働くことの喜びを、この一連の心の流れのなかにみつけられると考える。自分のしていることをしっかりみつめ、興味をもって自分であれこれしていくなかで、感じるのが作業に対する喜びである。

以上のように「仕事」についてとらえたうえで、「仕事」のカテゴリーにおける厳選の視点ごとに、内容表試案の指導内容を小項目ごとに、高等部として大切であると考えられる主な指導内容を解説する。

#### (ア) 厳選の視点14「作業を行ううえでの態度」

「仕事」のカテゴリーにおける厳選の視点「作業を行ううえでの態度」は、実際に作業をしていくうえでの基礎的、基本的な態度である。内容表試案のなかでこの「作業を行ううえでの態度」に関する項目を取り出すと以下のようなになる。

[大項目]	(中項目)	小項目
仕事	取り組み	就業時間, 協力
	安全	危険場所, 道具・機械
	確実	手順の確実, 作業の確実
	丁寧	道具, 材料, 製品



**(a) 【仕事】（取り組み）就業時間**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『出退勤の仕方がわかる』から『始業時間に遅れない』や『残業を嫌がらない』までである。具体的な指導は、最初、時計を示し、教師から指示されながら始業前に作業室に行くことからはじめ、次は、時計に印などをつけその印などを手がかりに遅刻しないことを意識して移動する段階がある。最終的には、残業などの経験をとおして、きりのいいところで止めたり、今日の目標などを自分で判断して、自分から残業するようになってくればと考える。

この小項目で高等部が大切にしたいことは、時間を意識して行動することと、仕事に責任をもって自分の仕事が終わるまできちんとするという気持ちをもつことである。

この指導内容を実際に指導する場面を考えると、作業学習場面ばかりでなく、日常の学校生活のなかで時間を意識させて活動させることが大切である。一方、作業場面においては、ノルマを決めて取り組ませ、意図的に残業させる場面をつくる。つまり、普段の学級の活動のなかで時間に遅れない態度を育てるとともに、作業場面においては、残業の必要な場をつくり、残業に慣れさせることで指導できる。

**(b) 【仕事】（取り組み）協力**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『仲間を意識し、周りの様子からするべき事に気づき一緒にする』から『自分の役割を意識しながら作業に取り組む』や『友達と一緒にしようという気持ちを持ち、自分の役割を意識しながら作業を分担し協力して行う』そして『作業の場面を見て、手助けや協力、荷物運びなどを進んで行う』までである。最初は、指示されながら、一緒に活動することからはじめ、次に、友達と一緒に活動する係などの毎日決められた活動をさせる。最終的には、状況を見ながら自分に何ができるか判断して、自分から行動するようになってくればと考える。

この小項目で大切にしたいことは、他の人と一緒に活動したいという気持ちをもつことと、他の人の活動を見て自分にできることを自分からしようという気持ちをもつことである。

この指導内容を実際に指導する場面を考えると、作業学習のなかで指導する必要があるが、日常の学級の活動のなかでも多くの場面が想定できる。つまり、作業場面に限定することなく普段の学級の活動のなかで意識的に協力をせざるを得ない場などをつくることは十分に可能である。要するに、この協力に関係する指導内容は、作業学習場面に限らず、学校生活のあらゆる場で意識させることのできる指導内容である。

**(c) 【仕事】（安全）危険場所**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『注意を受けると危険な場所に近寄らない』や『表示などを見て危険な場所がわかり近寄らない』や『作業の状況などから危険を察知して近寄らない』までである。具体的には、最初は指示して、危険な場所を知らせ教師とともに近寄らないことを経験させる。実際の場の標識などとおして危険なことの標識であることを教え、最終的には、標識などから危険な場所がわかれば、自分からその場に近寄らないようになってくればと考える。

この小項目で大切にしたいことは、指示されて危険なところがわかれば自分からそこへは近寄らないという気持ちをもつことと、標識などの表示の意味がわかれば、自分からそこへは近寄らないという気持ちをもつことである。

この指導内容を実際に指導する場面を考えると、もちろん作業学習のなかで機械のそばに近寄らないなどの場面が考えられるが、日常の学校生活のなかでも、避難訓練の場面や校外学習の場面などが想定できる。つまり、作業場面に限定することなく、普段の生活のなかで危険場所を意

識させるような指導をする必要がある。要するに、この危険場所に関係する指導内容は学校生活のいろいろな場で意識させることのできる指導内容である。

#### (d) 【仕事】(安全) 道具・機械

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は『むやみにスイッチに触らない』から『道具や機械のどこが危険な部分かがわかる』や『教えられたとおり道具や機械を安全に扱う』や『自分で安全かどうかを確かめて道具や機械を操作する』までである。最初は、危ないことを教え、むやみに勝手に触らない指導をするところから、次に、危ないところを意識させて安全な使用方法を教えていく。最終的には、正しい使い方を繰り返すことで安全に自信をもって機械や道具を使うようになってくれればと考える。

この小項目で大切にしたいことは、機械や道具は勝手な使い方をすると危ないという気持ちをもつこと、つまり、機械や道具を扱うとき、きちんと決められた方法で扱えば、安全に仕事ができるという気持ちをもつことである。

この指導内容を実際に指導する場面を考えると、作業学習のなかで機械を扱う場面や、家庭工作でのこぎりや金づちを扱う場面、農耕でくわなどを扱う場面などが考えられる。つまり、作業場面での機械や道具の操作で危険なところを意識させることと、正確で安全な操作を確実にさせることで自信を持たせることなどが重要となる。要するに、この機械操作や道具の操作の安全に関係する指導内容は、作業の場で自分が機械や道具を操作するときにきちんとした手順で操作することを意識させたり、正しい扱い方を習慣化させたりすることによって伸ばしていける指導内容である。

#### (e) 【仕事】(確実) 手順の確実

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『教師と一緒に作業をすることで手順がわかる』から『手順表などの手がかりを自分で見て手順がわかる』や『手がかりがなくても手順がわかっている』、『必ず手順を確認して、良否の判断をしながら道具を使う』までである。最初は、教師と一緒に作業をしながら手順を学ぶところから、次に、手順表などの手がかりを用いて手順を意識しながら活動をしていく段階がある。最終的には、正しい手順でいつも行いでき具合にも気を配るようになってくれればと考える。

この小項目で高等部が大切にしたいことは、いつも手順どおりに行うことと、作業には必ず一定の手順がありその手順どおりに行うときちんとできるという気持ちをもつことである。

この指導内容を実際に指導する場面を考えると、作業学習のなかでいくつかの工程のある作業を何回も繰り返す場面での指導が重要である。つまり、作業場面で決まった手順で行う作業の各工程の順番をきちんと意識させることと、今やっている工程が全体のどこに位置しているのか、次の工程はどれなのかを意識させることが大切となる。要するに、作業工程の手順を確実に行うことに関係する指導内容は、手順の決まった作業を繰り返し行うときに正確な手順で作業することを意識させ、現在している作業工程を手順表で確認させ、次に、どの工程をするのか確認をしてから取りかからせることを繰り返すことで、伸ばしていける指導内容である。

#### (f) 【仕事】(確実) 作業の確実

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『教師に指示されてきちんと行う』から『自分で手がかりを見てポイントを意識しながらきちんと行える』や『自分でポイントを意識しながら作業をする』、『必ずポイントがうまくできたか確認しながらきちんと作業を行う』までである。最初は教師と一緒にしながらどこを丁寧にきちんと行えばよいかポイントを学ぶことから、次に、ポイント表などの手がかりを用いてポイントを意識しながら活動をしていく段階がある。最終的には、いつでもポイントを意識して丁寧にを行い、でき具合にも気を配るようになってくれればと

考える。

この小項目で大切にしたいことは、ポイントになるところを丁寧に行うことと作業には必ずポイントがありそのポイントを丁寧に行うことでその作業がよくなるという気持ちをもつことである。

この指導内容を実際に指導する場面を考えると、作業学習のなかに代表的な指導場面があるが、他の学校活動にも丁寧に行う必要のあることはたくさんある。つまり、何か活動をするときには必ずポイントがあり、丁寧にする必要のあるところがあるので、作業場面ばかりでなくあらゆる活動のなかでポイントを意識させることが重要となる。要するに、作業の確実に関係する指導内容は、あらゆる活動のなかで丁寧にするところを意識させ、繰り返すことで伸ばしていける指導内容である。

#### (g) 【仕事】（丁寧） 道具

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『使った道具を丁寧におく』から『道具に無理な力を加えないで扱う』や『使った道具をもとの場所・状態にきちんと戻す』、『道具の手入れをきちんと行う』までである。最初は、自分の使っている道具をそっと丁寧に置くことを学ぶところから、次に、後片付けの際にきちんと後片付けをする。最終的には、自分のいつも使う道具の手入れまでできるようになってくれればと考える。

この小項目で大切にしたいことは、自分の扱う道具を丁寧に大切に扱うことと、自分の使った道具について責任をもつことである。

この指導内容を実際に指導する場面を考えると、作業学習の中に指導場面があるが、他の学校活動のなかで道具を使う場面はたくさんあると考えられる。つまり、道具を使った活動をするときには必ず指導する必要があることなので、作業場面ばかりでなく、あらゆる道具を扱う活動のなかで道具を大切に扱うことを意識させることが重要となる。要するに道具を大切に扱うことに関係する指導内容は、あらゆる道具を使う活動のなかで丁寧に扱うことを意識させ丁寧にきちんと後始末することを繰り返すことで身につけさせることのできる指導内容である。

#### (h) 【仕事】（丁寧） 材料

この小項目における高等部で扱う指導内容は、『材料を大事に扱う』と『材料を無駄にしない』とがある。最初は、材料をそっと丁寧に置くことなどを教師に指示されながら学ぶところからはじめ、最終的には、材料を無駄なく使用できるようになってくれればと考える。

この小項目で大切にしたいことは、材料を丁寧に大切に扱うことと、材料を無駄に使わないことである。

この指導内容を実際に指導する場面を考えると、作業学習の中に材料を扱う指導場面があるが、調理学習のなかや被服、家庭工作などのなかにも材料を使う場面はたくさんある。つまり、材料を使った活動をするときには必ず指導する必要があることなので、作業場面ばかりでなくあらゆる活動のなかで材料を大切に扱うことを意識させることが重要となる。要するに、材料を大切に扱うことに関係する指導内容は、あらゆる材料を使う活動のなかで丁寧に扱うことを意識させ、無駄に使わないことを繰り返し行わせることで身につく指導内容である。

#### (i) 【仕事】（丁寧） 製品

この小項目における高等部で扱う指導内容は、『製品を落とさないように運ぶ』と『壊れやすい物などをそっと置く』がある。最初は、製品をそっと丁寧に運ぶことから教え、製品をそっと丁寧に置こうとする気持ちをもってくれるようになってくれればと考える。

この小項目で高等部が大切にしたいことは、自分たちが作った製品を丁寧に大切に扱うことである。

この指導内容を実際に指導する場面を考えると、作業学習のなかで製品や収穫物を扱う指導場

面があり、そこで重点的に指導できる。つまり、作業場面で、自分の作った製品や収穫物を大切に扱うことを意識させることが重要となる。要するに、製品を大切に扱うことに関する指導内容は、製品や収穫物を扱う活動のなかで丁寧に扱うことを意識させることを繰り返すことで身につく指導内容である。

(イ) 厳選の視点15「対人関係・コミュニケーション」

この厳選の視点「対人関係・コミュニケーション」は、働くうえでの基礎的、基本的な礼儀やマナー、意思表示である。「地域社会で生活するうえで必要」な指導内容の厳選の視点「対人関係」に「礼儀や節度をわきまえたコミュニケーション」という同じような視点があるが、ここでは特に仕事という視点に絞って、内容表試案の大項目「仕事」の小項目を取り出して説明する。

内容表試案のなかでこの「対人関係・コミュニケーション」に関する項目を取り出すと以下のようになる。

[大項目]	(中項目)	小項目
仕事	対人関係	挨拶・返事、報告、対話
身近生活	コミュニケーション	意思伝達、呼名の応答、応答、挨拶、尋ねる、会話、電話

(a) 【仕事】(対人関係) 挨拶・返事

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『いろいろな人からの挨拶や呼名に応じて答える』から『自分から気持ちのよい挨拶や返事をする』や『相手に応じた適切な言葉遣いで挨拶をする』までである。最初は、特定の人に挨拶をするというところから指導をはじめ、誰にでも挨拶するように指導する。そして、丁寧な言葉遣いで挨拶や返事を意識させたりすることで、できるようになって欲しいと考える。

この小項目で大切にしたいことは、自分から現場実習先の職場の人に気持ちのよい挨拶や返事をする事と、相手に応じた丁寧な言葉を遣い挨拶や返事をして欲しいということである。

この指導内容を実際に指導する場面を考えると、挨拶は登校直後や下校時に重点的に指導できる。返事については、あらゆる指導場面で指導できると考えられる。また、現場実習においても、めあてに設定することで重点的に指導をすることができる。普段に、挨拶や返事や適切な言葉遣いなどの必要性を意識させることを繰り返すことで身につけさせていける指導内容である。

(b) 【仕事】(対人関係) 報告

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『仕事が終わったら報告する』から『忘れ物をしたときに報告する』や『わからないときは尋ねる』、『失敗したときは報告する』までである。最初は、一工程が終わったら必ず報告をさせてから次の工程に移らせることから始め、どうしてもいかわからない場面で尋ねさせたり、一つひとつの工程を確認させながら不良品が出た時点で失敗の報告をさせることで、できるようになると思う。

この小項目で大切にしたいことは、指示されたことが済んだら必ず報告して次の指示を聞くことと、自分の都合の悪いこと（失敗や忘れ物など）でも必ず報告をすることである。

この指導内容を実際に指導する場面を考えると、作業場面で重点的に指導できると考えられる。作業時に一工程終わるごとに報告させるなど報告の必要な場面の設定や作業開始時服装検査を設定することで忘れ物を報告させたり、製品の良否の判断をさせたりする場面をつくったりすることで繰り返し指導すれば、身につけさせることのできる指導内容である。

(c) 【仕事】(対人関係) 対話

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『相手から聞かれたことに答える』から『自

分の思っていることをきちんと話す』、『他人の嫌がることを言わない』までである。最初は、尋ねられたときに答えるところからはじめ、意思表示をしなければならぬ場面をつくって意思表示をさせたり、誰かが嫌な発言をした場面を取りあげ全体で考えるような場を設定することで、他人の嫌がらないような話し方ができるようになって欲しいと考える。

この小項目で大切にしたいことは、尋ねられたことにはきちんと答えるということと、自分の気持ちを素直にきちんと表現するということ、そして、他人の嫌がるようなことをふざけて安易に言わないことである。

この指導内容を実際に指導する場面を考えると、作業場面に限らず指導できる。作業時の指導場面としては、作業終了時に自分の製品を見て自己評価させ、どれが一番よいか自分で選択させ、なぜよいのか理由を尋ね答えさせたり、どうしても都合が悪いときに残業を計画し、都合が悪いと報告せざるを得ないような場を設定したりすることを繰り返し指導すれば伸ばしていける指導内容である。『他人の嫌がることを言わない』という指導内容に関しては、学校生活のあらゆる場で実際の場面を取りあげて指導できる。

#### (ウ) 厳選の視点16「手指機能」

この視点は、働くうえでの基礎的、基本的な手指の技能の向上に関する視点である。しかし直接、技能の向上をねらった指導内容は、大項目「仕事」には含まれていない。現在、紙箱作業や陶芸作業、農耕作業のなかに、具体的な技能の向上をめざした指導内容はあるが、内容表試案の大項目「仕事」にはない。大項目「学校生活」や「家庭・地域生活」の中に具体的な道具の使い方に関する指導内容がある。また、内容表試案の大項目「身体」の中に「手指の動き」という手指機能の向上に直接関係した指導内容もある。「仕事」に直接、手指機能の向上をねらった指導内容はないが、それは、技能的な向上を全くねらわないということではなく、各作業の具体的な場面では、それぞれの生徒個別に技能向上をめざす指導内容がある。ただ、内容表試案の仕事の中においては、中核的な指導内容としてはない。つまり、個別に今ある技能を少しでも伸ばせばできる作業を具体的に考え、作業学習のなかで指導しているために、個別に技能を伸ばす指導内容は存在するが、個別に扱うものであるがゆえに大項目「仕事」に中核的な指導内容としては取りあげなかったということである。

個別の技能向上のための手指の動きに関する具体的な指導内容は、大項目「身体」に中核的な指導内容として取りあげている。また、具体的な道具の使い方に関する指導内容は、大項目「学校生活」「家庭・地域生活」「身体」のなかに含まれている。そのために、手指機能に関する指導内容としては、大項目「仕事」のなかに含まれていない。

「仕事」の категорияにおける厳選の視点「手指機能」に関する指導内容に関して内容表試案にどのようなものがあるか「道具の使用に関するもの」と「手指の動きに関するもの」に分けて以下にあげる。

##### (a) 道具の使用に関するもの

この道具の使用に関するものの指導内容は、それぞれの指導場面において道具の使い方を指導するものである。既述の厳選の視点7「道具や器具の使い方」において「生活に必要な道具の使い方を身につける」ことを中心に詳しく論じている。生活に必要な道具をそれぞれの場面で使えるようになっていくことが、仕事に必要な道具の使い方を身につけることにつながっていくと考える。

以下に「道具の使用に関するもの」をあげる。

[大項目]	(中項目)	小項目
学校生活	掃除	はく, ふく
	学級園	くわ, スコップ, 一輪車
家庭・地域生活	被服	アイロン, ミシン
	調理	皮むき器, 包丁
	家庭工作	はさみ, 接着剤, ドライバー, 金づち, のこぎり, カッター
身体	手指の動き	道具の操作

**(b) 手指の動きに関するもの**

これらの手指の動きに関するものの指導内容は、日常生活のいろいろな場面での必要な動きである。高等部の生徒の多くは、これらの基本的な動きは大体できているため、高等部の指導内容としては特に取りあげていない。しかし、現場実習などで正確な紙折りなどの手指の動きの指導が必要な場合は、事前学習において個別に指導する場面や作業学習のなかで作業に必要な手指の動きを指導する場面がある。つまり、この手指の動きに関するものの指導内容は、それぞれの生徒の実態に応じて指導の必要な動きを個別に実際の作業場面などにおいて必要性を本人が感じるなかで指導するものである。

以下に「手指の動きに関するもの」をあげる。

[大項目]	(中項目)	小項目
身体	手指の動き	つかむ, にぎる, つまむ, むすぶ, ほどく, 物の操作

**(エ) 厳選の視点17「理解」**

「仕事」のカテゴリーにおける厳選の視点「理解」は、作業内容を覚えたり、指示を理解したりするために関係する指導内容である。言語指示理解の側面ばかりでなく、見てわかる、模倣できる、状況を見て自分がすることがわかるまで幅広く含めて考えている。「言語」における指導内容の厳選の視点に「他者からの発信を理解する力を高める」のなかの「聞き方、指示理解、聞き取り」という言語理解に重点をおいた指導内容があるが、ここでは特に仕事という視点に絞って、内容表試案の大項目「仕事」から取り出して説明する。

内容表試案のなかで、この「理解」に関する項目を取り出すと以下のようなになる。

[大項目]	(中項目)	小項目
仕事	取り組み	内容の理解, 手順の理解, 役割の理解
	确实	作業の能率
	操作	道具, 機械
言語	聞く	聞き方, 指示理解, 聞き取り

**(a) 【仕事】(取り組み) 内容の理解**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『指示されて道具や材料がわかる』から『説明を聞いて作業内容がわかる』や『全体の作業のなかでの自分の役割がわかる』、『自分がしている作業の意味がわかる』までである。最初は、絵や表などの手がかりをもとに必要な道具などがわかるところからはじめ、作業工程のなかで特に丁寧にきちんとしなければならないところを表などを手がかりにわかるようになってくれればと考える。そして、自分の成功品や失敗品を見ることで自分がする作業のなかでどこを丁寧にする必要があるかわかって欲しい。

この小項目で大切にしたいことは、ただ、作業のやり方を理解するだけでなく、なぜそのような作業をしているのかわかって作業に取り組むことである。

この指導内容を実際に指導する場面を考えると、作業学習のなかで、準備品の一覧表や工程表などを使うことで、重点的に指導できる。また、完成品と自分の失敗品を見比べさせることで自分の作業のポイントを意識させたり、何のためにその工程を丁寧にする必要があるのか理解させることができると考えられる。つまり、自分の行った作業に対する結果を明確に示してやることで、自分の行っている作業の意味をみいだすことができるであろう。このような自分の行った作業の因果関係の提示を何度も繰り返すことで身につけさせることのできる指導内容である。

#### (b) 【仕事】（取り組み）手順の理解

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『一つひとつの活動ごとに活動内容を取組表で確認しながら活動する』から『一まとまりの活動ごとに、活動内容を取り組み表で確認しながら、それに従って活動する』や『取り組み表の順番を意識しながら活動に取り組む』までである。最初は、手順表などの手がかりをもとに手順の流れ全体がわかるころからはじめ、一つひとつの工程が済んで次の工程に移るときに手順表の次の工程の欄を大きな声に出して読んだりすることで、次の工程を確認し、工程を意識するようになってくれればと考える。そして、手順をまちがった失敗品を見ることで、手順どおり作業をすることの必要性をわかって欲しいと思う。

この小項目で大切にしたいことは、ただ、作業の手順を理解するだけでなく、手順を意識して、いつも同じ手順で作業に取り組もうという気持ちをもつことである。

この指導内容を実際に指導する場面を考えると、作業学習のなかで、取組表や手順表などを使い、手順を意識させることで、重点的に指導できる。また、手順をまちがった失敗品を見せることで、手順を守ることの重要性を意識させたり、何のために手順を守る必要があるのか、理解させることができると考えられる。つまり、同一手順で同じ作業を何度も繰り返すことと手順を正確に行った結果を示すことが大切である。

#### (c) 【仕事】（取り組み）役割の理解

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『周りの様子から自分のすべきことに気づき取り組む』から『任せられた役割に主体的に取り組む』や『自分の分担されたことをいつも忘れずに最後まできちんと行う』までである。最初は、決められた分担をるところからはじめる。次に全体の作業の流れを見て自分が何をしたらよいか気づくようになってくれればと考える。そして、自分の役割のところうまくできていない失敗品を見ることで、役割を責任もつてすることの必要性をわかって欲しい。

この小項目で大切にしたいことは、ただ、割り当てられたからするというだけでなく、全体の作業のなかで自分の作業の役割がわかって、やりがいをもって作業に取り組むことである。

高等部で、この指導内容を実際に指導する場面を考えると、学級での文化祭への取り組みや合宿での班活動や作業学習など、友達と協力して活動する場面が考えられる。特に作業学習のなかでは、自分の持ち場の掃除などでも、自分の持ち場を済ませた後、まだ済んでいない生徒の掃除を手伝わせることで、自分からどこを手伝えればよいか状況を見て考えるようになっていくのではないかと考える。また、流れ作業においては、一箇所が遅くなれば、そこに製品がたまるので、そこを手伝うことを経験させることで、周りを見ながら作業をすることができるようになると考えられる。つまり、流れ作業などの共同作業において、一定の箇所の作業に責任もって取り組ませることを繰り返し経験させながら、ネックになっている工程の手伝いを経験させることで指導できる。

**(d) 【仕事】（確実）作業の能率**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『教師に指示されてペースをあげようとする』から『自分で意識してできるだけ早く行おうとする』や『段取りを考えながら作業ができる』までである。最初は、教師から急ぐように言われて急ぐところからからはじめ、流れ作業のなかでの自分の必要なスピードに気づくようになってくれればと考える。そして、ただ急ぐのではなく、場を整えたり置き方を工夫したりすることでスムーズに作業ができるようになることをわかって欲しいと思う。

この小項目で大切にしたいことは、ただ、マイペースで仕事をするのではなく、全体の作業のなかで自分の作業のスピードをわかって取り組むことである。また、無駄にたくさん動かなくてもすむように、まわりを整頓したり、物の置き場を守ったり、どこに置けば次の作業がしやすいかなどを考えることが大切なことを意識するようになって欲しい。

この指導内容を実際に指導する場面を考えると、作業学習のなかで重点的に指導できると考える。機械のペースに合わせて取り組まなければならない作業であれば、そのペースに合わせてざるを得ないような状況設定ができる。また、雑然とした場と整然とした場で作業をさせ、比べさせたり、物をどちらに置いたら作業がしやすいか考えさせることで、作業のしやすい方法を考えるようになると考える。

**(e) 【仕事】（操作）道具**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『教師と一緒に道具を扱う』から『手元をしっかりと見て道具を扱う』や『正しい使い方で道具を扱う』までである。最初は、教師と一緒に扱うところからはじめ、教師の示範を見て模倣しながら正しい扱い方を意識するようになってくれればと考える。そして、正しい扱い方をすることの必要性をわかって欲しい。

この小項目で大切にしたいことは、道具の扱いには決められた正しい扱い方があることを知って、正しい扱い方を意識しながら、道具を扱おうという気持ちをもつことである。

この指導内容を実際に指導する場面を考えると、実際の道具を使う場でその都度指導していく必要がある。もちろん、作業学習のなかに指導場面があるが、他の道具を使う学習場面でも正しい使い方を何度も繰り返し行わせることが必要である。

**(f) 【仕事】（操作）機械**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『一つひとつの操作の指示を受けながら操作する』から『一つひとつの手順を確認しながら機械を操作する』や『自分で機械を正しく操作する』までである。最初は、教師と一緒に機械を扱うところからはじめ、次に、教師の示範を見て模倣しながら正しい扱い方を意識するようになってくれればと考える。そして、手順表などの手がかりを見ながら正しい扱い方をすることで安全に扱えると自信をもって欲しい。

この小項目で大切にしたいことは、機械の扱いには決められた正しい扱い方があることを知って、正しい扱い方をすれば安全に扱えると意識しながら、機械を扱うことである。

この指導内容を実際に指導する場面を考えると作業学習のなかでの実際に機械を使う場でその都度指導していく必要がある。正しい使い方を何度も繰り返し行わせることが必要である。

**(オ) 厳選の視点18「持続力」**

「仕事」のカテゴリーにおける厳選の視点「持続力」は、作業を決められた時間続けて行える体力と気持ちを育てるための指導内容である。これは態度的なもの「作業ができる体力」が必要であると考えたためである。就業時間中きちんと活動できる体力があることは最低限の条件である。体力に関係ある指導内容は仕事のところではなく、大項目「身体」中項目「トレーニング」



のなかにある。また、体力的な側面ばかりでなく、自分で最後まで取り組もうとする気持ちの面も必要である。これはカテゴリー「態度」における指導内容の厳選の視点22の「陰ひなたなく取り組む姿勢」のなかや厳選の視点23「自制心（我慢することや粘り強さ）」のなかの指導内容と重なる部分である。ここでは特に持続力という視点に絞って、内容表試案から取り出して説明する。

内容表試案のなかでこの「持続力」に関する項目を取り出すと以下のようになる。

[大項目]	(中項目)	小項目
仕事	取り組み	持続, 静的体力
身体	トレーニング	サーキットトレーニング, 筋力トレーニング

**(a) 【仕事】(取り組み) 持続**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『教師や友達と一緒に繰り返し続ける』から『好きな作業なら自分から最後までしようとする』や『どんな仕事でも常に最後まで粘り強く続けられる』までである。最初は、教師と一緒に、何回も繰り返す作業を行うところからはじめ、まわりの様子を見て意識して作業を続けるようになってくれればと考える。そして、途中休まずに自分から続けるという気持ちをもって欲しいと思う。

この小項目で大切にしたいことは、自分から作業を続けて行おうという気持ちをもって一定時間作業ができるようになることである。

この指導内容を実際に指導する場面を考えると、作業学習の中や現場実習などで、実際にある程度長時間作業を続けて行う場で、その都度指導していく必要がある。

**(b) 【仕事】(取り組み) 静的体力**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『場を離れないで作業をする』から『立ち作業を続ける』や『就業時間中作業を続ける』までである。最初は、教師と一緒に同じ場所で何回も繰り返す作業を行うところからはじめ、立って作業を続けなければならないように設定した場で作業を続けさせ、最終的には、ずっと立って作業を行うことを繰り返すことで、きつい立ち作業でも平気で継続できるようになって欲しい。

この小項目で大切にしたいことは、立ち作業を苦にしないようになることである。

この指導内容を実際に指導する場面を考えると、作業学習のなかで、実際に長時間立ち作業を行う場を設定して、行っていく必要がある。

**(c) 【身体】(トレーニング) サーキットトレーニング, 筋力トレーニング**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、「サーキットトレーニング」には『軽い負荷のいろいろな動きを自分のペースで続ける（サーキット）』から『ライバルとなる友達を意識して軽い負荷のいろいろな動きを続ける（サーキット）』や『自分の目標を意識して軽い負荷のいろいろな動きを続ける（サーキット）』までである。また、「筋力トレーニング」には『重い負荷で身体各部位のトレーニングをする』から『重い負荷で身体各部位のトレーニングを限界まで続ける』や『目的意識をもち重い負荷で身体各部位のトレーニングに取り組む』までである。最初は、自分のペースで何回も繰り返す運動を行うところからはじめ、ライバルの友達を意識して続けなければならないような場を設定し、最終的には、自分の目標を意識させながら運動を繰り返させることで、自分の体力や筋力の向上を目標にして、自分から運動を継続してできるようになって欲しい。また、筋力が向上していることがわかり喜びを見出せるようになって欲しい。

この小項目で大切にしたいことは、体力と筋力の向上と自分から筋力や体力を向上させたいという気持ちの育ちである。

この指導内容を実際に指導する場面を考えると、時間を設定して、継続して毎日のように取り組ませる場を設定する必要がある。

**(カ) 厳選の視点19「作業に対する喜び」**

「仕事」のカテゴリーにおける厳選の視点「作業に対する喜び」は、p.179中段で前述したように、「自分のしていることにしっかり視点を向け、興味をもって自分であれこれしていくなかで、感じるのが作業に対する喜びである。」この喜びを感じるためには、自ら良否の判断を行い、いいものができたときの喜びや、自分に対する有能感、成就感を感じる必要がある。つまり、「自己評価による成就感」であるといえる。卒業生では、仕事をする動機が、他人に褒められるなど他人からの承認にやりがいを見つけている場合も多いが、作業そのものに喜びを見出すことは大切なことであると考えられる。作業そのものにやりがいを感じることは、仕事をする動機づけになる。自分からやりがいをもって取り組もうとする気持ちを育てる指導内容は、カテゴリー「態度」における指導内容の厳選の視点22「陰ひなたなく取り組む姿勢」の指導内容『向上心』と重複する部分もある。ここでは特に仕事という視点に絞って、内容表試案の大項目「仕事」から取り出して説明する。

内容表試案で、この「作業に対する喜び」に関する項目を取り出すと以下のようなになる。

[大項目]	(中項目)	小項目
仕事	确实	良否の判断
	やりがい	収穫・完成, 納品・販売
	取り組み	向上心
自己認知	自己理解	めあての反省

**(a) 【仕事】(确实) 良否の判断**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は『良否を判断するポイントの一つひとつ指示されると判断できる』から『良否を判断する複数のポイントがわかる』や『自分で見て(自分の作った)製品の良否がわかる』までである。最初は、教師から評価のポイントを一箇所に絞って提示し、その点についての良否の判断を教師と一緒に評価を行うところからはじめ、次に提示されたポイントについて自己評価をする場を設け、最終的には、各工程の節目や完成した時点で、自分で自分のした作業のでき具合を振り返り、納得のいくものを作りたいという気持ちをもつようになって欲しい。

この小項目で大切にしたいことは、自分自身で自分のしたことに対する自己評価を習慣的にするようになって欲しいことと、自己評価をすることで、自分のした仕事に対する満足感や成就感、もっとこうしたら良かったという気持ちや、自分自身に対する有能感を実感できるようになって欲しい。

この指導内容を実際に指導する場面を考えると、作業学習の各作業の終了段階で自己評価をする場を設定していく必要がある。評価の視点をわかるように示し、それに対する評価を習慣化して行わせる必要がある。

**(b) 【仕事】(やりがい) 収穫・完成, 納品・販売**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、「収穫・完成」には、『作ったものを他者から褒められて喜びを感じる』から『たくさんできたことに喜びを感じる』や『自分の納得のいくものができあがったことに喜びを感じる』までである。また、「納品・販売」には、『作ったものを売るとお金がもらえることがわかる』から『自分が作ったものを買ってもらって喜びを感じる』や

【納期までに作りあげ達成感を感じる】までである。最初は、農作物などの収穫物を家庭をもって帰り、家族から褒められたり感謝される体験をさせるところからはじめ、収穫物や生産物を販売する場を設け、最終的には、契約により納期までに残業をして作り、納品することでお金をもらう経験をさせ、達成感を感じて欲しい。

この小項目で大切にしたいことは、自分のした仕事に対する喜びを感じるようになって欲しいことと、仕事の対価がお金で返ってくることを実感できるようになって欲しいことである。

この指導内容を実際に指導する場面を考えると、各作業学習の作業の終了段階で作業結果について他生徒にも認められるような評価を教師が本人に返す場を設定する必要がある。また、こまめに、収穫物や製品の販売を経験させるような場を作ったり、受注生産を経験するような場の設定が必要である。

### (c) 【仕事】(取り組み) 向上心

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『示範をよく見る』から『教師の助言を受け、自分のめあてに気づき活動に取り組む』や『めあての達成をねらって取り組む』、『自分のめあてを常に意識し、振り返りながら活動に取り組む』までである。最初は、示範をよく見ながら、同じように活動するところからはじめ、次に、めあてを意識させて活動をしていく段階がある。最終的には、自分の作業を振り返り、反省して、もっと何ができるようになればよいか判断し、自分から反省したことを意識しながら活動に取り組んでくれるようになってくればと考える。

この小項目で大切にしたいことは、自分のめあてに気づき、めあてを意識しながら活動するところから、自分をめあてに沿って自分の活動を評価できること、自分の作ったものを自分で評価し「もっとこの部分をよくしよう」というめあてをもって活動する気持ちをもつことである。

この指導内容を実際に指導する場面を考えると、作業学習の中の実際に製品を製作する場面での指導が重点を占める。つまり、作業場面での自己評価やめあてを意識させることなどが重要となる。要するに、この向上心に関する指導内容は、作業の場で自分の作ったもののでき具合を意識させたり、作業態度におけるめあてを意識させることが大切になる。

(上田文啓)

### ③ 「余暇」における指導内容のとらえについて

ここでは、「余暇」のカテゴリーに属する指導内容の厳選の視点について述べるとともにそれらの視点によって厳選された高等部の指導内容が内容表試案にどのように位置づけられているのかを述べる。

厳選の視点は、次のとおりである。

(ア) 厳選の視点20「仲間とともに楽しむこと」

(イ) 厳選の視点21「自分で楽しむこと」

この厳選の視点に関した指導内容のなかから、高等部として卒業後の余暇利用について重要と思われる指導内容についていくつか説明する。

#### (ア) 厳選の視点20「仲間とともに楽しむこと」

仲間とともに楽しむことの必要性は、2つの要素がある。まず、社会的な場面で自分の趣味を生かすということである。例えば、地域や職場の行事などに参加することで、活動範囲が広がると考えられる。また、趣味の合う仲間と一緒にサークルをつくったり青年教室に参加したりすることで、人間関係を広げることができる。さらに、最近ではグループホーム、通勤寮で生活する

人も増えている。仲間と一緒に自立した生活を送るうえで、仲間と一緒に楽しみを共有し合うものがあれば、日々の生活に満足感や充実感をもって過ごすことができるであろう。

この厳選の視点に関する指導内容の内容表試案における位置づけは、次のようになっている。

[大項目]	(中項目)	小項目
家庭・地域生活	余暇	ボウリング, 映画館, 地域行事
	施設利用	プール
身体	歩く	長距離歩行
	走る	長距離走
	ボール運動	両手投げ, 片手投げ, 両手で捕る(大きいボール), 片手で捕る(小さいボール), ドリブル(バスケット), 蹴る, 蹴り返す, ドリブル(サッカー), 打つ, ボールゲームの理解
	水泳	つかる, もぐる, 息継ぎ, 浮く, クロール, 平泳ぎ

(a) **【家庭・地域生活】(施設利用) ボウリング**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『大人と一緒に利用する』『ボウリングの仕方がわかる』『友達と一緒に利用する』がある。現在、ボウリング場は少なくなっているのだが、ボウリングは一人、または家族や仲間などとも楽しむことのできるスポーツである。また、ボウルでピンを倒すというルール自体も簡単であり、最近ではガーターのない「ウォールレーン」もあるので失敗を気にせず、障害の重い生徒でも楽しめるスポーツになっている。

この小項目で高等部として大切にしたいことは、ボウリング場の利用の仕方を身につけて欲しいということや仲間と競い合ったり、お互いのプレーを賞賛し合ったりするボウリングの楽しみを実感して欲しいということである。最初は大人と一緒に利用することで、申し込み用紙の記入の仕方、シューズ券の購入、靴のサイズの伝え方、ボウル選びなどのボウリング場の利用の仕方に慣れること、そのなかで自分たちで利用できるという自信がついてくるであろう。そして、最終的には仲間とともに楽しむことができる有効な余暇利用につなげていきたいと考えている。

高等部で、この指導内容を実際に指導する場面としては、学級単位で余暇利用を学習するための校外学習が想定できる。教師や仲間と一緒に利用することで、ボウリング場の使用の仕方を知らせ、仲間同士で利用できるように自信をもたせることが重要である。また、ボウルの持ち方や投げ方などのボウリングの基礎的な技能の習得を図るための指導を心がけることが必要である。そして、スコアを仲間と競い合わせたり、ストライクやスペアを記録したときにはお互いを賞賛し合ったりして楽しい雰囲気の中でボウリングを行うことを大切にして、余暇の利用につなげていくことが必要であろう。マナーに関しては厳選の視点13「対人関係」で述べているため、ここでは説明を省略する。

(b) **【家庭・地域生活】(余暇) 映画館**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『大人と一緒に利用する』『見たい映画を選択して映画館を利用する』がある。映画館は利用の仕方も簡単であり、テレビとは違い、音声だけでなく大画面から映し出される映像には迫力や臨場感があり、障害の重い生徒でも映像を楽しむことができる。

この小項目で高等部が大切にしたいことは、映画に興味をもち、自分の好きな映画を見に行きたいという気持ちをもって欲しいということである。最初は、大人と一緒に映画を見に行くということから映画館の利用に慣れ、自分の好きな映画を見に行く。さらに、友達と誘い合わせて映画を見に行くようになって欲しい。そうなれば、趣味として自分の好きな映画を見に行くという充

実した余暇の利用につながると考える。

高等部で、この内容を実際に指導する場面としては、学部全体で余暇利用を学習するための校外学習が想定できる。この校外学習を契機に映画に興味をもち、休日に学級の友達と誘い合わせて映画鑑賞をする生徒もいる。卒業生のなかにも、好きな映画を見に行くことが趣味となっている人もいる。卒業後も趣味として定着できるように、自分が楽しむことのできる映画を選択できるように促していく必要がある。また、鑑賞後も仲間と楽しく感想が話せるような場面を設定していくことが映画の楽しみにもつながっていくであろう。校外学習はもちろんだが、日頃から学級で映画の話題を取りあげるなどして、有効な余暇利用につなげていくことを心がけていく必要がある。マナーに関しては、厳選の視点13「対人関係」で述べているためここでは説明を省略する。

(c) **〔身体〕(水泳) クロール, 平泳ぎ / 〔家庭・地域生活〕(施設利用) プール**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、「クロール」に関しては『バタ足・犬かきをする』『長い距離を一定のペースで泳ぐ』がある。「平泳ぎ」に関しては『面かぶり平泳ぎをする』『正しいフォームで平泳ぎをする』がある。「プール」に関しては『更衣のマナーがわかる』『プールを利用する際の一連の流れがわかる』がある。水泳は幼児期から習い事として続けている生徒も多く、全身運動なので、体力の向上、健康増進の面からも大変有効である。また、泳ぐことができなくても、プールを歩くだけでも運動的に効果があり、技能にとらわれずにできるものでもある。

これらの小項目で高等部として大切にしたいことは、小・中学部で指導してきた、『水の中で目をあける』『浮き輪やヘルパーなどを使って動く』というような、水に慣れるという段階から発展し、様々な泳法で泳ぐことができたり、長い距離を泳ごうとしたりするなど一人で水泳を楽しむことができるための技能を身につけるということである。また、市民プールなど公共のプールの利用の仕方を身につけて欲しいということである。技能面については経験を積むことで伸ばしていける内容であろう。プールの利用の仕方については、最初は、大人と一緒に利用することで、療育手帳を使っての入場の仕方やコインロッカーの使用の仕方などに慣れる。そのなかで、自分たちで利用できるという自信がついてくるであろう。そして、最終的には仲間とともに楽しむことができる有効な余暇利用につなげていきたいと考えている。

高等部で、この内容を実際に指導する場面としては、学部全体で余暇利用を学習するための校外学習や特設された時間のなかでの水泳指導が想定できる。技能面の向上をねらうには、同程度の能力の生徒と競い合わせたり、自己記録を意識させたりすることが必要であろう。プールの利用の仕方については、始めは、教師や仲間と一緒に利用し、最終的には、仲間同士で利用できるように自信をもたせることが重要であろう。マナーに関しては、厳選の視点13「対人関係」で述べているため、ここでは説明を省略する。

(d) **〔身体〕(ボール運動) 両手投げ, 両手で捕る, ドリブル (バスケット)**

**片手投げ, 片手で捕る, 打つ**

**蹴る, 蹴り返す, ドリブル (サッカー)**

**ボールゲームの理解**

内容表試案においては、「両手投げ」「両手で捕る」「ドリブル (バスケット)」に関しては、バスケットボールのシュート、パス、ドリブルについての技能面のことを取りあげている。「片手投げ」「片手で捕る」「打つ」に関しては、ソフトボールのバッティング、ピッチング、キャッチング、バドミントンや卓球におけるラケットでシャトルや球を打つなどの技能面のことを取りあげている。「蹴る」「蹴り返す」「ドリブル (サッカー)」に関してはサッカーのシュート、パス、

ドリブルなどの技能面のことを取りあげている。「ボールゲームの理解」はこれらのスポーツのルール面について取りあげている。

卒業生のなかには、青年教室やサークルで、ソフトボール、バドミントン、バスケットボールなどを楽しむ人もいる。卒業後も、サークルや職場の仲間と余暇活動を利用して体育館や運動場でスポーツが楽しめるようになって欲しい。そのような場面で仲間とスポーツをするには、全員が楽しめるようにバスケットボール、ソフトボール、バドミントン、卓球、サッカーなどの主なスポーツの基礎的な技能は身につけさせたい。また、いくら技能が高くても自分勝手にしては周りの人は楽しむことができない。仲間と協力し、ルールを守ってゲームに参加できるようになって欲しい。

高等部で、この内容を実際に指導する場面としては、特設された時間や昼休みの中での指導が想定できる。ゴールにシュートを決めたり、ボールを打ったりすることができたときなどの喜びを十分に味わわせ、楽しい雰囲気の中で経験を積み、技能を伸ばしていく必要がある。また、ゲームに参加するだけでなく、お互いを励まし、応援するなどのチームプレーにおいても協力場面は多くある。これは、仲間と楽しみながらよい関係づくりをするうえでとても重要なことであり、大切にしていきたい部分である。

#### (ア) 厳選の視点21「自分で楽しめること」

生活するうえでは、仲間とともに楽しく過ごす時間も貴重であるが、一人で余暇を楽しく過ごせることも大切である。音楽鑑賞や買い物などの趣味をもっているならば、楽しみをもちながら日々の生活を送ることができるであろう。自分に合った趣味をもつことは大切なことなのである。また、その趣味が仲間とのつながりにも発展することも考えられるため、よい友達関係をもたせる意味でも必要なことであると考ええる。

この厳選の視点に関する指導内容の内容表試案における位置づけは、次のようになっている。

[大項目]	(中項目)	小項目
学校生活	自然	草花の興味・関心
家庭・地域生活	余暇	外食，図書館，写真，移動
	調理	料理
	買い物	買い方
情操	歌唱	歌う
	音楽の鑑賞	聞く鑑賞
	作品の鑑賞	作品への興味・関心
	造形表現	描く，描写，彩色
自己認知	自己選択・自己決定	活動計画，外出計画，余暇の過ごし方

#### (a) 【学校生活】(自然) 草花への興味・関心

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『身近な草花に興味をもつ』『大人と一緒に草花の種や球根などを植えて育てる』『花や草などを飾る』『季節の草花に関心をもち育てる』がある。

この小項目で高等部として大切にしたいことは、草花にどれくらい関心をもつかは個人差が当然あるだろうが、季節を感じ、植物の美しさや生命力を感じて欲しいということである。そして、家庭でのガーデニングの趣味につなげていくことができれば、草花の成長を見守り、育み、慈しむ活動で情緒の安定を図れる有効な余暇利用につながるのではないかと考える。

高等部の中で、この内容を実際に指導する場面としては、各学級での学級園の春・秋まきの花を育てるという指導が想定できる。日常から学級園の管理などの時間を設定して指導していく必要がある。

**(b) [家庭・地域生活] (余暇) 外食 / [自己認知] (自己選択・自己決定) 余暇の過ごし方**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『家族と一緒にレストランやファーストフード店を利用する』『メニューの中から自分の食べたいものを選ぶ』『食べたいものを注文する』『一人でファーストフード店やレストランを利用する』がある。

この小項目で高等部が大切にしたいことは、休日などの楽しみとの一つとして、一人でファーストフード店やレストランを利用できるようになって欲しいということである。自分の好きな物を食べるというのはこのうえない楽しみである。いろいろな場所で食事ができれば、それだけ楽しみも広がる。ただ、それらを利用するためには、食券の買い方、メニューの選び方、店員への注文の仕方、食事のマナー、レジでの料金の払い方などが一人でできるようになって欲しい。

高等部で、この内容を実際に指導する場面としては、校外学習などでそれらを利用する場面が想定できる。そのなかで、店員への注文の仕方、メニューの見方、選び方、お金の出し方などを、実際の場で指導することが必要である。また、店員との対応の仕方、注文の仕方などは、対人関係、コミュニケーションにかかわる内容であり、食事のマナーに関しては、学校の給食時間に指導していかなければならない内容でもあるので、日常の指導が重要である。

**(c) [家庭・地域生活] (余暇) 図書館**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『大人と一緒に利用する』『読みたい本を探すことができる』『所定の手続きで本を借りることができる』『期日までに返却する』がある。図書館には、スポーツの本、料理の本、物語、タウン誌、歌やゲームの本、図鑑など様々なジャンルの本があり、自分の好きなジャンルの本を読むことができる楽しさがある。

この小項目で高等部が大切にしたいことは、休日などの楽しみの一つとして、一人で図書館を利用できるようになって欲しいということである。最初は、大人が本人に合う本を積極的に紹介し、借りて読ませる。そして、本人に本を読むことが楽しいとか面白いという気持ちが出てきたら、自分で自由に本を借りるように促していきたいと考える。

高等部で、この内容を実際に指導する場面としては、校外学習などでそれらを利用する場面が想定できる。そのなかで、自分の読みたい本を探す、所定の手続きで本を借りることができるなど図書館の利用の仕方を、実際の場で指導することが必要である。また、静かに本を見る、一人で集中して本を読むなどの習慣がついていけば、生活態度や作業態度にもよい変化がみられると考えるので、学校でできるだけ経験させ、家庭へ働きかけていく必要がある。

**(d) [家庭・地域生活] (余暇) 移動 / [自己認知] (自己選択・自己決定) 外出計画**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、「移動」に関しては『メモを見ながら人に尋ねて目的地まで行く』『地図を見ながら目的地まで行く』『街の集合地点に所定の時刻まで集まる』がある。「外出計画」に関しては『行きたい場所、したいことを決める』『使用料金や運賃を調べる』『旅行で楽しむことやおみやげの計画を立てる』がある。

この小項目で高等部が大切にしたいことは、休日の過ごし方の一つとして、日帰り旅行や様々な場所への外出が一人で計画してできるようになって欲しいということである。日常の登下校や校外学習などで電車やバスを利用する経験を積んできているので、特定の場所であれば自分で行けるようになっている。生徒たちは成長するに従い、行動範囲も当然広がってきているので、自分で計画を立て、交通機関を使用したり、人に尋ねたりして目的地に行き、有効な余暇利用ができるようになって欲しい。

高等部で、この内容を実際に指導する場面としては、余暇利用を学習するための校外学習や修学旅行の計画などが想定できる。実際に目的地での楽しみ方や簡単な地図の見方などを移動時に随時指導する必要がある。また、校外学習だけでなく、日頃から時間を意識させて活動させることが重要である。

**(e) 【家庭・地域生活】(調理) 料理**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『説明図を見て自分で簡単な調理をする』『電子レンジなどの器具を使って簡単な調理をする』『いろいろな調理法で調理する』『簡単にできる朝食・昼食を作る』がある。

この小項目で高等部が大切にしたいことは、毎日の生活における楽しみとして調理を行うようになって欲しいということである。最初は、インスタント食品や加工食品を使っての簡単な料理、おにぎり、お弁当のおかず作りなどをとおして、基本的な調理の技能を伸ばし、手順よく調理できる方法を身につけさせたい。個人の技能や意欲に合わせて活動内容を工夫し、いくつかの作り方のなかから生徒に合ったやり方を知らせ、家庭生活に活用していこうとする態度を育てていきたい。

高等部のなかで、この内容を実際に指導する場面としては、特設された時間での指導が想定できる。学校での繰り返しの学習でより確実な力とし、一人でできたという気持ちをもたせる。そして、家庭でも調理をしてみようという気持ちにつなげていくことが大切である。

**(f) 【家庭・地域生活】(買い物) 買い方 / 【自己認知】(自己選択・自己決定) 余暇の過ごし方**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、『一つのフロアの中から買うものを探す』『規格にあった物を選ぶ』『メモを見ながら買う』『予算を考えながら買う』がある。

この小項目で高等部が大切にしたいことは、休日などの楽しみの一つとして、自分で買い物ができるようになって欲しいということである。生徒の成長に従って、自分の欲しい物は当然たくさん出てくる。しかし、予算を考えずに衝動的に買い物をするのではなく、小遣いや貯金など自分の予算に応じて買い物ができるようになって欲しい。

高等部で、この内容を実際に指導する場面としては、校外学習などが想定できる。好きな物を買うという喜びはどの生徒も十分に実感できる。しかし、たくさんの物を買うときや、規格や素材がきちんと決まっている物、あるいは他人から頼まれた物を正確に買うために、メモを見て予算を考えながら買い物をするという意識を持たせることが大切である。また、買い物の様子を家庭に知らせ、「簡単な品物なら自分で買わせてみよう」「買い物には一緒に行って自分で選ばせよう」という気持ちをもってもらえるようにすることが必要である。

**(g) 【情操】(歌唱) 歌う / (音楽の鑑賞) 聞く鑑賞**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、「歌う」に関しては『伴奏やCD、教師の歌などに合わせて歌う』『相手や周りの速さに合わせて歌うことができる』がある。「聴く鑑賞」に関しては『静か、元気、楽しくなど歌の気分をとらえて聴く』『自分の好きなCDをレンタルショップで借りたり、友達に借りたりして聴く』がある。

この小項目で高等部が大切にしたいことは、休日や休み時間などにおいて一人で過ごす余暇利用の一つとして、歌ったり、音楽を聴いたりする楽しみを感じて欲しいということである。また、休日などに仲間とカラオケに行くという有効な余暇利用につなげていきたい。昼休みの過ごし方をみると、好きな歌手のCDを聴いたり、歌ったりしている生徒は多い。そのような場面でも自分でCDラジカセを操作し、周囲の人のことを考えて、適切な音量で音楽を聴くことができるようになって欲しい。また、自分の好きなCDをレンタルショップで借りたり、友達に借りたりして聴くことができるようになれば趣味として定着していくであろう。



高等部で、この内容を実際に指導する場面としては、日常の休み時間や特設された時間が想定できる。仲間や教師と一緒に、楽しい雰囲気の中で歌ったり、聴いたりする活動を取りあげていくことは大切なのだが、適切な音量での聴き方などを指導していくことが必要であろう。また、特設された時間のなかでレンタルショップでのCDの選び方、借り方、CDラジカセの使い方など指導していくことが必要である。

(山中祐造)

#### ④ 「態度」における指導内容のとらえについて

ここでは、「態度」のカテゴリーに属する指導内容の厳選の視点について述べるとともに、それらの視点によって厳選された高等部の指導内容が、内容表試案にどのように位置づけられているのかを述べる。

厳選の視点は、次のとおりである。

- (ア) 厳選の視点22「陰ひなたなく取り組む姿勢」
- (イ) 厳選の視点23「自制心（我慢することや粘り強さ）」
- (ウ) 厳選の視点24「将来への前向きの姿勢（自己理解，自己選択・自己決定）」

#### (ア) 厳選の視点22「陰ひなたなく取り組む姿勢」

陰ひなたなく取り組む姿勢とは、いつ、どこでも、誰が見ていなくても、活動そのものを楽しみを感じて取り組む姿勢である。この姿勢を育てるために必要と考えるいくつかの指導内容について説明する。

[大項目]	(中項目)	小項目
身近生活	コミュニケーション	挨拶
学校生活	係活動	役割の理解・実行
	集団活動	役割の理解・実行
自己認知	自己理解	めあての決定，めあてと行動
仕事	取り組み	役割の理解，向上心，持続，内容の理解
	対人関係	挨拶・返事，報告
	確実	作業の確実，作業の能率，手順

#### (a) 【身近生活】（コミュニケーション）挨拶

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、4段階の『挨拶をされたらする』から10段階の『場に応じた言葉を考えながら挨拶をする』までである。

就労の場においても地域社会においても、挨拶は対人関係の基礎・基本になるものである。本校の研究紀要第13集で、生徒の内面に目を向けた研究をしたとき、高等部の生徒に育てたい主体性の一つとして、「周りの人との関係に気を配ろうとする姿勢」が大切であると考えた。このことから、「いつでも、どこでも、誰にでも気持ちのよい挨拶ができる」ことは、必要なことである。しかしながら、挨拶をしなければならないことはわかっているのだが、挨拶をされたのに相手によって無視をする生徒がいる。挨拶をすることの大切さがわかって、自分から誰にでも挨拶ができるようになって欲しいと願っている。

実際の指導場面においては、どのような挨拶が気持ちのよい挨拶であるのか、教師がよきモデルとなり、学校全体で取り組んでいる。言葉できちんと言えない生徒には、相手を見て声を出したり、頭をさげたりして挨拶をしている気持ちを伝えるような指導をしている。すべての生徒が

挨拶の意義や必要性を理解してできるわけではないので、きちんとした挨拶の形を教えることで、対人関係がスムーズにいくための技能の習得を図ることができると思う。

**(b) [学校生活] (係活動) 役割の理解・実行**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、6段階の『短時間であれば、自分で役割を自覚して果たそうとする』から、10段階の『決められたことを常に意識しながら、自分の役割を果たす』までである。

この小項目で、「陰ひなたのない取り組みの姿勢」という視点から大切なのは、「いつでも、どこでも、誰が見ていなくても自分がしなければいけないことはきちんとする」ということである。高等部段階になると、褒められたい気持ちや認められたい気持ち強い生徒もいるが、自分に任せられたことをするのは当たり前であるという気持ちが育ってきている生徒も多い。この気持ちの育ちが、将来の「働く」ということに大切であると考えている。

実際の指導においては、褒められなくて頑張るという気持ち強い生徒や、教師の目があるところとないところで取り組みの姿勢が変わるような生徒には、教師の目がなくても自分できちんとできるように放課後に係活動に取り組みさせる場面や、友達と一緒に取り組むなかで友達のよさに気づいて自分もそのようにしようと思ったりする場面を、意図的に設定している。また、高等部になると、お手伝いではなく家事を任せてもらうという取り組みを、家庭でもしてもらっている。そのような積み重ねのなかで、他者の評価を気にし過ぎることなく、活動そのものに充実感や達成感を感じて、自分の役割を果たせるようになっていくと考える。

**(c) [自己認知] (自己理解) めあての決定**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、4段階の『大人の支援を受けながら、自分のめあてに気づく』から、10段階の『自分の行動を振り返り、自分のめあてを考える』までである。

この小項目の指導内容を段階をおって指導することで、教師から言われたことをめあてとするのではなく、友達の発表や板書を参考にして自分で気づいて考えたり、それまでの自分の行動を振り返って考えたりしてめあてを決めることができるようになっていくと考える。

本校の研究紀要第12集「自立を支える指導法の研究」において、我々は、生徒自らが課題を解決しようとする意識の流れを大切に授業を積み重ねることが大切であると考えた。そのなかで、「考える」プロセスにおいて、問題点を明確にし整理する働きかけについて、いくつかの指導の手がかりを得た。「めあてを自分で決める」ことも、そのうちの一つになるのではないかと考える。

「陰ひなたなく取り組む姿勢」という視点からこの小項目を考えると、自分でめあてを考えようとする生徒は、取り組みの過程において他者の目を気にしないで、自分で決めためあてを意識して頑張ろうとする。自分自身で決めためあては、取り組みの過程において意識化しやすく、達成への意欲も高まる。達成の喜びを味わうことで、活動そのものに喜びや楽しみを見出すことができるようになり、「陰ひなたなく取り組む姿勢」が育っていくと考える。

**(d) [自己認知] (自己理解) めあてと行動**

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、4段階の『大人の支援を受け、自分のめあてを感じ活動に取り組む』から、7段階の『自分のめあてを常に意識し、振り返りながら活動に取り組む』までである。

自分のめあてを意識して取り組むことで「陰ひなたのない取り組みの姿勢」が育つと考えるので、まずは、大人の支援を受けながらでも、自分のめあてを感じたり意識したりして活動に取り組んで欲しい。生徒のなかには、自分で常にめあてを意識して活動に取り組むことが難しいもの

もいる。頻繁に声かけを受けることで自分のめあてを思い出して取り組むことができる生徒には、声かけの回数が少なくなってもできるような支援の工夫をしていきたい。

また、声かけだけでなく、めあての板書や、めあてを書いたしおりなど、生徒たち一人ひとりがめあてを意識できるような手立てを講じている。本校の研究紀要第14集「子どもの内面に焦点を当てた評価のあり方と授業改善」において、「生徒の内面に焦点を当てた形成的評価を行うことにより、生徒の内面の変容に迫る授業改善が可能になる」ことを明らかにした。めあての評価においても、掲示やしおりを使って形成的な評価を行うことで、めあての達成への意欲が高まり、それがまためあてを意識した行動へとつながっていくと考える。

#### (e) 【仕事】（取り組み）役割の理解

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、6段階の『指示されたとおりに最後まできちんと行う』から10段階の『自分の分担したことをいつも忘れず最後まできちんと行う』までである。

6段階の『指示されたとおりに最後まできちんと行う』ことができる生徒は、9段階の『任せられた役割に主体的に取り組む』ことができるようになっていくと考える。自分がしなければならないことを、まずは言われたとおりにやってみることから始めて、自分が何をしなければいけないのか理解する。そして周りの様子から気づいたり、自分の分担を意識したりしてできるようになると考える。要するに、「陰ひなたなく取り組む」ためには、自分の役割を理解してそれを意識して取り組むことが大切である。

実際の指導においては、学級の係活動や生徒会での活動、作業学習などにおいて、自分の役割を意識して活動に取り組むような場面がある。「何をしなければならないのか」という内容の理解については、生徒一人ひとりの理解の程度により、視覚的な手がかりを多用するなどの工夫を行っている。内容の理解も大切であるが、なぜそれをしなければいけないのかということを知って取り組むことが、「陰ひなたのない取り組み」において重要である。自分がその役割を果たすことの大切さを生徒自身が納得できることで、他者に見られていなくても地道に活動に取り組む姿勢が育つと考える。そのための理解のさせ方について、指導の工夫をしていきたい。

#### (f) 【仕事】（取り組み）向上心

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、4段階の『示範をよく見る』から10段階の『自分のめあてを常に意識し、振り返りながら活動に取り組む』までである。

「陰ひなたなく取り組むことができる」生徒は、示範をよく見て理解して取り組もうとしたり、教師の助言を素直に聞き入れて取り組んだり、自分のめあてを意識してもっと上手になろうという意欲をもって取り組んだりしている。研究紀要第13集において、高等部の生徒に育てたい主体性の一つとして、「自信ややりがいを感じながら向上心をもって取り組む姿勢」が大切であると考えた。このことから、この小項目の指導内容の段階をおって指導していき、向上心を育てていくことが大切である。

実際の指導においては、生徒たちが自分から上手になりたいという気持ちをもてるような発問や板書や掲示を工夫することで、「先生はあんなに言ったけどもっとできる！」という気持ちや、「ここを頑張れば次はあんなことができる」という見通しをもたせて、いろいろな活動に取り組みさせている。運動会の組体操の練習はとてきつものであるが、「もうここで君たちの力はおしまいだらう」という教師の言葉に発奮して、「まだできます」「もっと上手になります」という言葉が生徒たちから自然に出てくる。そうやって取り組んでいる生徒たちは、褒められるために頑張ることをこえて、組体操を自分たちの力で成功させることに集中している。こういう姿をもっといろいろな場面で見ることができるよう指導をしていきたい。

(g) 【仕事】（取り組み）持続

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、7段階の『手を休めずに作業を続ける』から10段階の『どんな仕事でも常に最後まで粘り強く続ける』までである。

この小項目では、教師に言われて作業を続けている姿から、その仕事に充実感を感じてきついても頑張っている姿への変容がみえる。9段階や10段階の指導内容は、まさに「陰ひなたなく取り組む姿勢」といえよう。

実際の指導場面としては、作業学習や校外実習・現場実習で持続力を高める場面が多く設定されている。多くの生徒が8段階の『好きな作業なら自分から最後までしようとする』生徒たちであるので、得意なことへの取り組みをとおして自信をもたせることで、きついことや苦手なことでも頑張ることができるようになっていくと考えている。きついことや苦手なことでも、なぜそれをしなければならないのかわかったり、上手になることで向上心をもったりすることで、人が見ていなくても持続して取り組めるようになるであろう。いろいろな場面で、少し難しいが頑張ればできる課題に取り組ませることで、一生懸命頑張った後の達成感を味わい、人が見ていなくても頑張ることができる「陰ひなたのない姿勢」が育っていくと考える。

(イ) 厳選の視点23「自制心（我慢することや粘り強さ）」

自制心とは、自分がおかれている状況を理解し、そこで自分がどうあるべきかを判断して、ふさわしい行動がとれる内面の育ちであるととらえている。自制心が育つために必要と考えることが、内容表試案にどのように位置づけられているか、いくつか取りあげて説明する。

[大項目]	(中項目)	小項目
学校生活	集団活動	集団意識，指示行動，活動の意味の理解，協力
	生活リズム	一日の生活，一年の生活，日程表を考えた行動，活動の準備
	儀式	儀式の参加
家庭・地域生活	乗り物の利用	マナー
仕事	取り組み	手順の理解，静的体力，持続
	安全	危険場所，道具・機械
身体	歩く	行進，長距離歩行
	走る	長距離走
	基本の動き	姿勢
	トレーニング	サーキットトレーニング，筋力トレーニング
自己認知	自己選択・自己決定	活動計画

(a) 【学校生活】（集団活動）集団意識，指示行動，活動の理解，協力

自制心を育てるために大項目【学校生活】で大切な指導内容は、中項目（集団活動）の『「集団意識」』『「指示行動」』『「活動の理解」』『「協力」』という小項目にある。

これらの小項目では、自分が学級や高等部などという集団に所属しているという意識をもち、集団で取り組むことを楽しんだり、指示に応じて行動したり、活動内容を理解して参加したりすることをおして、友達と協力することに気づいて、自分の役割に取り組むことができるようになって欲しいと考えている。また、そのような取り組みの過程で自分のおかれている状況が理解でき、我慢をするべきときには我慢ができるとか、制止の指示に素直に応じることができるという自制心が育っていくものとする。

実際の指導においては、活動内容を理解することが自分がすべきことを理解することにつな

がるので、生徒の理解の仕方の特性に応じて内容の理解ができるように工夫している。また、友達がしていることに注目させることで、内容の理解だけでなく、友達との協力が自然にできるような場面を設定している。生徒一人ひとりに応じた個別のかかわりも大切であるが、集団の場で一人ひとりの力を高めていくことで、社会に出たときにも自分のおかれた状況がわかって、それにふさわしい行動がとれるようになると思う。

**(b) 【学校生活】(生活リズム) 一日の生活, 一年の生活, 日程表を考えた行動, 活動の準備**

自分がおかれた状況のなかで、情緒的に安定して活動に取り組むためには、学校生活やこれから取り組む活動の見通しをもつことが大切である。そこで、小項目「一日の生活」「一年の生活」「日程表と行動」「活動の準備」のなかに、見通しをもって学校生活を送るための指導内容が取りあげられている。

実際の指導では、朝の会で日課を確認したり、帰りの会で翌日の日課や準備物をメモしたりする活動をとおして学校生活に見通しをもたせたり、文化祭の取り組みのなかで、活動計画を生徒たちに考えさせることをとおして、自分で見通しをもって主体的に取り組むことができるような指導をしている。周りの人から教えられて見通しをもつだけでなく、自分で考えて見通しをもつことができるようになれば、卒業後も、場や状況の変化に対して情緒的に安定した行動がとれるようになると思う。

**(c) 【家庭・地域生活】(乗り物の利用) マナー**

自制心を育てるために大項目「家庭・地域生活」で大切な指導内容として、「マナー」という小項目がある。「マナー」はいろいろなことについて考えられるが、ここでは、乗り物の利用のマナーについて説明する。

これまでの経験や校外学習などとおして、高等部の生徒たちは乗り物の利用のマナーを知っている。しかしながら、教師や保護者の目がない場で友達とふざける生徒もいる。注意を受けるとしてはいけないことがわかり行動を改めることができるが、注意されなければ自分の行動がよくないことに気づいていないことがある。人から言われて自分の行動を改めるのではなく、自分自身のなかに「してよいことといけないこと」の規範をもち、自分で判断して行動できるようになって欲しいと考える。他者の評価を客観的に受けとめることができるようになるこの時期の生徒であれば、上述のような規範を自分自身のなかにもつことができるようになるであろう。

通学や現場実習の通勤では、家庭や現場実習先の協力を得て、生徒に知らせないで通勤・通学の様子をチェックするなどして、その場できちんとした指導を行うようにしている。在学中にそのような指導をすることで、卒業後の生活においても、自分で判断して場や状況にふさわしい行動がとれるようになって欲しいと考える。

**(d) 【仕事】(取り組み) 静的体力, 持続**

自制心を育てるために大項目「仕事」で大切と考える指導内容を、中項目(取り組み)のなかの「静的体力」「持続」という小項目で説明する。

これらの小項目では、仕事の場で、きついことや苦手なことも根気強く続けたり、長時間立ち作業や座った姿勢で作業を続けることが取りあげられている。これらの指導内容を段階をおって指導していくことで、我慢強く作業に取り組む態度や、目標を達成するまで粘り強く取り組む態度が育っていくと考える。

実際の指導においては、時間割のなかで作業学習の時間を連続して設定して、単調な繰り返しの作業や黙々と取り組まなければならない作業に取り組ませることも多い。いろいろなしたりほんやりしたりする様子が見られる生徒もいるが、自分に任せられた役割を意識して、長時間持続して取り組むことができるようになってきている生徒も多い。

(e) [身体] (歩く) 行進, 長距離歩行 / (走る) 長距離走

(トレーニング) サーキットトレーニング, 筋力トレーニング

我慢強さや粘り強さを支えているものには、体力がある。大項目 [身体] において高等部で扱う指導内容のなかで、自制心を支える体力に関するものが上記の小項目である。

「長距離歩行」や「長距離走」では、完走できる体力とともに、きつさを乗り越えてゴールまで頑張ろうとする精神的な強さを育てることを大切にしている。「トレーニング」においては、いろいろなトレーニングをとおして筋力をつけることが、働くための体力作りとして必要であることを生徒たちが自覚して取り組むことが大切であると考えられる。

実際の指導においては、朝の運動でのトレーニングや長距離走、校外合宿での長距離歩行などの指導場面で、肉体的なきつさを経験することで、それを乗り越えていく体力とともに精神力を育てていこうとしている。高等部という青年期に体力の向上を図ることの大切さを家庭にも伝え、余暇においても体を動かす楽しみとともに、体力向上を図るような活動に取り組むように働きかけている。

(f) [自己認知] (自己選択・自己決定) 活動計画

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、3段階の『自分がしたいことかどうかを表現する』から7段階の『他の人との意見を調整しながら、自分がしたいことを決める』までである。

この小項目で、自制心という視点から、高等部で大切にしたいことは、自分の思いを表現するだけでなく、自分の思いが他の人と違ったときには、他の人の意見も聞き自分はどうすればよいのか考えるということである。

文化祭の模擬店や卒業記念制作を何にするのかという話し合い活動において、一人ひとりが自分の意見を言うだけで、なかなか話し合いが進まないことがある。活動の目的に照らし合わせてどうなのかという視点を提示して、それぞれの思いの背景にある理由を聞き合うことをさせて、「それでは自分はどう判断すればいいのか」と揺さぶりをかけると、自分の思いだけではなく、友達の意見を取り入れて判断をすることができるようになる。卒業後も、自分の意見を主張するだけでなく、他の人の考えを受け入れて、よりよい判断ができる大人になって欲しいと考える。

(g) 厳選の視点24「将来への前向きな姿勢 (自己理解, 自己選択・自己決定)」

自分のことを理解して、自己選択・自己決定する将来に対する前向きな姿勢が、卒業後の生活を考えるうえで大切になってくる。自己選択・自己決定に関する指導内容が、内容表試案にどのように位置づけられているか説明する。

[大項目]	(中項目)	小項目
自己認知	自己理解	めあての反省 適性と行動
	自己選択・自己決定	活動計画, 外出計画, 余暇の過ごし方, 進路選択・進路決定, 選ぶ
身辺生活	コミュニケーション	意思伝達
家庭・地域生活	将来の生活	卒業後の生活, いろいろな職業, 卒業後の楽しみ

(a) [自己認知] (自己理解) めあての反省

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、4段階の『大人の支援を受け、自分の取り組みを振り返る』から9段階の『自分のめあての反省を、次の行動に生かす』までである。

高等部段階では、めあてを書いたしおりに自己評価を記入したり、実習先からの評価を見て理解できるようになっている生徒も多い。また、実習の様子をビデオで振り返って、めあての達成

ができていたかどうか考えることができるようになってきている。また、自分自身の反省だけでなく、実習先の人々の評価を聞いて自分自身のことを知ることができるようになってきている時期である。

そこで、この指導内容を段階をおって指導することで、めあてを意識して活動に取り組んだ結果を自分のこととして振り返らせ、次に生かすことができるようにしたい。自分自身のことを客観的に理解することは、たいへん難しいことであるが、自分のことを知ってこそ、よりよい自己選択・自己決定ができるようになると思う。上に述べたような取り組みを重ねていくことで、生徒たちは少しずつ自分のことを理解できるようになっていくであろう。

#### (b) 【自己認知】(自己理解) 適性と行動

この小項目における高等部で扱う主な指導内容は、4段階の『自分の好きなこと嫌いなことがわかる』から10段階の『自己評価と他者評価が客観的にわかる』までである。

高等部の生徒たちは、活動に取り組むことをとおして好き嫌いの理由などがわかっていくなかで、自分の得意なことや不得意なことを知り、自分のよさとともに、直していかなければならない自分の課題がわかるようになってきている。そして、頑張ればできることもあるが、援助を受けなければ自分一人ではできないことがあることも知っていく。客観的な自己理解をすることはたいへん難しいことであるが、他者の評価を受け入れ、自己評価との違いに気づき、少しずつ客観的な自己理解に近づいていくものとする。

実際の指導においては、自分の気持ちを素直に表現させることで本音を引き出すことを大切にしている。「自分はこの仕事がしたい」という思いを、他者の評価を気にして言わないままでは、自分の適性に気づくことはできない。言ってみて、やってみることで自分の適性に気づくことができるであろう。本校の研究紀要第12集「自立を支える指導法の研究」で、「やってみる」プロセスにおいて、適切な手だてを行えば、生徒が直面している課題に自ら気づき、課題を解決することができると思った。自己理解においても、まずやってみることをとおして、自分の適性に気づいていくであろうとする。

#### (c) 【自己認知】(自己選択・自己決定) 活動計画、外出計画、余暇の過ごし方、選ぶ

小項目「活動計画」「外出計画」「余暇の過ごし方」では、自分がしたいことを自分で決めて、主体的に取り組むことができるようになることを大切にしている。

生徒たちは、卒業後は、平日は仕事をして休日は余暇を楽しむという生活を送る。余暇を過ごすにあたっては、自分がしたいことを一人で、あるいは友達と一緒に楽しんで欲しい。余暇において心身をリフレッシュすることで、仕事への意欲も高まり、適度な緊張感をもって仕事に取り組む、自分の仕事に満足感を感じることに繋がっていくものとする。

「活動計画」「外出計画」「余暇の過ごし方」に関する実際の指導については、③「余暇」における内容のとらえについて詳しく述べているので、ここでは、省略する。

また、「選ぶ」という小項目では、自分の欲しいものを選ぶことから、所属したいクラブを選ぶことまでが、指導内容として取りあげられている。いろいろな「選ぶ」場面で、自分の思いが尊重される経験をしていくと、自分の気持ちが素直に出せるようになると思う。高等部生徒たちのなかには、自分が選んだ理由を言葉で表現できる生徒もいる。また、「どうしてそれがいいの?」と揺さぶりをかけることで、選んだ理由を考えようとする生徒もいる。そこで、どうしてそれを選ぶのかという理由に迫ることで、選んだことに対して責任をもって取り組むような指導が必要であるとする。

#### (d) 【自己認知】(自己選択・自己決定) 進路選択・進路決定

この小項目においては、自分自身の進路を自分で考えて決めることを段階をふまえて指導して

いく。

生徒たちは、したい遊びを自分で決めたり、所属したいクラブを自分で決めたりする経験を小学部や中学部でしてきた。そのときには、「ただそれがしたいから」とか「おもしろそうだ」という理由でもよかったであろうが、進路の選択・決定にあたっては、自分の適性を知り、いろいろな条件を考えて決めなければならない。この小項目では、自己理解のうえに進路選択・進路決定ができるようになることが大切である。

実際の指導にあたっては、まず自分の本音を引き出すことを大切にしている。周りの意見に同調して自分の本音を出せないままでは、本当に自分がしたい仕事や生活を考えることができない。「お母さんは～がいいと言ってくれるけど、私はこの仕事をしてみたい」という気持ちがあってこそ、そのために頑張ってみようという気持ちも出てくる。そして頑張ってみたけれど無理だとわかったときに、他者の意見を素直に自分のなかに受け入れることができるようになるであろう。生徒のなかには、自分の卒業後について具体的なイメージがもてないで、保護者の考えに左右されて、自分の意見が二転三転する者もある。そのような生徒にも、「好き嫌い」から「得意、不得意」「自分の適性」という段階をふんで指導をすることで、自分の考えをきちんと表現できるようになると考える。そうなることで、他者の意見にも素直に耳を貸し、自分の考えを修正することができ、適切な進路選択・進路決定ができるようになると思う。

#### (e) 【身近生活】(コミュニケーション) 意思伝達

自己選択・自己決定にあたって、この小項目で大切にしたい指導内容は、4段階の『はい、いいえの意思表示ができる』から、10段階の『相手の気持ちを考えながら話をする』までである。

自己選択・自己決定にあたっては、まず自分の本音をきちんと出させたいということの前項において述べたが、このことに関するものが、「意思伝達」の小項目である。自分の本音を表現するといっても、言葉で他者にわかるように表現するのが難しい生徒には、4段階の『はい、いいえの意思表示ができる』や5段階の『いくつかの選択肢から選んで答える』という指導内容が必要となるであろう。生徒の実態によって、表現手段や方法は違って来るであろうが、段階をおって指導していくことで、自分の思いを伝えることができるようになると思う。

実際の指導にあたっては、選択肢を使って表現させる場合には、選択肢が生徒の本音に迫ることができるように、生徒の内面にふみこんだ教材研究を大切にしている。また、生徒の気持ちの流れや考えが理解しやすいようにしたチャート式の図は、自己選択・自己決定だけでなく、自己理解にも有効である。日常のいろいろな場面で、言葉や選択肢、あるいは身振りやサインなどで、自分の思いをきちんと表現させることが、自己理解や自己選択・自己決定につながっていくものと思う。

#### (f) 【家庭・地域生活】(将来の生活) 卒業後の生活、いろいろな職業、卒業後の楽しみ

これらの小項目には、卒業後を考えた指導内容が取りあげられている。

卒業後は学校生活から一変して「仕事」を中心とした生活になる。その具体的なイメージをもつことができるよう、卒業した先輩たちの事例をとおして、卒業後にどのような仕事や仕事の間があるのか、どのような生活の間があるのか、休日はどのように過ごしているのかということを知らせていく。そして、自分ならどんな仕事をして、どこで暮らしたいかなど、自分に照らし合わせて将来のことを考えさせるようにしている。

実際の指導にあたっては、高等部の3年間をとおして段階的に指導していくことで、少しずつ社会人となることが実感できるようになり、「すてきな大人になりたい」という意欲をもっているいろいろな学習に取り組むことができるようになる。身近な先輩の事例をとおして学習することで、自分のこととして考え、具体的なイメージをもちやすくなる。また、現場実習先見学や進路先見



学などでは、「自分が来年はこんな仕事をしたり、卒業したらこんな所で仕事をしたりするのだ」という気持ちをもって自分の目で直接見ることで、将来の生活への思いがさらに深まっていくと考える。在学中に将来の生活に対する具体的なイメージをもたせることが、将来に対する前向きな気持ちを育てるために必要である。

(松下幸美)

## 5 まとめと今後の課題

高等部の研究はアセスメント機能をもつ小・中・高等部一貫した内容表試案を作成するために、高等部段階で必要な指導内容の厳選を行うとともに、それらを一貫教育の視点から内容表試案に位置づけることを目的として行われた。

指導内容厳選の視点はP.148～P.157に示したとおりであり、それぞれの視点によって厳選された高等部の指導内容が内容表試案にどのように位置づけられているか検討を行った。その結果、他部との調整によって、他部の指導内容に統合されたり指導内容の表現や段階などに修正が加えられたりしたものもあるが、それぞれの指導内容が4段階から10段階を目安として内容表試案に位置づけられていることが、明らかとなった。

高等部の厳選の視点の特徴は次のことが考えられた。

### ① 「自己理解、自己選択・自己決定」という視点が盛り込まれていること。

この視点については本校において研究紀要第12集（1995）から、新しい自立観に基づいた指導法の研究が継続して行われてきた。しかし指導内容としての位置づけはなされていなかった。今回の研究においては、過去の研究の成果を基に、どのような場面でどのような選択・決定をさせるかという指導内容のレベルとして内容表試案に位置づけられた。例えば、公共施設の利用として、生徒たちが卒業後の生活支援を自ら選びとることができるようになって欲しいという意図から、「市役所の障害福祉課」や「更生相談所」といった相談機関が新たに選択されるなどした。また、外出計画の立案といった日常生活レベルにおける自己選択・自己決定に関する指導内容も位置づけられた。高等部では「進路の自己選択・自己決定」また「卒業後の生活における自己選択・自己決定」に向けて、在学時にどのような自己選択力をつけることが必要か、それが明確に示されたことの意義は大きいと考えられる。

### ② 現行の教育課程編成時と同様の不易の視点、つまり、生徒たちが現在そして学校卒業後の生活を主体的に送るために必要な知識・理解・技能面の視点が盛り込まれていること。

今回の研究では指導内容を厳選しそれらを内容表試案に位置づける作業を行った。その結果、公共施設として時代に即したものが選択されるなど、社会の変化との関係で変更が加えられた部分もあった。しかし、「仕事」の CATEGORY を例にとると、厳選の視点として「作業を行ううえでの態度」「対人関係」「手指機能」「理解」「持続力」「作業に対する喜び」があげられた。これらの視点は現在の時代に即して高等部の教官で討議して設けたものであった。しかしそれと同時に、これらの視点は現教育課程編成時においても大事であると考えられたものでもあった。つまり、時代が変わろうとも変化しない視点、つまり不易の視点であることを再認識することができた。「仕事」を例としてあげたが、他のいずれの CATEGORY（「生活」・「余暇」・「態度」）に関しても同様であった。この背景としては、「いかに知的に障害があろうとも、最大限に力を発揮して生きることが自己実現につながる」という現行の教育課程編成時と変わらない考えが脈脈として受け継がれているからであると考えられた。そしてこれらの不易の内容を「なぜ、この指導内容が必要であるか」を深く理解して指導していくことで、将来生徒たちをとりまく環境がいかに変化しようともその変化に対応できる生徒が育てられると

考えられる。

- ③ 完全学校週5日制の実施にかかわって地域参加に関する視点が分化してより詳細に位置づけられたこと。そしてそのなかに社会参加の幅を広げる一方で、「危機管理」に関する視点が新たに位置づけられたこと。

地域参加に関しても、現教育課程編成時において考えられていたことであった。しかし、完全学校週5日制の実施に向けて改めてそれらの重要性が再認識され、現教育課程編成時に比べより詳細なレベルで厳選の視点が設定された。これは、完全学校週5日制の実施によって家庭・地域での生活が増えるという物理的な理由からでなく、生徒たちに「地域で普通の生活を送って欲しい」、また、「学校卒業後も地域で学び続けて欲しい」という願い、つまり、ノーマライゼーションや生涯教育といった考えに基づいたものである。また、その一方で、社会に積極的に参加することで、当然危険も増えるであろう。そのために「危機管理」に関する視点も新たに加えられた。このことによって、生徒たちの真の社会参加が可能になると考えたからである。

このように高等部の厳選の視点は、これからの高等部教育を指向するうえで必要な背景を備えたものである。そして、このような背景を備えた厳選の視点によって厳選された指導内容の一つひとつも当然このような背景を備えたものであるが、それが生徒の指導の根幹となる中核的な指導内容として内容表試案に位置づけられたことは、今回の研究における大きな成果であったと考えられた。

しかし、今回作成した内容表試案は、あくまでも試案の段階であり今後も見直しが必要である。最後に内容表試案に関して今後の課題を述べる。

- 指導内容の過不足、例えばコンピュータや携帯電話といった新たな情報機器の扱いなど、について検討すること。
- アセスメント機能をもたせることを念頭において作成したが、真に評価可能かどうか検討を行うこと。評価が難しいものについては、その表記に改善を加えること。
- 内容表試案の「個別移行支援計画」としての活用の在り方について模索すること。

(宮崎耕二)

#### 《文献》

- ・妹尾正 (1989)：ノーマライゼーション。『発達の遅れと教育』別冊①教師のための福祉・就労ハンドブック。全日本特殊教育研究連盟編集委員会（編）。日本文化科学社。12-13
- ・梅永雄二 (1999)：自閉症者の職業リハビリテーションに関する研究－職業アセスメントと職業指導の観点から－。風間書房
- ・大野智也 (1989)：QOL (クオリティー・オブ・ライフ)。『発達の遅れと教育』別冊①教師のための福祉・就労ハンドブック。全日本特殊教育研究連盟編集委員会（編）。日本文化科学社。14-15
- ・大野由三 (1992)：精神遅滞児の教育－教育課程の編成と指導。めいけい出版
- ・大南英明 (2000)：改訂盲学校、聾学校及び養護学校学習指導要領の展開。明治図書出版株式会社
- ・尾崎祐三 (1989)：進路指導における個人別資料の作成と活用。『発達の遅れと教育』別冊①教師のための福祉・就労ハンドブック。全日本特殊教育研究連盟編集委員会（編）。日本文化科学社。
- ・尾崎祐三 (1989)：養護学校高等部における進路指導の進め方。『発達の遅れと教育』別冊①教師のための福祉・就労ハンドブック。全日本特殊教育研究連盟編集委員会（編）。日本文化科学社。26-27
- ・加藤孝次・中澤米子 (1996)：学校五日制と教育課程の創造。黎明書房
- ・上岡一世 (1998)：親と教師で取り組む障害児教育9家庭との連携で就労＝自立を実現する教育。明治図書出版株式会社
- ・小出進 (1989)：雇用と就労の概念。『発達の遅れと教育』別冊①教師のための福祉・就労ハンドブック。全日本特殊教育研究連盟編集委員会（編）。日本文化科学社。10-11
- ・佐藤三郎 (1993)：生涯学習時代の学校教育－共通の基礎・基本とは何か。東信堂
- ・竹田契一 (1995)：インリアル・アプローチ。竹田契一・里見恵子（編著）。日本文化科学社。
- ・田島良昭 (2001)：楽しく働き、いきいき暮らす [コロニー雲仙の挑戦②はたらく編]。ぶどう社
- ・常友高明 (1990)：時刻・時間の指導。全日本特殊教育研究連盟編集委員会（編）：発達の遅れと教育第389号・6

- 月号. 36-39. 日本文化科学社.
- ・手塚直樹(1989): 就労支援の窓口-公共職業安定所, 障害者職業センター, 雇用促進協会, 労働基準監督署等. 『発達の遅れと教育』別冊①教師のための福祉・就労ハンドブック. 全日本特殊教育研究連盟編集委員会(編). 日本文化科学社. 90-91
  - ・林角郎(2001): はじめての花作り. 新星出版社
  - ・長崎大学教育学部附属養護学校(1981): 教育課程の編成-教育課程編成の手順をさぐる-. 研究紀要第5集
  - ・長崎大学教育学部附属養護学校(1993): “自らが生活を充実させようとする”教育を求めて. 研究紀要第11集
  - ・長崎大学教育学部附属養護学校(1995): 自立を支える指導法の研究-自ら考えて行動する子供を育てる授業のあり方を探る-. 研究紀要第12集
  - ・長崎大学教育学部附属養護学校(1997): 子どもの内面に焦点を当てた評価のあり方と授業改善-一人ひとりが主体的に取り組める授業をめざして-(その1: 診断的評価から目標設定を考える). 研究紀要第13集
  - ・長崎大学教育学部附属養護学校(1999): 子どもの内面に焦点を当てた評価のあり方と授業改善-一人ひとりが主体的に取り組める授業をめざして-(その2: 形成的評価から授業改善の方法を考える). 研究紀要第14集
  - ・日経連障害者雇用相談室(2001): 障害者雇用マニュアル. 日経連出版部
  - ・日本知的障害福祉連盟(1999): 発達障害白書-2000年版-. 日本文化科学社
  - ・日本知的障害福祉連盟(2000): 発達障害白書-2001年版-. 日本文化科学社
  - ・羽豆成二(1996): 小学校学校週五日制に対応した教育課程の編成・実施と授業改善. 文教書院
  - ・樋口満(1999): 盲学校, 聾学校及び養護学校学習指導要領. 時事通信社
  - ・平井信義(1991): 3歳児の保育. ひかりのくに株式会社
  - ・平井信義(1991): 4歳児の保育. ひかりのくに株式会社
  - ・平井信義(1991): 5歳児の保育. ひかりのくに株式会社
  - ・平沢茂(2000): 新教育課程実践キーワード. 教育開発研究所
  - ・福岡稔(1990): 時刻・金銭の指導. 全日本特殊教育研究連盟編集委員会(編): 発達の遅れと教育第389号・6月号. 44-47. 日本文化科学社.
  - ・松矢勝宏(2001): これからの移行支援-協力者会議報告「21世紀の特殊教育の在り方について」をふまえて-. 発達の遅れと教育第531号・11月号. 全日本特殊教育研究連盟(編). 日本文化科学社. 4-7
  - ・文部省(1984): 数の本☆☆☆指導書-養護学校(精神薄弱教育)中学校数学科教科書指導書-. 東洋館出版株式会社
  - ・文部省(1987): 精神薄弱教育における体育指導の手引き. 東洋館出版株式会社
  - ・文部省(1988): 日常生活の指導の手引き. 慶應通信株式会社
  - ・文部省(1995): 作業学習指導の手引き(改訂版). 東洋館出版株式会社
  - ・文部省(1999): 小学校学習指導要領解説算数編. 東洋館出版株式会社
  - ・文部省(2000): 盲学校, 聾学校及び養護学校学習指導要領(平成11年3月)解説-各教科, 道徳及び特別活動編-. 東洋館出版株式会社
  - ・山口薫(1989): 精神遅滞者の社会参加とは. 『発達の遅れと教育』別冊①教師のための福祉・就労ハンドブック. 全日本特殊教育研究連盟編集委員会(編). 日本文化科学社. 6-7.
  - ・山口薫・金子健(2000): 改訂特殊教育の展望-障害児教育から特別支援教育へ-. 日本文化科学社
  - ・山下宏子(1990): 集合数・順序数の指導. 全日本特殊教育研究連盟編集委員会(編): 発達の遅れと教育第389号・6月号. 16-21. 日本文化科学社.